
遺海の箱庭

黒霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遺海の箱庭

【Nコード】

N2360Q

【作者名】

黒霧

【あらすじ】

西暦二八一五年。この星に人はいない。人類含む地球上の諸々の生命は、二四三三年、突如始まった海水面の上昇を経て星からの脱出を余儀なくされた。彼らは機械仕掛けの竜に乗って星から脱出し、現代では星にはあるのは文字通りの【遺り物】ばかり。そんな、暗い暗い海の底にて繰り広げられる、星の遺り物達が織りなしていく遺海の物語。

SFの皮を被ったファンタジイ。もしくはその逆。

001 深海の日向

人類がこの星から立ち去って、約四百年後の海の中。残されたのは、彼らの脱出を支えた機械の生命達と。そして、うっかり置いてきばりをくった男が二人だけだった。

世界にしつとりと溶け込んだ黒色を、するりと斜めに切断する銀色の姿が泳いでいく。音はなく、あつたとしても聞き取ることができない者はここにはいない。ただその存在を感じて、生き物たちは離れていく。そして離れていった後を、それはするりと通っていく。

とがった顎。突き出た鼻先から額までの鋭さを経て、頭部を過ぎ、細い首を経て流線型の胴体に接続される。しつかりとした肩から腰まで少し膨らんだ体を、薄い翼が包んでいる。そして尻から突き出た太い尻尾。

体長十メートルを超える鋼の竜。それが大竜と呼ばれる、意志を持つ小型の潜水艦の姿である。その複雑な制御機構はCサイバーBブラッドと呼ばれる仮想人格システム（AIのようなもの）により制御されている。

今現在、この大竜・ケケットの行く先を決める意志は、仮想人格ではなく、コクピットの搭乗者の手の内にある。つまり、自分、トキアキの手に。

トキアキはケケットのコクピットのやわらかいシートに、半ば埋もれるように座っていた。どこか焦点のあわないその目は、どこか淀んでいる海の間を見つめている。二十代前半の顔立ちは、この間に相応しく湖面の底のように静かなものと思われる。何も考えていないときは無表情で有名なのだ。

しかし、それが不意にしかめられた。日本人としては標準的な背

丈の体の中から、小さい虫がぶつぶつと沸いてきたような不快感に
思わず、身じろぎする。

「……………、はあ」

ため息がこぼれて、そつと空中に溶け込んでいく。このねつとり
と濃い闇が海であることを知っているからか、反響するという印象
は薄い。口にすれば絡め取られ、声を発すれば溶け込んでいき、ま
るで存在そのものが無かったかのように何もかも吸収していくイメ
ージがある。

上下左右、全方向を表示するこのコクピットも、海の中ではあま
りに無意味だ。　　本当は画像処理をかけてもつと見やすい風景に
もできるのだが、今は訓練ということで視覚に頼るのを禁止されて
いる。

なお、この訓練を指示したディックによれば、

「海なら震動もわかりやすいだろ？　船体を流れる水の間を掴め」
との事であり、もちろん一秒と置かず「バカかお前」と反論した
あげく喧嘩して負けたのは記憶に新しい。二十代の男（と書いてバ
カと読む）二人が何をやっているんだか、とは、それを見ていた猫
型ロボット、タマの言である。

それにしても、と思考を現実寄りに引き戻す。ディックの言い分
はさっぱりだ。そろそろこの潜水艦……と言うと、ケケットが怒る
のを思い出した。ケケット曰く「空も宇宙でも飛べるから潜水艦じ
やない」らしい。なので以後まとめて竜と呼ぶことにして……。

竜の操船自体は通算六十時間にはなるのだが、トキアキは未だ、
水の感覚しか捉える事ができない。だがそれだけだ。辺りに何があ
るのかはわからないから、この闇の風景ではしばらく泳いでいるう
ちにすっかり寝こけてしまうのだ。

最初はそうでもなかったんだがなあ、とぼやく。もつともそれは、
前に進んでいるか後ろに戻っているのかすら掴めないからだ。緊
張で頭が沸騰して皮膚からは冷や汗が止まらず、海底を削った時の
震動は心身全てをシェイクした。吐かなかったのが不思議なくらい

の緊張感が、トキアキから睡魔を駆逐していた。

しかし、今では少し慣れて、どっちに進んでいるかくらいはわかってきた。例えば今なら、海流に押されて正面斜め下方向。緩やかな滑り台を下りるように移動している。なまじそれがわかるようになったせいで、妙な安心感が働いてうつらうつらとしてしまう。

もつとも、本当にそれだけしかわからないので、操船能力の完成にはほど遠い。例えば周りに何があるかなど、全然わからない。生涯、掴める気もしない。

というか、ディックの言った事を信じた俺がバカだったんだ、とかなり後悔していた。

意地になってないで、無理だったと言ってしまおうか。どういう会話になるだろうか。「無理だった」「んなわけねえだろ、もう少しがんばってみろ」。会話終了。あいつの性格を思い出すに、無理だと言えばそんなことはない、無理だったと言えばもう一度やろうかと言うはずだ。ダメだ、話にならない。

始めてしまった以上は成功させる以外あいつはきつと許さない。自分相手でも他人相手でも。……………正直、きついやつだった。

「トキアキ？」

「ん？」

考え事を都合良く一掃し、天井から響く声に注目する。ゆっくりと雨のように降り注ぐ声は、この竜、ケケットのものだ。歯切れのいい音は闇の中ではちばちと弾ける線香花火のように、一言一言が鮮やかだ。

「退屈じゃない？」

まあ、内容までは期待しない方がいい。こいつはこれで可哀想な子なのだ。……………作られた当初はもう少し無愛想な人格だったはずだが。ディックに甘やかされたせいだな。

あ。返事を忘れるところだった。

「退屈だな」しなくてもいいような返事なものも情けないので、記憶からランダムに変な表現を抽出する。「なんかボケろ」

「トキアキの頭には敵わないよ」

「時々思うけど、お前の方が人間っぽいな、ケケット」

「CBもこの三〇〇年間それなりに苦労してきた……らしいよ？」
他人事なもの無理はない。こいつはまだ建造されて数ヶ月年経っていないのだ。他のCBのように人間との交流も皆無だし、性格にも複雑さの深みをつけるのは難しい。母艦に戻れば、山にこもった仙人とか森の奥の魔女みたいな奇天烈なCBが溢れている。……正直、あの性格では人間とうまういかなかったというのも納得である。

西暦二八一五年。この星に人はいない。

二四〇〇年頃までは普通に地球での生活を営んでいた人類は、二四三三年に突如始まった海水面上昇を経て、星からの脱出を余儀なくされた。現代では星全てがまんべんなく水没している。

人々は海に沈む前に、ノアの方舟のように地球圏から離脱した。

ただし、神話とは異なるところが数点ある。本を数行書き換えたように散らばっている。

例えば、彼らは船ではなく竜に乗っていったという事。

大竜はその名の通り、竜を模した乗り物である。今乗っているケットのような小型艦から、一千万人規模で人を収容できる大型艦まで、ひとくくりにするには幅広いバリエーションがある。これは竜の名前を冠するだけあって出鱈目な代物で、深海から宇宙まであらゆる環境に乗り入れることができる。

星の水没から逃れるために実行された箱舟作戦では、数万からなる大竜の群が、さながら世界の終わりのように星の空を覆ったとかもつとも、さながら、などという表現ではなく。実際の所、人間にとつての地球はそのとき終わったのだ。二五二四年、地球から人間が消えた。

そして、竜を生産するために作られたCBが、この海に残された。

「ここは遺海だよ。私たちは、もう必要ないと捨てられたまま、朽ちることもできずに残ってる死体もどきだ」

この海全てが彼らの墓。遺体の眠る海。故に、遺海。

トキアキがコールドスリープから目覚めた後、最初に迎えた猫型CBは格好付けてそう言った。申し訳ない。回りくどさに閉口した以上の印象はこの心から霧散していた。

ところで、自分ことトキアキは、この星ではほぼ唯一と言っている人類らしい。

何の因果か、ある海底都市の中にコールドスリープ状態で埋もれていたらしい。残念な事にその因果を探る術はすでに闇の彼方である。何しろ、自分自身、覚えてないのだ。

目覚めた瞬間に「腹減った」とか言ったから天罰に記憶を奪われたのかもしれない。ないか。

実際の所は、自分の事にまつわる記憶がすっぱり抜け落ちていたのである。

が、どうもこれはトキアキが間抜けだったからだけではなく、コールドスリープの影響だと思われる。それはこのような間抜けが他にもいたから言えることだ。

そいつは残念な事に男だった。ディックという人間がそれである。彼もまたトキアキ同様、自分に関する記憶を失っていた。しかしその順応性の高さは猿かスライムかと言わんばかりで、CB達との共同生活にすっかり馴染みきっている。最近ではこのケケットに乗って気まぐれに散歩に出て変な遺跡に潜り、惨事を起こすのが日課だった。

考えたくない。思考を停止して別の向きへと切り替える。

さて、今日はトキアキ自身がディックより早くケケットを連れ出したので、ディックがやらかすとしたら母艦エクの内部のはずだ。

……、シット。額が万力で締められたように思いつきり歪む。

我ながら発想が狂ってる。なんで事が起こる前提で考えているんだ？

「今頃エクはどうなってるかなあ」

どうもこの竜の頭の中も似たような論理構造らしい。CB並の計算力の高さを誇る我が頭脳、と無理矢理誇ってみるけれど、正直、虚しいだけだ。瞳は砂漠のようにからっからで、涙一滴出てこない。

「そろそろ帰るか」

「そうだね。トキアキにしては今日は長い散歩だったね」

ぐりんと、体が右斜めに押しつけられる。ケケットは翼を緩やかに広げると、水竜を受け止めながら減速する左翼の先端を中心に、円を描くようにぐるりと回る。

頭の中で、その全てがイメージ出来た。……どうも、そのくらいには訓練の成果が現れたらしい。しかし……ふむ。これはディックに言うべきか否か。

「ケケット」

「帰りたくないって言っても駄目だよ」

「コクピットの画像補正」

「えー。それはルール違反」

「別に、しなくてもいいけどな。ディックに付き合わされるのはお前だ」

「……………」

無意味に意味深な言い回し。伝えられるべき言葉を伝わらないように口にする。

ケケットはしばしの間、ネジをぎりぎりと突っ込むような息苦しい沈黙を続けた後、観念した。ため息じみたノイズと共に、コクピットが映画館の上映終了見たくじんわりと明るくなっていく。

三百六十度全方位に展開される薄いブルーの景色。メーターも何も無い、水族館の中に放り込まれたような感覚に、瞬間、背筋がびりびりと痛んだ。

ややあつて画像補正された海中の景色が表示された。……………、で、だ。

肘掛け部分の、円筒形になったコントロールスロットからよいし

よと腕を引っこ抜く。膝をあげ、シートに抱きつくようにして背後を向く。そして正面方向を見てみれば。

ほら、な。

「……………ふむ」

灰色の直感が鈍色の確信へと変色する感觸を舌の中で転がして弄ぶ。ケケットも視覚化のための情報収集で気づいてしまった事だろう。そしてこいつは口が軽いから、ディックには絶対伝わってしま

う。やっぱり気づかないふりをしておけば良かったかな。心の中で後悔を一秒。そのぶん重たくなった頭を払うように、優越感を滲ませた言葉を口にする。

「どうだ？ 俺もずいぶん腕が上がっただろう」

口の端をつり上げて、ゆっくりと眼を細める。しかし、自慢なんという慣れない言い方をしたせいも、意志に反して頬がじんわりと紅潮する。けれどそれに気づかないふりをしたまま、小首を傾げ、滑らせるように左斜め上の天井へと流し目を送って、皮肉った。

ディックだったら拳か皮肉で返事をしてくる態度である。さて、返答やいかに。

「うん。トキアキすごいね！」

「……………、どうも」

空気読めよ。読めよ。心の中でぶつぶつ繰り返しながら、トキアキはシートに座り直す。首を曲げてがっくりとうなだれながら、肺の中の全てを絞り上げるようにしてため息をついた。

そつと、蓋をするように瞼を下ろす。それと同時にコクピットも暗闇に戻ったのか、瞼を肌色に照らす光もじんわりと消失していった。

瞼の内側に残されたのは、ちかちかとのたうつ残光。

そして、この背後に姿を認めた、灰色の海底都市の姿だった。

大竜エク。二キロメートル級大竜で、ネプトウヌス級と言う規格の竜である。箱舟作戦で置いてけぼりを喰らったこの竜は、今では大量のCBをその体の中に棲まわせて、日々をこつこつと生きている。

その姿は外から見るとバカでつかい蜥蜴に見える。小山のような頭部、ビルを数本束ねたような太さの首、肩から背中にかけての巨大な立体構造は一つの大陸をそのまま切り取ったように見えるほどだ。

その左脇腹にあたる出入り口からケケットは侵入。外装を抜けて水路に入り、くねくねと入り組んだ通路を経て、第二層の港へ到着した。ちよつとした湖くらいの広さしかない港でトキアキはケケットから下りた。背面のハッチから這いずり出て、左翼をつたつてすたつと、着地。

「じゃ、また後でね」

「うい」

ケケットは翼を水平に戻すと、ぐるりと向こうへと進んで行く。しばらく水面を滑っていたケケットは、やがて十分に距離を取ったところで加速。水飛沫を扇のように広げながら、派手に飛翔した。翼を左右に振って、トキアキの頭上を越えていく。後に残されたのは、髪をさらう程度の風と、霧雨のような水飛沫だけだった。飛翔音は聞こえない。滑らかな飛翔だった。

「そっけねえやつ」

どっちがだ。百億の声で突っ込み聞こえてきそうだったので、気づかぬふりで押し通し、さっさとエクの中を歩いて行く。

エクの中は広い。このクラスの竜になると基本設計段階で居住用空間が想定されている。天井は小型の竜が飛べるくらいには高いし、周囲の景色など、街が一つそっくりそのまま入っているのと変わらない。

ただし、そこには気配がない。左右に並んだ民家はどこか、展示場を思わせた。使わないのに手入れだけしている分、いっそう虚し

さが伝わってくる。

ため息をこらえる。塵一つ無い綺麗さが、ちくちくと肌を苛んでいく。スパイとして侵入したような感覚。トキアキの皮膚に突き刺さる、異物としての存在感。

しかしそれも、早足に二〇メートルも進んでいくとじわじわと様子が変わってくる。この辺りからは商店街になっていて、エクの中に住むC Bがそれぞれ趣味で服を作ったり料理を作ったりと好き勝手に生産に励んでいる。それがずらりと並んでいるのがこのあたりの商店である。基本的には艦内専用の通貨で取引が行われており、トキアキが日本人だったせいか、基準通貨は円と呼ばれている。

趣味で人間ごっこをしていると言えば、流石に嫌味と取られるだろうか。煉瓦造りの床を蹴り、微妙な気持ちを押し流す。

そうしてたどり着いた広場には、いくつもの白いテーブルと椅子が並べられている。その中心には、海の家と看板の置かれた小さな建物がある。風鈴を店先に吊した店には、今は誰もいない。普段ならキルシュトルテなる人型ロボット（ドール）が椅子に座って足をぶらぶらさせて、「あー、あちー」と嘘八百を並び立てているはずなのだが。

その代わり、今日は店に一番近いテーブルの上に、真っ白の猫が丸まっていた。ぴんととがった耳。長毛が体をふわふわとまるっこいタンポポみたく演出している。テーブルの端から垂れた尻尾が二又なのは、さて、何の意図があるのやら。

この艦内で二番目の古株のC Bの名前はタマと言う。彼女はトキアキが近づいて行くと頭を持ち上げ、にやと、猫らしくない声で鳴いた。

「今日は長旅だったね。ついにケケットに放り捨てられたかとわくわくしたよ」

「小さな心臓に負担をかけて申し訳なく思うよ」

「申し訳なく思うなら金をくれ」

「二トヤめて働いたらいいんじゃないか？」

「バカこけ。わたしや働かずに金を稼ぐのに燃えてるんだよ」

「ニートですらねえよお前は」

いつか、一撫で百円とか言い出しそうな勢いだ。この老齡のCBを向かいに、椅子を引きずってどさつと腰掛ける。プラスチックの柔な椅子が、ぐにやりと嫌な感触を尻から腰に響かせる。

「そう言うお前はニートやめたのかい」

「おい、人を駄目人間みたく言うな」寝ぼけてるだけだ、と頭の中に浮かんだ墓穴を記憶の向こうへ放り捨てる。「海底都市のことか？」

「ああ。ケケツトがさつきエクに伝えてたよ。あれは今時珍しい、竜巢じゃない、本物の海底都市だよ」

「何が違うんだ、それ」

「文字通り。竜巢は竜の巢。竜が生まれ、竜を癒す場所さ。竜を作るために作られた海底施設で、そこにおまけで人も住めるようになってる。が、海底都市は違う。あれは水没期に、一時的に人がやっていけるように作った物さ」

「へえ……」

……………ふうん。

つまり、自分みたいなのが見つかる可能性も高い、と。それは幸せな事なのかどうか。トキアキの頬が無様にひきつる。

「ディックは喜びそうだな」

「そうだね。あいつは人を見つけるのが生き甲斐になってるからね」タマは眼を細めて顔を洗う。「なのに、お前ときたら」

「あいつみたいない熱意は俺にはないよ」

そろそろ定番になりつつあるやりとりに、手軽に終止符をスタンブする。その会話を続けられると……なんか、ざわざわするのだ。

「まあでも、奇妙と言えば奇妙だよな」

「何がだい」

「あいつの方が、おまえらと馴染んでるだろ。なのになんでわざわざ人間探したりするんだ？」

「ふん。バカの考える事なんて私が知るかい」

タマは顔を洗うのを止めると、こちらに顔を向けてきた。目をじわりと細めていき、射貫くように金眼を輝かせる。

「エクの中で人間に会った事があるCBは私だけさ。私の飼い主さね。その飼い主はね、あんたとも、ディックとも違った。どこも似てないんだ。私には正直、あんたらの事はよくわからん」

やたら早口で言うタマに、トキアキはそうかと苦笑する。

「お前がわからなきゃ、他のやつにはもっとわからないだろうな」

「ふん。人間、お前がそれを言うかい」

「……………なんだよ」

「いや」タマは尻尾をふらりと振った。二又の尻尾が、磁石みたいに反発する。「単にね、お前達の方が、私たちよりわからない物だらけなんじゃないか思ってるね」

「……………あー」

言われてみれば、それもそうである。そりゃプログラム知性体は互いを簡単に理解できるよな。

人間と違って、互いの事で理解できない事なんか無い関係。

だからこそ、互いがわからない人間とはうまくいかなかったんだろうと考えると、皮肉で心を斜めに曲げる。

CBと人は遙か昔に離別した。

そしてこの海にいるのはCB。

今でも人間が主役を張っていると勘違いして、人間中心に考えてもしかたがない。それをもうトキアキは知っていた。

サイバーブラッド

CB。日本語にすると電網の血族と言ったところか。

元は彼らは単一の仮想人格と呼ばれるモノだった。実際は仮想人格という名前すら後付けで、元々はあらゆる機器に搭載して複雑な処理をさせるための専用制御システムだったらしい。それこそ人型ロボットのような複雑な躯体を動かすためのシステムとして作られた物だったという。

それが転じて、共通のアルゴリズムで人格シミュレートを始めたのがこのプログラムに「人格」という名前がつくに至るきっかけがある。

CBはその性質上複雑な機器を制御する、複雑な計算をするという抽象的な目的しか持っていない。そのため、猫型のロボットだろうが人型のロボットだろうが竜型のロボットだろうが制御できる。ただし、人格として運用される彼らには、躯体に一つの条件が付いている。

それは、生命を模した躯体であるという、一点。

これは仮想人格自身が選んだ規定なのか、人格という物を生成した科学者が指示した条件なのかは不明である。タマの説明では「CBには生き物だという自負があるからだ」との事だが、鵜呑みにしているわけではないので断定は保留する。

それに、実際に付き合っていく相手として考えれば、そこはどうでもいいところだった。

彼らは、生命として扱うべき存在たらんとしている、という、その一点さえ承知していればそれでいい。

記憶の整理を終了し、再び現実に視線を戻す。タマは話すのに飽きたのかごろにゃんと寝返りを打って尻尾をパンチしようと遊んでる。二又になった尻尾はランダムに複雑な軌道を描いて、なかなか手足が当たらない。それなりに暇つぶしになりそうだった。

「なあ、タマ」

「何さ」タマは「こちらも見ない。」

口にした言葉、舌の上で転がして止める。それを尋ねたい好奇心と、それを尋ねることの恐怖心とに挟まれて、結局舌は動かなかった。

「……………なんでお前は生きてるんだ、なんて、そう不用意に聞く事は出来ない。それはそうだ、人間が彼らを置いてけぼりにしたのだから。」

「お前も海底都市に来るか？」

「気が向いたらね」

「わかった。ディックは？」

「今日は部屋の大掃除だ、とか言ってキルシュトルテ連れてったけど？」

「……………、あー」

じんわりと額に熱がこみ上げてくる。頭蓋骨の内側をぎゅっと締め付けられるような疲労感が欠陥を巡って全身に行き渡る。全身に巡ったこわばりは、トキアキに操人形を想起させた。要は、頭痛を感じたのであった。

ともあれ、今日の惨事がどこかはわかった。

向かうべきか、向かわざるべきか。

全身が移動を拒否しているが、背中に張り付いた危機感が早く行くとトキアキを苛む。

「タマ、来ないか？」

「やめとくよ。ひひひ。ま、今頃あなたの部屋も発掘されてるんじゃないかねえ」

「助言ありがとう。さっさと行くよ」

「行ってらっしゃい。私は海底都市の話を通しておくよ。この辺りは海賊クルスの縄張りだからね。黙ってやるとするさーい」

「手間かけるな」

「律儀だねえ、あんたは。さっさとお行き」

「了解」

お勧めにしたがって席を立つ。心と体の板挟みの結論は、他者の意見に従うこと。自分の心に整理をつけぬまま歩き出すには、手頃な一手と言えただろう。

椅子とテーブルの隙間を縫って広場から抜け出る。煉瓦敷きの道を歩きだす。ここから家までは数分。目的地の二階建てアパートは、商店街から少しだけ離れた住宅街に埋もれているので、知らないと思っつけ出す事も困難だ。

まあ、今日に限ってはその心配も無用の長物。

「ディックが掃除だあ？」

ありえねーと続けてしまふ。懐疑は額に皺を刻み、声にまで『疑わしい』と力強く太字を書き込んでいる。

何しろ、あいつの部屋の汚さといえは尋常じゃない。汚いというか收拾が付かないというか。整理整頓技能を記憶と共に忘却したとしか思えない荒れようだ。

ディックの趣味は、落ちている物を拾ってくる、何も落ちてなければ探してくる、というはた迷惑きわまりない代物だ。その探索先が海底都市やら竜巢やら大竜の残骸やらなので、落ちている物もなかなか尋常でないものが多い。先ほど話していたキルシュトルテもディックの戦利品である。ドールと言われる人型ロボットで、放逐された大竜の中で人に捨てられたことを拗ねていたので、活を入れると言って連れてきたのだ。

そのキルシュトルテはエクのCBに快く受け入れられたのだが、なかなか苦勞していることも多い。例えば部品の調達だ。キルシュトルテとエクのCBの規格は結構異なっているらしい。ソフトウェア部分ならいくらでも対応が付くが、長年放逐していたキルシュトルテの体は、握れば砕け、触れば剥がれ、腕相撲でもしようものなら肩ごとベキともぎ取れるような代物だったのだ。

そこで商船トリグラフの主、アーベンロートに頼み込んで、今はもう機能停止している竜巢まで調査してもらった上で代替品を用意

してもらったのだ。借りは高くついた。もしもキルシュトルテにボデイへの愛着がなかったなら、そっくりそのまま交換した方が手っ取り早いぐらいの借りだった。

その借りのせいで、後日、トキアキとディックは未調査の大竜の死骸にケケツト共に乗り組むことになったのだが。そのあげくに水攻めに火攻めに、果ては暴走したナノマシン群体に取り憑かれた竜やドールとの大立ち回りと相成った。三回は死ねるようなひどい目だった事を強く主張しておく。

なお、そのときの拾い物であるナノマシン群体も、今ではエクに受け入れられ、緊急補修システムの一部として重要な立場にあると聞く。何がどうなるのか、あいつの拾い物は可能性に満ちていてどうしたものか判断しにくい。

で、道を歩いていたらそのナノマシン群体と遭遇した。

とことごと、今日は十五歳ぐらいの少女の姿をしている。白いカーディガンの下に黒いキャミワンピと、膝より少し上くらいまでのソックス。これだけだと一瞬誰だかわからなかったが、背中に垂れた真っ白い、弓の弦を思わせる髪で誰か気づいた。

右手の小道からするりと出てきたナノマシン群体のアルテミスは、トキアキを見て片手を持ち上げた。

「おはよう」

「おい待て、ねぼすけ」

エクの艦内はトキアキやディックの生活リズムに合わせて、季節に合わせて日照をシミュレートしている。明確に朝と夜がある以上とつくに艦内が明るくなっている今現在、おはようと言うのは流石に間違っていた。

「気にするな」

人の意見を華麗にスルーして、さっさと歩き出す少女。その隣に並んだトキアキを見て、彼女はふと思いだしたように話を切り出した。

「それよりディックに呼ばれたんだが、用件はわかるか？」

「多分、掃除に付き合えって話だろ」

「わかった。部屋に私を散布しておこう」

無表情のまま、人形が頭を揺らすみたいに違和感のある頷き方を見せつける。

「……………、あー。そういう無駄な力の使い方はやめると言われたはずだが」

思考時間一秒。

「わざわざ人手で掃除をする方が無駄だと思う」アルテミスが応じる。

「まあ、否定はしない」俺はCB任せだしな、とトキアキは内心で頷いた。「ところでアルテミス。今日はまたどういう趣向だ」

「何がだ」

「その格好」

見る度に姿形が変わるが、今日はまたずいぶんイメージが違う。何しろ基本的にはこいつは男の姿をしている。

「さっき、プラントンに呼ばれて、服の試着を手伝っていた。最後の服がこのくらいの娘の物だったから、そのまま」

「なるほど」便利なやつである。「その服はもらったやつか？」

「そうだ」

「地味だな」

「……………、そうか」

いつもより長めの沈黙の後、彼女は微かに眉根を寄せた。何か考え込んでいるといった風情だが、一体何を悩むのか。地味でも、元がいいのだから美人に決まっている。外見なんかどうとでもできるのだから悩む必要も無いだろうに。トキアキは心の中でそうつぶやく。

「トキアキはここで何をしているんだ？」

「今、家に向かっている。さっきまでタマと話してた。もう少し前は、ケケットと外に出ていた」

「トキアキの説明は回りくどい」

アルテミスはわずかに顎を持ち上げ、ふふんと笑う。タマと言いついアルテミスと言いつい、何故こうもこちらを見下す時は調子がいいのだからか。トキアキは苦い思いを丸ごと心の奥底に捨てようとして、ちよつと失敗し、舌打ちしてしまう。

「悪かったな」

「気にしてるのか？」アルテミス、微かに瞳を大きくする。口元を引き締めた、不安そうな表情。「すまない。傷つけるつもりはなかった」

「やめる。それ以上言つと死ぬぞ」主にトキアキの心が。「それより、ディックはなんで唐突に掃除を始めたんだ。何か言つてたか？」
「うん。部屋に物を置く場所が無くなったと言つていた。不思議だ。前から寝る場所さえなかったのに」

「不思議がる場所はそこか」

「うん。彼の基準で言う物を置く場所の有無というのは何か、興味がある」

妙な学習をして反映されても困るなあ、とトキアキは思った。

「それよりも、じゃあ、先ほど艦内で放送された件はトキアキの事か」

「待て。何があつた？」

「ケケットが海底都市を発見したと」

……、頬の紅潮が止まらない。口元が一ミリ、二ミリとゆっくりひきつって行く。自然と重たくなつていく瞼が、不機嫌そうに眼を細めさせた。

そんな事艦内放送するなよ。

「海底都市は珍しいと、タマが」アルテミスが言う。「場合によっては修復が必要かもしれない、とも。あれは竜巢や大竜のように自己保全機能を保有していない、古い物らしい」

「へえ」

「私も見てみたい」

「見に行けばいいだろう。ディックだつて断つたりしないはずだ」

「トキアキの許可が欲しい」
は？

「なんで」

「トキアキが見つけたのではなかったのか？」アルテミスは怪訝そう。

「俺が見つけたんだけど、別に俺の物って言うわけじゃない」

「違う。トキアキが見つけたのだから、トキアキが探検しに行くの
だろう」

「……………、あ」

ぼかん、と口が円を描く。頭の頂上から背骨を通ってがらがらと
何かが崩れ落ちていく感触に、三步進む間ぐらぐらと不安を露呈す
る。

「どうした」

「いや、俺は別に中に入るつもりはなかった」何故かてつきり、デ
イックが探検しに行くんだろうなと心の中で決めつけていたのだ。

「そっか…………俺も行くのか」

「行かないのか？」

「あー」

…………見つけて、放置しっぱなしというのは、無責任だよなあ。

自分で部屋を散らかしたのなら、自分で片付けるのが義務である。
エクという日常に海底都市という非日常を持ち込んだ以上、それに
結末をつけるのもトキアキの仕事だった。

なんだかんだで、浮かれていたのか。こみ上げてくる苦い物に、
思わず奥歯に力がこもる。

闇の中で海底都市を見つけたので気持ち一杯で、そこから先を
考えていなかった。

なんて油断。なんて間抜け。これで海底都市を見つけた分の喜び
は霧散しただろう。世の中帳尻が合うものだと、皮肉に頬を震わせ
る。

「トキアキ」

「なんら」

ぐいと右頬を引つ張られた。見れば、アルテミスの目は片方だけ細められている。口を斜めにして突き出した顔は、不機嫌という意志を力強く発揮している。

「そういう顔は良くないと前にディックに怒られたはずだ」

「どういふ顔だ」

「こつこつ……」「まてたんま」

顔の形を変形されそうになったので静止させる。美少女ボディに二十一の男の顔とかやめて欲しい。

「わかった、そういう顔はしない。単に油断してただけか」

「油断なら仕方ない。私も油断すると無表情になってディックと戦いになる」

「お前の交友関係はいまいちよくわからないな」戦いつて何だよ。

「エクの外壁に穴を開けかけてタマに怒られた」

「そりゃ、な……」「ずいぶんハードな戦いだったらしい。

「今度から修復用の私を事前に配置しておく」

「そういう問題じゃない」何さらっと分身するみたいな事を言っているのだこいつは。

テンポ良く突っ込みを入れつつ、トキアキは気づけば頬の緩みを許していた。心の錆を少しずつ削りだしていき、少しだけ真新しい部分が見えたような、微かな心地よさを覚える。

それからの歩みは若干気分良く、アパートに戻るまで維持できた。その途中、アルテミスがもう一度海底都市行きの許可を求めてきたから、気軽にOKと言っておいた。

まあ短い夢だったわけだがと、トキアキは小さくつぶやいた。

「何が短い夢なんだ？」

「いや。……しかし、こりゃ何だ？」

何がどう間違っただろうなっただと、トキアキはアパートの中で呆然

とした。

アパートは二階建てだが、一階はケケットの巢（整備倉庫）になっているため、トキアキ達の居住空間は二階に限定されている。建物の右の壁に掛かっている階段を、かんかんと音を立てて上っている、ドアを奥へと押し込んで、そこからようやくただいまと言うことが可能となる。

ただ、今日は無理だった。

この廊下の一番奥、右手の扉がディックの部屋に続く物だ。今はそこは全開で開放放たれていて、そこから雪崩でも起きたように廊下へと様々な物が散らばっている。幸いにしてトキアキの部屋のドアまでは浸食していなかったが、しかし、これは。

「これ容積的に部屋に収まりきる物じゃないように思えるんだが」

「おそらくは、空間圧縮型の箱か何かを使っていたのだろう」

「あー。そういうばどれだけ物を突っ込んで大丈夫な箱見つけたって、前に自慢されたな」

が、そのミミックもついにゲロって、この有様、という事か。なるほど。ディックが自発的に掃除しようと言いだしたわけではなく、不慮の事故への対処だったのか。それならいると納得できる。

自分の中のディック像を修正せずに済んだことは、しかし、ほっとすべき事なのか、悲しむべき事なのか。……ほっとするところだろうな。手間が省けたわけだし。

「ディック、どこだ？」

とりあえず声をかけながら奥へ。返事は奥から「おー、おかえり」違う、すぐ左手のドアが開いてそこから出てきやがった。

アパートの二階は左半分が壁をぶち抜いてのリビングになっている。ディックはそこで、一休みしていたらしい。仄かに紅茶の香りを漂わせながら、トキアキの頭半分くらい背の高い黒衣の男が現れた。

ディックはその名前に反して東洋的な風貌の男だ。短い髪をばっさり切った、ややおっさんくさい風貌に快活な笑顔を浮かべてい

る。黒衣と思っていたのはよく見れば坊主の着ている袈裟のようだが、ディックが着ても野性味がありすぎて僧侶には見えない。

もしもやつの本質を確かめたいのなら、奇抜な外見ではなくその顔に注目するといい。霞む事のない笑顔と、闇の中でなお明るく輝くような黒い目。この、楽しさとか元気さとかさういった物だけを切り出したような在り方が、ディックという存在だった。

で、それはいいんだがと、トキアキはディックを睨む。

「ありや何だ」

「宝箱が突然ぶっ壊れてな。いろんな物がはき出されたんだよ。まいったまいった。死ぬかと思った」

「宝箱……いつの間にあんなに拾い集めてたんだ？」

「さあなあ。まあ手当たり次第に持って帰ってきたし、こんなもんなんじゃね？」

「あ、トキアキ。お帰りなさい」

ひょこつと、奥からキルシュトルテが背伸びした。顔だけがディックの肩からはみ出して見える。紅茶色の髪を隠すように、白い布で頭を覆っている。

まとめている。

「海底都市見つけたんですね」

「それよりこの惨状は？」

「オーバーフローです。圧縮限界を越えて物資をいれようとしたので、緊急システムが働いて今までの物を全部はき出しちゃったんです。これでも半分くらい片付いたんですよ。あの箱一つで部屋一つ分の容積はありますから」

「なる。箱は壊れたのか？」

「今カスレプスに見てもらってますけど」キルシュトルテの表情が陰る。「難しいでしょうね。ディックが殴ったのが一番の敗因です」

「お前は何をやらかしてるんだ」

「えー。たいていの物はあるすれば治るってトキアキが言ったんだぞ？ 四十五度で叩き込めって」

「あー」

言い訳しないでいたら、キルシュトルテとアルテミスから氷河期もかくやの冷たい眼差しを向けられてしまった。バカに複雑な機械の修理の仕方教えてもわかるわけ無いだろうが、と思わなくもない。そんな心の声をぐつと飲み込み、トキアキはすまん、とうわべだけ謝った。

「別に、普通の物は殴ったくらいじゃどうしようしませんけど」キルシュトルテ、フォロー開始。「ディックは殴る強さに比例して重傷の物も回復すると思っていたらしくて。目一杯やっちゃったんです」「遠慮というやつを知らない男だな」

「ずけずけと人の心に踏み込んでいつの間にかうまくやってる俺の手腕に驚け」

「上手くやってないから壊れたんだろ」

直すための処置で壊してしまつては本末転倒だ。

ただこれを指摘すると、処置のしかたを間違えて教えたトキアキにも責任が回ってくる。

しかたがないので、話題を変えて逃げることにした。

「付き合わせて申し訳ない」まずは、ディックの代わりに謝ってみる。

「いえいえ」キルシュトルテはにこりと微笑む。「いい退屈凌ぎになります」

過去形ではなく進行形なあたり、トキアキとしてはブルーになるざるを得ない。

「まあそれより、だ」

ディックが一步踏み込んでくる。がしつと首をロックされた。そのまま折られると不安になったりはしないけれど、袈裟の上からはわからない硬質で力強い右腕を意識させられて、あまりいい気分にはなれなかった。

「よくやったな。てかケケットも驚いてたぞ。ちゃんと掴めたんじやねえか、暗闇の見方」

「掴めてない。たまたまだ」

正直を言えば、トキアキ自身どうしてあれを見つけたのか、いまいち理屈がわかってない。勘、と言えばそれまでだが。理屈立てて飲み込むことが出来なければ掴んだとは言いがたい。

「面倒くさい考え方するやつだなあ、お前は」ディックはうげつと舌を出した。「たまにほめればこれだよ」

「単に理論的ただけだし、別に面倒くさいとも思わないが、何よりお前にほめられるって言われたのが気に入らない」

「素直じゃねえし」

「お前にほめられて喜ぶ素直さとかいらない」

そこまで言って、はたと気づく。いつの間にか通路に出ていたキルシュトルテが、アルテミスの隣にちょこんと立ってこちらに冷めた眼差しを向けていた。

「いつも思うけど、仲がいいですよ、二人って」

「同感」

「どこが」

「ほら」

「……」

ま、息が合っつていうこともたまにはあるだろうとトキアキは言い訳を内心でこぼす。いちいち目くじら立てるほど狭量ではないと、細かい事にいちいち言い訳を生産してみてる。

「掃除はどれくらいかかりそうなんだ？」トキアキが聞いた。

「ディックに整理整頓のアルゴリズムを教えるのに一年かかりそうです」キルシュトルテの判定は容赦がない。「とりあえず、通路にあふれ出した分はカスレプスのゴミ山に移動させておきましたけど」「いいのとお前は、それで」ディックを見る。

「あー。いいんじゃない？ それで無くなるわけでもねえし、あいつならそのうち有効活用するだろう。趣味でいろいろ作ってるし」

「お前の拾い物の価値がわからない……」

「おもしろそうならとりあえず手に取ってみる、だよ。簡単だろ」

「道理だ」アルテミスが頷いた。

確かに、その時々を楽しく過ごすならディックの判断は正しいが、しかしそれはその後の事を考えないという一面を持っている。時系列を認識できる人間としては、やっぱり間違いに分類すべき判断だろう。

そしてなにげに整理能力ゼロであることは否定しなかったな、こいつ。

「まあしかし、いい加減少しは片付けないと中に物を置けなくなる
ところだったしな。丁度いいさ」

「前向きなのは肯定するところだが、片付けの手間を人任せにして
る時点でほめられないぞ」

「てめえにほめらいたいとか考えてもねーよ」

「奇遇だな、俺もだ」

「嫌味か、嫌味なのか」

「バカを言え。お前に嫌味とか言うはずがないだろ」通じないから
な。心の中だけでそう付け加える。「で、ディックも海底都市に行
くか？」

「行くに決まってるだろ。明日一日、カスレプスに頼んでケケット
の探查能力を上げてもらっておこう」

「カスレプスは仕事で倒れるな」

「大丈夫じゃないか？ 今日アーベンロートもいるし、多少仕事
が増えても困らないだろ」

「へえ。あいつが？」

「ああ。カスレプスのやつが新しい竜を作るとかで、交渉だとさ」

「へえ……」

新しい竜、ねえ。

ふむ……ふーん。

幾つか湧き出した思いはシャボン玉のようにふわふわと浮かぶ。けれど数秒保たずに弾けて消えてしまったので、これ以上の思索はやめる事にする。ともあれ、明日一日はケケットの整備だろうから、

今日明日でディックの部屋を何とかしないと。
しかし、片付くのかね、これは。

猫が尻尾を振って歩いて行く。商店街から住宅街とは反対方向に向かう道は、途中で舗装が消えて、むき出しの地面が連なるようになる。天井から落ちてくる光は段々と弱くなり、タマの作る黒い影も徐々に背景に溶け込み始めている。

エクはこれから夜になる。比例して、あの広場も仕事を終えたC B達で賑やかになる事だろう。

いつもならそこに混ざって引つかき回すタマであるが、今日は少しだけ特別だ。何しろあのトキアキが海底都市を見つけてきたのだ。いろいろ根回しをしておかないと、彼の事だ、簡単にくじけてしまっただろう。

二又の尻尾がゆらゆら揺れる。体が自然と前へ前へと向かいたくなるような高揚感、意識を明るく照らし出しているようだった。

すたすたと地面を蹴っていった先に、やがて、大きな影が見えてくる。それはがらくたを積み重ねた山の影だ。突き出たパイプや、竜の翼。廃品として艦内下部のリサイクル層へ送られるはずの物をちよるまかしては、あそこに積んで、思いつきでいろいろな道具を作るのがあそこの主、カスレプスの趣味である。

タマはその山の脇をかすめるようにして、ある部分で突然途切れた山の隙間から奥へと進む。その先にあるのは青いプレハブ小屋だ。カスレプスは竜やドール、環境維持システムまで作り込めるといっているのに、どうも住処にだけはやる気を認める事が出来ない。彼の感性を記憶同期せずに理解するのは、なかなか難易度の高い処理だった。そのプレハブ小屋の手前の広場に、大きな木製のテーブルが置かれている。テーブル横のベンチには、銀色の竜頭を持つ元人型ロボット（ドール）と、肌も服も白一色で染め上げたような風貌の男性が向かい合って座っている。竜頭がカスレプス、白いのがアーベンポートだ。

二人はこちら気づくこともなく、じつとテーブルの上を見つめている。この高さからでは、二人が何を見ているのかわからない。タマはテーブルの下まで来ると、ひよいと飛び上がってそれを覗き込んだ。なんだ。

「図面かい」

ホログラム投影機で表示されていたのは、大竜の図面だった。骨組みと殻とがばらばらに分離されていて、指先で触れば子供の玩具のようにぱちぱちと填めることができる。昔、タマの主がそれで遊んでいたのを思い出して、うっかり思考が乱された。ざりざりと意識をヤスリが消されるような感触に、タマは毛を逆立てた。

「ふしゃー」

「何やってるのさ、タマ」

ひよいと、タマの体を抱えてよしよしと撫でてくるカスレプス。敵つい竜頭で表情はわかりにくいだが、その声色は明確だ。

「心配するこたないよ。ただの持病さ」

「それって心配すべき事柄だと思うよ？」

「生意気言っんじゃないよ、百年も生きてないくせに」

「なら、私が心配するのはいいのですね」

その台詞の時点で大幅に間違っている。二人はアーベンロートを見た。そこだけは赤い双眸が、じつとこちらを見つめていた。

「お断りだよ。あんたみたいに性格悪いのに関わったら余計荒むってもんだ」

「これは新型の竜の図面ですよ」アーベンロートはさっさと話題を切り替えた。指でとんとんとテーブルを叩く。「ディックのために新型を建造したいそうぞ」

「ケケットがいるじゃないか」

「ケケットの躯体じゃディックの腕に追いつけないよ」

「そこまでかい」

「うん。元々あれは汎用機だからねえ。ディックみたいにエース級の腕を持つ人間には、専用にデザインした機体を作った方がいい。」

でないとそのうちケケットのの方が壊れる。……幸いにして、ケケットのもらい手はいるようだね、ケケットはまだ迷っているから、計画段階だけだね」

「ふうん。まあしかし、結構な奴らが微妙な気分になりそうなもんだね」

「まあねえ」カスレプスはタマをテーブルに戻すと、頭の後ろで手を組んだ。のびをするようにして、とがった顎を上に向ける。「プランタンもキルシュトルテも、やっぱりちよつとひっかかる物はあるみたいだよ。ま、元々僕達自身、人間に捨てられたわけだからね。凝りはあるだろうけどさ……よくわかんないけどさ」

「あなたは自分の腕を高める事が生き甲斐でしょう。夢が違つんだから、本質的にはわからない。記憶同期しなければね」

アーベンロートはのんびりと、しかし有無を言わせぬ口調で断定する。カスレプスはぴたつと口を閉ざしてアーベンロートを見た。

……が、一秒と持たずに、ふいと目を逸らした。

「どーせ僕はゴミ山にこもってる偏屈ですよ」

「卑屈にならなくても。トキアキ達人間と違い、私はこの艦のCBが意識共有をしていないと知っている」アーベンロートは言う。「普通のCBより、自分と他者に明確な境界線を引いていて、意識が混ざらないようにしている。……けれどそれは、人間との付き合いのように、互いの事がわからないという事に他ならない。様々な感じ方があるのは当然です」

「それが問題だと思うかい？」タマは楽しそうに聞いた。

「普通だと思えますよ」アーベンロートはくすりと笑った。「エクのCBは、トキアキやディックのような『人間』と付き合うため、経験を積もうとしてそうしているのでしょう。そういう意味では、推論能力を向上させるといふ点で、良いアプローチだと考えます」

「どうだろうねえ。何世代も前の私たちは、個々の独立した思考では計算力に限界があるとして、推論能力補強のために互いにつながる道を選んだはずだよ」

「それでは矛盾が成り立たない」アーベンロートは首を振る。「人間、いえ、生物の根幹には矛盾があります。怖い、けれど受け入れたい。好き、だけど嫌いなところもある。互いに異なり、わからないところがあるからこそ、彼らはわかり合うためにすりあわせを行う」

「すりあわせ、ね」

「すりあわせというのは、矛盾を許容するプロセスです。我々が一つの意識体になってしまえば、矛盾が生じない一個の存在となってしまう。それであるが推論能力は、他者理解ではなく自己理解の産物でしょう」

「ふふん。見てきたように言っじゃないか」

タマの口が段々早くなってくる。少しずつ、頭の中で線香花火がぱちぱちと弾けていくように、思考の火花がいくつも咲き出す。ゆつくりと速度を落としていって、広く周囲を見渡すような感触に、タマの尻尾がふわふわと揺れた。

だんだん、機嫌が良くなってきている。アーベンロートの言い分は耳に心地いい。すっぱりと言い切る強権さは、時に、公平さを意識したどっちつかずの言葉よりも強く響く。

もつともそれは麻薬のような物だ。強権であり、断言するという事は、視点が偏っていることに他ならない。それは何らかの別の在り方を間接的に否定している。その自覚がなければ、ひどく醜い事になるだろう。

そうならずにするでいる、この絶妙なバランス感覚は、彼がモデルとした人間の物だったらしい。

アーベンロートはCBでもまた特異な存在だ。死に行く人間の人格クローンとして作られた物だからである。アーベンロートというのも、その人間の名前である。

見てきたようも何も、人間をそっくりそのままトレースしたのが彼である。もつとも、彼は母艦である大竜トリグラフとも人格接続を拒み、バックアップすらとっていない真正正銘の変わり種だ。

そういう意味では、彼の事を理解しているCBは、それこそ誰もいないはずだ。

だからこそ、人間のようなことを言っても納得できるのだろう。

「で、あんただったらどうするんだい、アーベンロート」

「助言をしたら様子見ですかね」

「どんな助言？」

「ケケットとディックの間で納得がとれるよう、話すといいと思いますよ」

「そんなの当たり前じゃん！」カスレプスはばんばんとテーブルを叩いた。

「当たり前的事をするのは難しい」

「でも今問題になってるのは、それを知った他のCBの事なんじゃないの？」

「本人達が円満であれば、あとはあなたがそれを伝えればいいでしょう。問題も起こっていないのに外野がわめくならそのCBにこそ問題があるんです」

「うー」うつむきがちに顎を傾け、アーベンロートを睨むカスレプス。

「問題が別だって、わかってます？」アーベンロートはしれっと無視する。

「……………わかったよ」

「ま、トラウマになっていいるのもわかりますけどね。何しろこの海にいるCBの大半は、人に、取り遺されたモノですから」

そう言っって、アーベンロートは軽く首を振った。

カスレプスもタマも、微かに顔を俯ける。もしもこれが呼吸を必要とする生命であれば、思わずため息をついただろう。

海に遺されたモノ達。

それが、彼らCBを示す最も的確な言葉だった。

そして二日が経った。

トキアキはゆっくりと目を開く。遮る物のなくなった双眸は、暗闇しか示さない深海の闇を取り込んで、わずかでも光はないかと拡大する。しかし海水面より千メートル以上はあるのだ。生物のいない綺麗な海ならいざとなく、未だ魚などの多いこの海では光の届く余地は無い。

閉じられた棺の中のようにねっとりとした闇を進む。感覚的にはこのあたり……だと思ふ。しかし、不安がぎゅっと心臓つかみ、鼓動を妨げている。緊張がぴりぴりと皮膚を刺激し、額にこもった熱がうつすらと汗を吹き出させていく。

「そろそろか？」

「……………、ああ」

曖昧な返事になるのは、自分の腕がそのくらい朦朧としているからだろう。一昨日の偶然を今日の現実につなげられる、自信が無い。果たして海底都市にたどり着けるかどうか。

ケケットに聞いてしまえば早い、というのはわかっていた。しかし今日は後部座席にディックが乗っていた。ここでケケットに聞いてしまえば、ディックにそれを笑われる。本当にどうしようもなく笑われるならまだ我慢もできるが、諦めが付かないうちに笑われるのは屈辱だった。

もっとも、現実的なりスク問題を考えるなら、この思考は間違っている。安全面を考えるなら不安は早急に除去すべきであり、トキアキはケケットに聞く事が最もリスクの低い行動につながる。

意地を肯定した後に理屈を肯定する。半端な公平さの間で心が揺らぐ。自分の考えがどちらに寄りたいたいのか、整理がつかずに、混乱する。それを防ごうとなるべく客観的になっているつもりだけど、現実には解決からどんどん遠ざかっているような気がした。

それを思うと、心臓どころか内臓が丸ごと背中の方へ引きずられていくような、そんな後ろめたさを覚える。進むべき方向に進んでいないような、何かが尾を引いている感触。

もつとも、今トキアキの尾を引くとしたら、それは何だろうか。
トキアキには記憶がない。コールドスリープから目覚めた時は、自分の名前すら覚えていなかったくらいだ。それがかるうじて名前を思い出す事に成功したのは、自分に宛てた手紙を持っていたからである。だがそこにあつたのは、名前と年齢、そしていつの時代でも役に立つという一言共に万年筆と手帳が添えられていただけだ。今は、そのどちらも部屋に置きっぱなしである。

何がいつの時代でも使える、だ。昔の俺は何を考えていた？ トキアキの中で不満がぐねぐねと渦巻く。

「はあ」ため息で嫌な気配を吹き散らす。気分を切り替えた。このままでは埒があかない。「ケケツト、どうもあんまり覚えてないらしい。案内してくれないか？」

「了解。でも、もうほとんどすぐそこだよ」

ケケツトは明るく返しながら、船体を微動させた。感觸的に、片翼を広げて軌道修正、左の方に体を傾けて潜っていったという感じだろうか。

それにしても……。

「ケケツト。楽しそうだな」

「そう？」

「ああ。花畑で蝶々でも追いかけてるみたいな機嫌の良さだ」

「なんかバカっぽいね、それ」

そう言いながらも、ケケツトの返事はまんざらでもなさそうだった。こいつの琴線がどこかわからない。

「てか、トキアキが暗すぎるんじゃないか？」後方からディックの突っ込みが入った。「なんでそんなにへこんでんだよ」

どこかの誰かさんに丸一日部屋の片付けを手伝わされて疲れ果てているんだよ、とでも言えというのか。……無意味だ。「やわだなー」の一言で終わりである。

実際として、ディックとトキアキではかなりの体力差がある。これはもうスポーツ選手と書道家とかそういうレベルで違うような気

がする。何しろ、生身で竜と戦って生き残るくらいだからなあと、過去に思いを馳せつつ、ディックの相手もする。

「へこんでる覚えは無い」

「元気ねーだろ」

「それは……いつもだ」

「お前は暗いなあ。なんでだ？」知るか。

「お前が明るい理由を知りたいよ、俺は」口から出任せだが。

「そりゃ楽しいからだろ」

あっけらかんと返される、至極当然の理屈。バカの意見というのは真っ直ぐで単純故に、大抵正しい。

それが理解できるかはともかく。

「何が楽しいんだか」

「なんでも楽しいだろ。これから行く海底都市とか、何があるかって考えたら楽しくならないか？」

「子供っぽいな」

「そりゃそうだ」ケケケ、とディックは笑う。「大人になった覚えはねえよ。記憶ごと吹っ飛んでら」

「……………あ、なるほど」

記憶ごと吹っ飛んでら、か。

言われてみればそれもそうか。まともに記憶が残らずに、過去の残骸の寄せ集めでかろうじて自己を保っているのがトキアキである。しかしそれに比べて、ディックは名前すら覚えていなかった。あるのは、今しかない。名前だって、タマにつけられたモノだ。

ディックにとって過去とは、引きずられる余地など無いくらいに存在しなくなったモノ。

だから何も持たない子供として、ディックは今を楽しんでいるわけだ。

半端に、過去を引きずっているトキアキとは違って。

その事実が、ますますトキアキを鬱屈とさせる。ディックに比べでは自分という、嫌な気持ちがあつとりと渦巻く。

「……何の解決にもならないな」

「自分も、名前も何もかも捨て去ればディックのように振る舞えるのだろうか。」

しかしそれは自己否定に他ならない。ディックのように、やむを得ず失ってしまったなら仕方ない。だが、わずかでもこの手に残っているモノを自ら捨て去るといふ事は、本当に正しい事なのだろうか。

迷いが更に深くなる。それを整理しようとなんとか考えを進めようとして、けれど考えがまとまらず、ぐるぐると無駄な思考が回転する。

「おいコラ」

シートが前後に揺れた。背中から鎚でも喰らって、背骨ごと引っこ抜かれたようなショックにしばしトキアキは混乱する。一秒後、理解したのはディックがシートを蹴っ飛ばしたという事だった。

「なんだ」

「なんかへこんでる気がした」

「お前はそういう理由で人を蹴るのか」

「頭蹴つてないだけ慈悲はあるだろ？ トキアキ、お前は難しく考え過ぎる所がある。そういう時は決まって自分の内側にこもってる時だ。外を見るよ、ほら」

「闇しか見えねえよ」

「だから楽しいんだろ。この先に何かがあるか、考えても見ろ」

「……………」

「じんわりと脳の奥を痺れさせるディックの一言。この先に？ 何が？」

「何が待っているのか……………どういう目に会うのか。」

ゆっくりと息を吐く。このしびれの正体は恐怖だと、以前アーベントロートに教えられたことがあった。だから正直に、そう言うことにした。

「俺は怖くて怖くてたまらないよ」

「ま、楽しさと怖さ期待のコインの裏表だ。どっちが出るか、楽しむも」

あっけらかんというディックのコインには、きっと楽しさしかないのだろう。

そしてトキアキのコインには、怖さだけ。案内するだけでも、できるかどうか不安になるくらいに真っ黒に塗りつぶされている。

トキアキはそれは口にせず、無言で通した。

その会話が終わってから五分も経過せずに目的の海底都市は発見された。ケケットはコクピットのスクリーンを補正モードに切り替えて、周囲の景色を写し出す。その解像度は一昨日のそれより高く、前方百メートル先に構えている灰色のドームは古代の遺跡めいた印象を帯びて、焦げ茶色の海底の上に建っていた。

あそこの中に入るのか……。胃を針金でぐるぐる巻にしてゆっくりゆっくり締め上げるような痛みが走る。

「お、穴が空いてるな」

「ん？」

「ほら」

ディックが後部座席から腕を伸ばしてくる。つきだした指の先で、スクリーンの表示が拡大された。黄緑色の枠と共にトキアキの正面に飛び出してきた画面は、海底都市の右上あたりを表示している。

「うわぁ」

確かに、そこには穴が空いていた。隕石でも飛び込んだのかという感じの無骨な穴の空き方で、綺麗な円形ではなくいくつも角を持ち、そこから罅が入っている。ガラスに野球ボールを叩きつけたみたいな有様だった。

「中は水浸しかもな」トキアキは言った。

「ちつと残念そうだな」ディックは顔を突き出してきて、にやにやと笑う。

「そんなことはない」

「そう。そんなことはないよ」ケケット、何故お前が言う。「海底

都市は大抵排水システムもすっかりしてるから、稼働してればあれくらいどうにかなるよ。計算だと、半分くらいは浸水してるかも知れないけど、もう半分は普通に使えてるはず」

「へー、そりゃいいニュースだ」

わいわいと手をたたくディックが、後部座席で跳ねている。本当に子供だなとため息をつきつつ、しかしケケットの言葉に、少しだけ笑みを取り戻してしまふ。……さて。果たして自分は一体何に喜んでいるのだろうか。

「あそこから飛び込もうか」ケケットが提案した。

「お、いいな。行け行け」

「え。ちよつと待て、大丈夫なのか」

「大丈夫大丈夫」何故お前が答える、ディック。

「ゴー」

「ゴー」

「おまえら人の話聞く気ないだろ」

その答えは、行動で示された。

真つ直ぐに落下する青い景色を、真正面から突き破る。

滑らかにも見える水流が、半ばからわけ隔てられた。カーテンを左右に開くようにして、銀色の鼻先が突き出される。そしてするりと、纏った絹を脱いでいくように頭を、首を、肩を尽きだし、銀色に輝く胴体をその空へと解き放つ。

瀑布の轟音に飾り立てられ、水飛沫を宝石のように煌めかせながら、大竜ケケットは海底都市へと飛び出した。左右に大きく広げた翼が空気を捉え、滑るように飛行する。

「明るいな」

そのコクピットの中で、トキアキは微かに目を見開いた。

海底都市の中は明るかった。大竜の中と同じように天井から投射された光によって全てが照らし出されている。

しばしの間、その光に目が眩む。意識をかき乱す白色の奔流に、両目がずきずきと痛みを覚える。

だがそれもやがて終わり、そうしてトキアキ達は、光の照らす風景と直面する。

それは、エクの中とは大幅に違っていた。

映し出されたのは、広大なる廃墟であった。

「こりやまた。戦争でもしたのか？」

ディックのこぼした感想は、トキアキの感想と全く同一のモノだった。

眼下に広がる景色、見渡す限りに埋め尽くされた灰色の残骸。それは海底都市の半分を砂浜のように埋め尽くしている。遠く、左手の一部の空間には崩れかけたビルや半ば倒壊した家など、文明の残りは伺えるが、それ以外の過半の空間は工事現場みたいな有様で建物を構成していた何かの残骸が散らばっているばかりである。

「下は……森か」

それはきつと、この滝の近くまで続いていたのだろう。しかしこの辺りだけはその瓦礫の砂浜を見る事は出来ない。トキアキ達の足下の空間は、緑色の草木に浸食されて、すっかり森の様子となっていたからだ。

「元々海底都市で群生していた植物だと思うよ」ケケットは言った。「あとやっぱり、排水はうまくいってるみたいだね。あの滝のせいで水没が半分ですんでる。これは人工的な処置だよ。多分穴が空いた後に誰かが処置してる」

「誰かがここで暮らしてるって言うのか？」ディックが聞いた。「マジかよ。いやまあ森があるから木の実くらいはとれるか……」

「人間基準で考えるなよ」トキアキは言った。「CBに決まってるだろ」

「なんでだよ。猿かも知れないだろ」

「お前かくげ」首を絞めるな。抵抗したらすぐ話してもらえたので、大きく呼吸をする。「ケケット、人とか動物とかがいる様子はあ

か？」

「ざつと観測した限りではない。ただ詳しく調べてないからわからないなあ。解析する？」

「いや、まだいい。後で調べてくれ。それより着陸して、それぞれ歩いてみよう。ディックはどうする？」

「俺も下りるよ。ケケットは観測だろ？」

「うん。僕調べる」

しばらく飛翔すると、森と瓦礫の境界線を見つけた。ケケットはそこを着陸点と定めたいらしい。左翼を下に傾けて、斜めの姿勢でくるくると回りながら徐々に速度を落としていく。音一つたてない滑らかな滑空は、蟻地獄に落ちていく獲物を想像させて、トキアキは徐々に微妙な顔になっていく。

だがそんな妄想とは裏腹に、着陸は丁寧で、わずかなショックすらシートには伝わってこなかった。

「さつて、行きますか」

「ああ」

ケケットの背面ハッチが開く。ディックはシートを蹴ってさつさと飛び出していき、トキアキはその後に続いて、じたばたと背面に這い上がった。二人して翼を伝って下りていくと、そこにはすでにアルテミスの姿があった。今日は二十歳くらいの成人した女性の姿だ。服装は自前らしく、肌をびったりと張り付くような白い衣を纏っている。髪は短く切りそろえ、二人を迎える金瞳はガラス玉みたく感情が失せている。

先ほどまでケケットの機体内に染みこんでいたのを、二人の外出を察知して溶け出したのだろう。

「お前もくるか」ディックが聞いた。

「行く」こくん、と頷くアルテミス。それからこちらを見た。「いいか？」

「何が」トキアキ、うるたえる。

「私も行ってもいいか？」

「いいんじゃないか？」

「聞かれても困る」

「いいってさ」ディックが代わりに答えた。「トキアキは照れ屋なんだ。まともに答えねえよ」

「なるほど」

「頷くな」

「では答えて欲しい」

「お前の好きにしるよ」

「な？」

「確かに」

「……………」

無言で足下の瓦礫を蹴って、どさどさと歩き出す。「照れてるな」なるほど、あれをそう言うのか「後ろうるさい。」

後方でケケットの飛び立つ音がする。背中を押す突風の後、ケケットは視界の端をかすめて、光の強さに顔をしかめてしまうくらい高い所に飛んでいった。そしてこちらは、見上げるのを止めて這いつくばるように瓦礫の上を歩き出す。

砕けた瓦礫でごつごつしている足下は歩きにくい。トキアキは舌打ちを繰り返し、何度か足を滑らせながら瓦礫の丘の方へと歩いて行く。振り返れば、ディックはなんてこと無いとばかりにすたすたと歩いてた。アルテミスは……………。

「チートだ」

「なんだ？」

「いや……………」

視線を正面に固定する。あんまり長く見ていたくない光景だった。足が溶けているとか……………なんだあの作りかけのフィギュアみたいなやつ。

ともあれ、これで苦戦しているのは自分だけと相成ったわけだ。畜生と内心で毒づきながら、瓦礫の道をしばしの間下っていく。

正面の風景は、見渡す限り瓦礫の丘だ。砂のうねる砂漠のように

灰色が敷き詰められていて、途中で小さな山を作ったり、谷を作ったりしている。今はとりあえず谷に向かって下りているが、その後は谷に沿って進むつもりだった。

「戦災のようだ」ふいにアルテミスが言った。

「お前はなんでそう思う？」

「瓦礫の焦げ跡が一樣ではない。ここにあるのは濃いのが、向こうの丘のはただ破壊されただけに見える」

「ん……ああ」

足下の瓦礫を一つ拾う。手の平に包めるくらいの適度な破片は、確かに黒く煤けていた。手の平の触れた部分に、ざらりとした黒い跡が残る。

これが初めて自分で見つけた海底都市の拾い物か。記念にポケットに突っ込んでみる。それから辺りを見回して……ふむ。確かに、微妙に灰色が煤けていた。

「まあ、事故じゃ街はこうはならないか」

「ならない。けど、そうなるこれは、人災の公算が高い」

「人災……人間同士で争ったってということか」

「おそらく。そういう話は聞いた事は？」

「少しは」ルクルスというやつから嫌と言うほど。「まあ、タマとかアーベンロートなら知ってそうだけだな」あの二人からは聞かされた事無いけど。ディックはどうだろう。「おい、ディック」辺りを見回す。いない。「ディック！」

「あん？　なんだよ」

ディックは丘の上だった。舌打ちしながら見上げる。

「この状況、どう思う？」

「アルテミスと同じ意見だな」

言うなり、ディックはずざざと斜面を滑り下りてくる。よっ、といいながら最後一メートルくらいを跳躍すると、トキアキのすぐ隣に着地する。並んで歩きながら彼は続ける。

「前に聞いた限りじゃ、こういう事は時々あったらしいぜ。箱舟作

戦で外に出る前に内乱で滅びたのかな。あとは、箱庭作戦に参加せずに残った人間達が争ったとか」

「残った人間？ いたのか、そんなの」

「ああ。宗教上の理由とかいろいろなので、あつたらしい。タマの前の主はそうだったってさ。ただ、CBと人間とで対立して、滅びたとか」

「へえ……CBと対立、ね」

「詳しくは知らないけどな。まあそれとは別に、人間同士で争って滅びたっていうのもあるらしいが。俺はそっちはまだお目にかかったことはないな」

「人間とCBの対立は見たことがあるのか」

「あるぞ。前にアーベンロートに言われて大竜に潜ったことがあるだろ。ああいうのは大抵そうだ。それに、今でも人間に敵意を持つてるCBもいる。置いてけぼり喰らったのに腹を立ててな。そういうやつが海に残った人間と衝突したって話はよくある事らしい。前はルクルスとかもそうだった。何度か襲われたろ？」

「ああ……お前によく突っかかってきてた、あの赤い竜か」

「そうそう。この辺りだつてルクルスの監視海域だ。許可が下りたつて事はもう問題は無いんだろうけど、元々は何があつたか、怪しいもんだ」

「ふうん」

なかなか、CBと人間の関係というのも複雑である。……それもそうか。人間同士ですら複雑なんだから、人間以外と付き合うならもっと面倒なことになつてもおかしくない。

そんなことを考えていると、アルテミスが足音もなく隣にやってきた。

「ルクルスというのはなんだ？」

「お前は会ったことがなかったか？」トキアキは少し驚いて聞いた。
「無い」

「そっか。……まあ、海賊って自称してるドールだよ。あいつも古

いドルらしい。普段は人間が残っていた武器とか、竜巢とかの危険物の管理をしてる。母艦はセイレン」

「危機管理システムか」アルテミスは少し笑った。「私と同じだ」
「昔のお前よりは融通きいたけどな」ディックが言った。「ちよつと前までは、必要な事以外関係ないって態度だったけど、最近はずいぶん擦れてきたよな、お前」

「今でもそれは変わらない」アルテミスは淡々と答える。「ただ、役目が変わったから、必要な事もそれに応じて変わった。それだけだ」

「ま、今のお前の方がいいやつだと思うぞ、俺は」

「ありがとう、ディック。……………トキアキは何故黙っている？」

「別に、他意はない」

まあ、ディックがそう言うんだからそうなんだろうさとトキアキは内心で独りごちる。もつとも、トキアキとしては昔のアルテミスの方が話しやすかったが……………今の方がいいのなら、わざわざ口にすることもない。

しばらく瓦礫の道を歩いて行くと、段々と代わり映えのしない風景に飽きてきた。三人は立ち止まると、そつと息を吐いた。

「特に危険もなさそうだし、単独行動しねえか？」ディックが提案した。

「危険ではないか」アルテミスが首を傾げる。

「いざなつたら、ケケットが下りてくるさ。それに、俺とお前は自分で自分の身を守る。ケケットはトキアキだけを守ればいい。だる？」

「それもそうか」アルテミスは頷いて、こちらを見た。「トキアキ、どうする？」

「好きにしたらいいんじゃないか？」

俺の意見なんか聞かないだろう、と拗ねたことを言いかけたので、慌ててそこで言葉を切る。しかしそのせいでかえってぶっきらぼうな口調になってしまった。恥ずかしさを誤魔化しながら、ざくざく

と瓦礫の上を歩いて行く。………拗ねていると見られるのと、ぶつきらばうと見られるのと、どっちがマシか。考えたくはなかった。実際の所、言われた事が間違ってるわけじゃないんだよな」

アルテミスは戦える。ディックはアルテミスと互角に戦えるくらい強い。トキアキだけがそういう面では足手まといなのだ。

いや、そういう面も何もなく、何かで彼らに役立てた事が果たしてあつただろうか。

「、ははっ」

考えたり迷ったりする必要すらないままに、トキアキは結論を決定する。そんな記憶は残無い。

ディックの部屋とは対照的に、トキアキの頭の中は空っぽらしい。つい、体の内側に引きずり込まれるような感覚を、舌を嚙んで自重する。

けれど不安と退屈とがない交ぜになって、両肩にのっしりと寄りかかってくる。

それを振り払いたくて、とにかく歩いて行く。

草原で火事に襲われて、パニックになった獣のように。

どこにたどり着きたいのかもわからないまま、目についた方向へと進んで行く。

外に出てきてまで一人になって、何をやっているんだろうか。一人になったせいで思考の切り替えが成功しない。どうやれば切り替えられたのか、普段実行していたはずなのにその方法すら忘却する。

「くそっ」

後悔。不満。

何故こんなモノを見つけてしまったのか。

何故こんな所に入ってしまったのか。

ここに自分は何を求めているのか。

問いかけても返事のない空っぽの心は役立たずで、胸に手を突っ込んで引きずり出してそのままどこかに捨ててしまいたいくらいだった。

暴走する思考。苛立ちが神経と人格を逆立ちさせて、ぎりぎりと締め上げる。ストレスは人を凶暴にする。反射的に目の前の瓦礫を蹴り飛ばし、

復讐するように、頭に何かがぶつかってきた。

「痛っ……なんだ」

顔をしかめて、ようやく歩みを停止する。ずきずきと痛むの右側頭部。何か、硬いモノに強打されたような感覚だった。

ほとんど無意識のうちに右手を頭に添えていた。そして右手の動きに合わせるように首をわずかにねじ曲げて、そして。

気づいた。

ぐいと、引つ張られるように視線が丘の上に引き寄せられる。トキアキはそのまま動きを停止した。ゆっくりと見開かれた瞳だけが、その景色を解析しようと躍起になっている。

しかし、それは向こうも同じだった。

灰色の丘の上。強すぎる天井の光に照らされてその女は立っている。けれどその姿は驚きにこわばり、両手を胸のやや下で何かを軽く握り締めるようにして、硬直している。

埃にまみれた、顔と髪。

小さく開かれた口に、見開かれた緑の瞳。

互いに互いを考える。そして人間かと、一度はそう思いかけて否定する。こんな所に人がいるわけがない。だからあれは

「誰だ？」

「誰ですか？」

唱和する問い。片方の意図は正解で、片方の意図は不正解。

二人はぐっと黙り込む。どちらから口を割るかは半ば確定してい

るが、それでも、時間をわずかに引き延ばす。

出会ったのは似たもの同士。

終わりを自覚せず、始まることの出来ない人間と、

終わりから目を逸らして、始まりを拒絶するC B。

かくして、終われず生まれぬモノ達は出会ったのだった。

海底都市サラミスは約二百年前に滅びた。原因は、人間同士の内乱。元々幾つかの小国の民が隣接する国境地帯に作られた避難用の海底都市は、人々の抱える潜在的な火種、つまりは人種差別、宗教的対立、世代間対立などを経て、一三〇年の月日で滅びた。

サラミスの生き残りであるドール、セルニアが説明したことは、大体こんな所だった。

「まあそれでも、私たちがみたいに生き残っちゃったCBもいたんですけどね」

あはは、とセルニアは笑って見せる。トキアキは彼女の隣を歩きながら沈黙した。率直な感想はと言えば「そこで笑うなよ」だったのだが、さて、どうオブラートに包んだものか。

大したアイデアは出なかったので、身内の支援に期待した。

「笑うこつちやねえだろ」ておいお前コラ。

トキアキとは反対側、セルニアの左隣を歩くディックは、ずけずけとそんな感想を漏らしやがった。トキアキの額が空中に引つ張れるみたいにならずきずきと痛みだし、それを押さえつけるように額に指をあてる。三人の少し後ろをついてくるアルテミスが、一歩だけトキアキに近寄った。

「大丈夫か」

「いやなんでもない」

「そうか」

「なんだ、トキアキ。頭痛か？ だから昨日さっさと寝るとだな」
「原因はそれじゃないし、それ以前にさっさと寝ようにもお前、ミック第二段を暴発させて俺の部屋にまで物資を浸食させたのはどこの誰だったか忘れたのかコラ」

「あれは不幸な事故だったよなあ」ディック、遠い目。「あっちはまだ余裕あると思っただんだが……」

「なんですか？ ミミックって」セルニアは小首を傾げてこちらを見ってくる。

「コンプレッション・ボックス」アルテミスが答える。「容量限界を超えた」

「あー。私も前にやりました。こう、ついつい入れ過ぎちゃうんですよね、あれ」思わぬ方向から伏兵が現れた。トキアキは顔をしかめる。

「そーそー！ だよなあ。ほら見るトキアキ、俺だけじゃねえ」何故か胸を張るディック。

「だとしても！ それは整理整頓能力をつけないでいい理由にはならねえっての！」

「トキアキさん厳しい」

「だろー。でもこいつの部屋も大して綺麗じゃねえぞ」

「やかましい」

「片付け、手伝うか？」アルテミスが言う。

「やかましいっての！」

「というか、何故だ。いつの間にか自分が追い詰められている。意味がわからない。苛々と足下の瓦礫を蹴っ飛ばすと、かんかかんと中途半端に三メートル跳ねて止まった。実に無意味だ。話題を切り替えよう。」

「ところで、セルニアさんはあそこで何やってたんだ？」

「えーっと。掃除みたいなモノですね」あはは、とセルニアは笑う。

「あのあたりはまだ誰も手をつけていなかったなので、瓦礫をどかしていたんです。それがトキアキさんに当たったみたいで、ごめんなさい」

「いや、それはいいんだけど……」

あの当たりを片付ける？ 片付けて何がどうなると言うんだ？

疑問に挟まれて眉根をぎゅっと寄せるトキアキの後ろで、「こーい」のをでれでれして言うんだ。「少しいらっとする」「今度蹴っ飛ばしてやれ」「了解」「うるさいおまえら。」

「まあ、いいか」深入りしないと心に決める。そもそも何をどうしたいのかも定まっていけないのに、他人の事情に足を突っ込んで仕方がない。「で、俺たちはどこに向かつてるんだ？」

「街というか……村、かな？ 戦災で生き残ったCB達が暮らしている村に向かつてます。私は一応その代表補佐をやっています」

「意外と偉かった」

「あはは。………意外？」

あ、しまった。セルニアは笑顔のまま、こちらを大きな瞳でとらえて放さない。逃げようとする獲物を絡め取る蜘蛛の巣を想像して、とりあえず、気づかなかつたふりで押し通そう。

「戦災で生き残ったCBというのはどのくらい？」

「ドールが十二体ですね。竜は一頭もいません。生産・調整施設は破壊されていて、私たちの中には復旧知識のあるCBがいないので、これ以上は増えないんです」

「なるほど」

復旧がまったく進んでいないのも、大規模工事に向かないドールが瓦礫の除去をしているのもそのせいらしい。普通なら大型の機獣……例えば、十メートルくらいの大きさの羊型ロボットとか、人間をそのまま拡大したようなロボットのエルとかが動員されるものだ。その手のCBはエクの中にも数体いる。エクの中で間違っただ規模破壊が起こった場合の修復要員である。

「エクに頼めば、手伝いを送ってもらえると思うが」

「あはは。ありがとうございます」

ペこり、とセルニアはお辞儀する。

……が、お願いします、という一言は無かった。

ずっしりと重たい壁を感じる。表面はスポンジのように柔らかいのに、ある程度押すと硬くがっしりとした感触に阻まれる。タマヤカスレプスのような、長く生きたCB達と同じ感触。

「セルニアは年齢は？」

「えー」

「……………さて、なんだその反応」

「年齢を聞くのは御法度ですよ」

妙な概念を学習していた。

「仮にサラミスが出来た頃から生きていたとしたら、二〇〇歳以上か」

「トキアキさん？」に「に」。

「なんだ？」じつ。

「おまえら仲いいな」ディックが突っ込んだ。「アルテミスが拗ねるぞ、トキアキ」

「なんでそこでアルテミスが出てくる」

「どう思うよ」ディックはアルテミスを見た。

「……………」おい、なんで黙る。「あそこが村か？」

アルテミスが指さす。この場合、話題をスルーされたのは喜ぶべき事なのか悲しむべき事なのか。……………ほつとするとところだろつなあと無難に結論して、アルテミスの指にしたがつてトキアキは顔を向ける。

そこには比較的崩壊の度合いがマシな廃墟がある。街の名残を見せる広い道路からは瓦礫が除去され、ひび割れてはいるもののタイル敷きの道が真っ直ぐに伸びている。その左右には小さな店舗がならんでいて、黒く煤けたり二階部分が崩れているモノ、大きなビルに押しつぶされているモノもあったが、使えそうな建物は壁も綺麗に掃除され、窓も割れておらず、出入り口は綺麗に整えられていた。なるほど、とトキアキは頷く。確かにここには生活の香りが漂っている。

「んで、俺たちはどこに行けばいいんだ？」ディックが聞いた。「警戒してるのはわかるけどよ」

「え？ あはは……………ばれちゃってました？」

「見りゃわかる。トキアキは気づいてねーけどな。セルニアよりがちがちだし」

「やかましい」しかし本当なので反論は出来ない。

「代表のところに来てもらえますか？ 代表が言えば大体は有無を言わず話が決まるので」

「りょーかい。その代表は？」

「すぐそこですよ」

セルニアはさつと右の方の建物へと向かっていく。それは八百屋から売り物を取っ払ったような、あえて言うなら倉庫の入り口にテーブルや椅子、ソファを置いたような場所だった。雰囲気としては、エクの中にある海の家に近い。ただし、開放感を主張するつもりが、中身が奥まっついていて薄暗いせいで逆に立ち入りがたい雰囲気を生み出している。しかしそれよりも、トキアキは先ほどのセルニアの言葉が気になった。

つまりは、代表に判断を任せて、その判断を根拠に他の者を納得させようとする。速度を優先した乱暴な一手をどう解釈すればいいだろう。こちらにとっては都合がいいけれど、本当に都合がいいのか……。

本当にまずいなら、ディックが突っ込むか。トキアキは考えるのを止めた。ディックはバカだが勘がいい。交渉事であれ戦闘であれ、なんだかんだで致命的なモノを察知して対処する力がある。そのディックが何も言わない以上は、トキアキがする事は何も無いという理屈である。

一同が近づいて行くと、影になっているところで、揺り椅子に腰掛けている女性の姿が見えた。黒いローブを着込んだ黒髪の女だ。年の頃はディックやトキアキとそう変わらないだろう……が、ドールなので外見なんてどうにでもできる。というか、代表と呼ばれている以上はセルニアよりもおばさんだろう。

心を読まれたら殺されそうだ。

ゆつたりと揺り椅子に座っていた女は、うとうとさせていた面をあげて、長い年月をかけて錆び付いた扉を開くように瞼を持ち上げた。海の底の本当に暗い部分だけを抽出したような黒瞳が、こちらを捉える。アルテミス、ディック、そしてトキアキと順々に見つめ

て、こくりと頷いた。

「驚いたものだ。セルニア、どこでこんなの拾ってきた」

「あ、そういえばどこから来たんですか？」セルニアがこちらを向いた。

「竜に乗ってちよつとな。エクって大竜から」ディックは笑った。

「わかるか？ エクって」

「聞いた事は無いな」彼女はきつぱりと言った。「しかし、よもや人間とはな」

「一目でわかるもんなのか」

「勘だ。こういうのはな、適当なことを百かそこら言えば、一つくらいは当たるモノだ。運が良かったな」ははは、と笑う女。

「そうかい」ディックは苦笑。「で、あなたの名前は？ 俺はディック」

「ほう。ディック……。私はキルケだ」

「「え」」

トキアキとディックが、同時に声をあげた。全員の視線が集まって、ブラックホールになったみたいな錯覚を感じる。

「なんだその反応は」キルケが眉を片方だけ持ち上げる。

「ああいや、悪い。タマってCBにその名前を聞かされたことがあつてな」

「そのタマが白猫であれば、知り合いではあるな。ふむ……そうか」キルケは小さく頷くと、にやりと、口の端をつり上げて笑った。「そうか。確かにアレは、人間を捜すと言って我と袂を別つたな。どうやらあれは、目的を達したらしい」

「後で呼ぼうか？」

「はは。そうだな。久しぶりに旧知のモノに会うのも良かるう。しかし、となればそなた達の事は無下には扱えんな。よく来た、ディック。そなたは？」

「トキアキ」

「トキアキか。ふむ。そつちは人ではないが、ドールでもないな。」

何者だ？」

「ナノマシンの集合体だ。私はアルテミス」

「その技術は規制対象だったはずだ。特定の治療目的以外ではな」

「そうだ」アルテミスは頷く。「しかし、私を必要としたモノも過去にはいた」

「ならば我らと同類だな。拒絶する理由にはならぬ。ようこそ、アルテミス」

「ありがとう、キルケ」

「あの」

おずおずと、セルニアが言葉を挟んできた。うん、と顎を顎を持ち上げるキルケ。二人の視線がかち合う。

トキアキは後目で、セルニアの顔を見た。微かな緊張が、笑顔を硬くしている。

「今の話は……？」

「本当だ」キルケは鷹揚に頷く。「このモノ達は人間と、ナノマシン群体だ。そしてどうやら、我の友の、そのまた友であるらしい」

「人間………ですか」

セルニアが改めてこちらを見る。トキアキは、その視線に応じるようにじつと彼女を見つめる。

互いに、互いを探るような眼差しが奇妙に絡まり合う。決して触れ合わない螺旋のように。

「この都市のCBは、人間をどう考えている？」アルテミスが聞いた。「この都市は人災で滅んだと聞いたが、CBの考えを聞きたい」

「好意的だ。我は人を恨むようには教えていない」キルケは断言した。しかし、どこかおもしろがるような表情でアルテミスを覗き込むと、こう続けた。「だが、信用もしていない。人の愚かさをまざまざと見せつけられたのだ。セルニアは最も好意的な方だが、あとは推して知るべしだ」

「わかった」アルテミスは頷いた。

「あ、聞いてもいいか？」ディックが尋ねる。「この街に人間か、

「コールドスリープされた人間がいる可能性は無いか？」

「無いな」キルケはあっさりと否定する。「以前にも大規模調査が行われた事がある。結果は、誰も見つからず、だ」

「そっか。残念だ」

ディックは苦笑して、それで口を閉ざした。

こうなると少し面倒だ、とトキアキは考える。ディックは滅多にへこまないが、そのぶん、引きずる。気分転換が必要だろう。

「しかし……それじゃあ、次はどうしようか」

トキアキがつぶやきながら、ゆっくりと頭を巡らせる。首はべきべきと音を立てるものの、頭の中には次のアイデアが浮かんでこない。とりあえず海底都市に入るといふ目的はすでに達成していて、トキアキの中にはやりたいことが残っていないかった。

だが、ディックの気分転換も考えると。

「あ。案内しましょうか？」セルニアが言った。

「どうするよ、トキアキ」ディックがこちらを見る。

答えは決まっている。

が、こうもいちいち話を振ってこられると少し苛々する。

「いいんじゃないか？ えーと」ぶっきらぼうになりすぎた、とトキアキは慌てて言い方を変えた。「じゃあ、その……お願いします」

「お願いされました」

セルニアはにこにこ笑って、じゃあこっちに、と手を左から右へスライドさせる。それを追いかけるように体をくるりと回すと、ととと、と歩き出した。その後ろを付いていくディックと、アルデミス。二人から遅れること三歩して、トキアキは一步を踏み出す。

「トキアキ」

うん、と振り返る。キルケはこちらを見たまま素早く問うた。

「お前がディックではないのか？」

「意味がわからない」

「わからぬなら、いい。呼び止めて済まなかったな」

「……………」
話は終わり。そう言わんばかりに目を瞑り、彼女は背筋を背もたれに預けた。揺り椅子を、微かに軋ませながら彼女はコミュニケーションを切断する。

おそらく、こちらから声をかけても何も答えてはもらえないだろう。

「……べー。」

舌を出してから、顔をしかめる。子供っぽい真似をしてないで、さっさと皆を追いかけよう。

キルケの住む場所から十メートルも歩かないうちに、何人かのドールが集まっている場所を見つけた。かつてはレストランだったのだろうか。狭い入り口に反して広い内側は左右に分かれていて、右側は個別にパーティションで区切られた部屋が、左側はテーブルやソファをいくつも並べたオープンな場所となっている。ドール達がいたのは左側で、一番窓際の席三つほどつなげて、二人のドールが座っていた。

なにやらホログラムの図面を広げて、それを挟んでぶつぶつと囁き在っている。背丈からして、十代半ばの男女のようだ。二人はセルニアの足音に気づくと、ぱっと図面を消してこちらを振り向いた。「なんだ、セルニアか」少年がため息混じりに言う。「脅かすなよ」「ええー。何してたの?」

「秘密、秘密」

「またあ?」

「それより」少年の頬をつねりあげて、少女が奥から体を突き出してきた。「そつちのは誰ですか? 見ない顔ですけど。ルクルスの手下? それともアーベンロートの」

「二人はこつちに来たことが?」トキアキが聞いた。

「あ、ええ。知ってるんですね。……えっとね、どつちでもなくて、

エクって言う大竜から来たんだって」

「外から？ あ、竜も来てる？」

「あ、こら待て」

少年が少女の手から離れて勢いよく駆け寄ってくる。それを追いかける少女。二人ともセルニアの二歩先まできて立ち止まった。セルニアは二人の横に立ってこちらを向く。

「男の子の方がケート、女の子がカシエ。ここでは一番若い二人です」

「よつす、ディックだ」

ディックはすたすたと近づいて行って、二人の前で屈み込む。少年の方がとりわけ警戒した風な顔をする。少女は小首を傾げて、じつとディックの顔を覗き込んだ。

「竜なら今は空の上だ。後で呼ぼうか？」

「う、うん」

「私、乗ってみたい」素早くカシエが言った。「駄目？」

「いいに決まってるだろ」

「あ、ずるい」

「よつし、二人ともだ。ところでさつき何やってたんだ？」

ケートとカシエは素早く視線を合わせた。それからケートがセルニアを一瞬だけ見て、カシエに頬をつねられて視線を戻す。

「秘密」

「よし、あとでおっさんにこつそり教える」

「自分でおっさんとか言っちゃ駄目よ。ひねくれ者になるから」

「なんだ？ そろそろやつがいるのか？」

「いるいる。うちの両親とかね」

「ほー。気をつけよう」

あつという間に馴染んでいるディックから、トキアキは数歩距離を取る。と、肩が誰かにぶつかった。セルニアだった。いつの間後ろに回ったのだらう。彼女は少し驚いたような顔をこちらに向けた。

「どうしました？」

「いや……」

単に、話のきっかけを見つけれないだけだとも言えず。ともあれトキアキはどうしたものかと途方に暮れる。天井を見たらそこに答えが書いていないかと虚しい期待を込めて見るが、そこにあるのはクリーム色ざらついた表面だけだ。カンニングは失敗。トキアキが視線を下ろすと、じっとこちらを見ていたセルニアがきよんとして首を傾げた。

じんわりと頬に登ってくる何かを、ぐっと力を込めてため息に乗せる。はき出した息は思ったよりも熱かった。

まあ、ディックは子供が好きだから、一緒にさせておけば元気になるだろう。当初の目的は達成、と心の片隅にメモをする。

「ディックはこっちに放置して、他にいこうか」

「おー、そうしろそうしろ」ディックがこっちを向く。「トキアキ、ケケツト借りるぞ」

「本人に許可もらえ」

「え、いいんですか？」セルニアがこちらを見る。

「大丈夫。あいつは子供受けがいい」それがCBだとしても。「いや、そっちが危険視してるなら無理は言わないが」

「あ、それは。大丈夫です。信用します」

「大丈夫だトキアキ。ちゃんと監視されている」

アルテミスの方を振り返る。彼女が窓の方を指さしているので、それに釣られて視線を動かすと、しまったとばかりに男のドールが頭を掻いて苦笑した。ずっと見られていたのだろうか。

しかし、だ。

「監視つて、他に言い方はないか？」

「……………」沈黙されてしまったよおい。「わからない。すまない」

「いえいえ」セルニアは苦笑する。「気にしないで」

「ありがとう」

「あはは。くすぐつたいなあ」

「次に行くか」

トキアキはさっさとレストランの外に出た。それについてくるセルニアとアルテミス。そして出入り口を通過したところで二人を待ち、二人の背後に回る。セルニアは首をねじって振り返ってきた。

「なんで後ろに行くんですか？」

「あー」トキアキは頬を掻いた。「すまん。癖で」

「へー。おもしろい！」ぱちん、と胸の前で手を叩く。

「……………」何が？ というかどう反応しろと？ まあいいや話題を変えよう。「ところでさっき、両親って言ってたけど」

「ケートとカシエの？ ええ。二人には親がいるんです。ドールですけどね」

「あんまり耳慣れないんだが、そういうのは普通の事なのか？」

「あはは。変わってますねえ」

セルニアが歩き出したので、それに釣られてトキアキも歩き出す。話しくいので、トキアキは彼女の横に並んだ。

「どういう事情か、聞いても？」

「隠すことじゃないですから。あの二人は双子なんですよ。サラミスが滅びた後に生き残ったドールで、つきあい始めたカツプルがいて。その二人が子供が欲しいとなったから、それぞれの人格をモデルに子孫をシミュレートして二つの仮想人格を作り、それぞれの体にインストールしたんです」

「へえ…………」なんでもありだな、仮想人格って。

「さっき話題に出たアーベンロートも、その時の縁で知り合ったんですよ」

「ああ、なるほど」

そういえば、生産施設は潰れたと言っていたが。すると人格クローンを生成したり、子孫をシミュレートしたり、体を用意したりというのは外部の誰かに任せる事になる。アーベンロートは、相応の対価を要求するが、それにあわせて必要なモノを提供している。各

地を旅しながらそういつた真似をしているのだから、いわゆる商人
と云うべきだろうか。

「アーベンロートはたまたまここに？」

「というか、元々はキルケの紹介だったんです。キルケはサラミス
が滅びる少し前に来たドールで、それまではいろんな所を旅してい
たらしいですよ。あ、キルケの事は知ってたんですつけ」

「タマつていうC Bが時々話してたんだ。昔なじみで、同じ人に作
られた兄弟機だと言っていた。ただその主が死んだ時に袂を別つた
とも」

「へー。そうだったんだあ」

「知らないのか？」

「キルケは自分の事は全然話さないから」

唇をとがらせて、拗ねたような態度を見せる。が、どう見ても目
が笑っているのだから様にならない。ぐにやぐにやに曲がっている針金
を無理矢理真っ直ぐに伸ばしているような違和感が、トキアキの首
筋をちくちくと刺激した。

いや、ちくちくするのは別の理由か？ 振り返り、アルテミスを見
る。月を真っ二つにぶつたぎつたような半眼でこちらを見据えて
いた。

「どうした？」

「何がだ」アルテミスは普通の顔に戻る。「今、変な顔をしていた
かも知れないが、忘れて欲しい」

「あ……ああ」

「ふふ」セルニアは笑った。

「何だ？」

「えー」今度はセルニアが半眼。それから目をくるくる回した後、
肩をすくめて「次行きましようか」何にも答えちゃくれなかった。

「それがいい」アルテミスが頷く。

……… まあ、女性陣が仲が良さそうなのでそれでいいかと、ト
キアキは二人の後を追いかけた。といつてもアルテミスが女性かど

うかは、かなり微妙なラインなのだが。

「やれやれ」

一体何がやれやれなのか。自分でもわからないままにつぶやいて、ため息をこぼす。

天を仰げば、通りの向こうからケケットがゆっくり滑空してくる
ところだった。

「よっこいせ」

タマはほとんど何も考えずにそう言うと、白亜の大竜シーラの背中から飛び降りた。本物の猫を思わせる身軽な動作で、音一つ立てることなく瓦礫の上に着地する。タマは数メートル歩いてシーラの横に立つと、言った。

「ありがとよ」

シーラはちかちかと目をひからせると、微かに首を揺らした。続いて背中からアーベンロートが出てくる。彼は人間のように翼の端から下りていくと、シーラに言った。

「それでは後は任せました、シーラ。順次、こちらに運んであげてください」

「了解」

短く応じると、シーラはそっと音も立てずに垂直上昇。その優美な姿を見せつけるように旋回すると、空を裂く光のごとく真っ直ぐに滝へと向かって行く。間もなくしてシーラは滝の中に飛び込んで行き、再び暗闇の深海へと姿を消した。

「無愛想なやつだね、あいつは」

「元が元ですからね。私の昔の知り合いでも一番ぶっきらぼうな奴がモデルですし」

「どんなだったんだい、そいつは」

「あんまり人間っぽくなかったですね」

「ああ……オリジナルの方の知り合いかい」

「イエス」

言いながら二人は歩き出す。会話の声は少しだけ大きい。背中から響く、あの莫大な滝の水音が海底都市中を満たしているからだ。おそらくは内部からミサイルでも撃ち込んでぶち壊したのだろう。その程度では致命的な事になりはしないが、おかげで都市の半分は

水没したらしい。

「あんたはすでにここに来たことがあるんだっけ」

「そうですね。ちょっと忘れていましたが」

……こいつの言うことだから、本気で忘れていたのだろう。CBにあるまじき事だが、アーベントはこの辺りの記憶処理をかなり複雑かつ曖昧に行っている。彼の母艦のトリグラフなどは、アーベントを指して「生きたバグね」と言っていた事がある。こういうやりとりをしてしまうと、タマとしても同意せざるを得ない。「忘れていたなら思い出しな。どういう経緯だい？ まさか、あの滝をどうにかしたとか？」

「それはルクルスですね。戦いの話を聞きつけて仲裁に向かったのですが、もう遅かったようで。生き残ったCBがここを離れたからなかったから、渋々処置していったようですよ」

「渋々、ね」

その割にはずいぶん丁寧な対応なこと。タマはそれを口にはしなかった。

「にあ」

「ご機嫌ですね」

「そうだねえ。……しかし、キルケかあ。懐かしい名前なこと。てつきり死んだと思っていたけれど」

キルケは、タマと同じ人間を主とするドールだ。主か死んだ時に袂を別ち、それ以来一度も会っていない。二度と会うとも期待していなかったが、こんな形で再会するとは。

「キルケの事は時々聞いていたよ」タマは言った。「二百年前から名前を聞かなくなったけどね。まさか、居場所を見つけたとは思わなかったよ」

「本人もそう言っていましたねえ」

「だろうともさ」

キルケは目的を持って旅をしていた。だがその目的のために、彼女は度々危険な場所へと身を投じなくてはならなかった。そして実

際、治安が悪くなった竜や竜巢に潜っていったのだ。

しかし、いつしか誰とも無く囁くようになった噂は、多少ねじくれた物だった。キルケの行くところではかり災いが起こると言われるようになったのだ。それ故に付いたあだ名が災いの魔女。大概のCBは彼女が来ることを拒むようになり、キルケの居場所はどんどん無くなっていった。

そして二百年前。ぱたりと噂が途絶えるに当たり、タマはついに彼女が死んだと思ったのだ。

「それがまさか、ねえ……………」

何度考えても、ため息をつきたくなる。タマとしては、死体を埋めて墓まで作ったはずなのに、実はそこは空っぽで背中から「よつ」と声をかけられみたいな感じである。全身から力が抜けていき膝が折れそうになる感覚は、驚きを飛び越えて愕然とさせられた。

「あいつはどうしてた？」

「もうすぐわかるでしょう」アーベンロートは微笑みをこぼす。

「ふん。私に意地悪したって何もでやしないよ」

「まあ普通でないでしょうね」

曖昧な言い方で含みを持たせる。続きがあるかと思っただが、後に続くのは足音と瀑布の響きだけだった。タマは潔く話題を変えた。

「あなたはなんでここに来たんだ？」

「アフタ・ケア」

「意味がわからない。昔商売に来たんだっけね」

「ええ。二度ほど。どちらもドールの躯体と、人格クローンの生成システムの提供でした」

「ドールを作ったのかい。なんでわざわざ」

「プライバシーなので言えないですねえ」

「そうだろうともさ」

やれやれと尻尾を振って、タマは話題を切り上げた。

二人はそのまま瓦礫の丘を進んで行き、ケケット達からもたらされたマップに従い、CB達の村にたどり着く。そこでアーベンロー

トとは別れて、タマはすぐ右手の建物へと向かっていく。

そこには揺り椅子に座った一人の女の姿がある。彼女は足音すら立ててないタマに気づいたのか、ゆっくりと目を開き、こちらを見下ろした。そして口の端をつり上げて笑う。可愛げの欠片も無い、肉食獣のような獰猛な笑顔。食ってやるのはこちらだとタマはふしやーと声を上げた。

「ふん、久しぶりだな、白猫」

「久しぶりだね、ひねくれもの」

タマはよいしょとテーブルに乗り上がる。そして見上げた先では、肘掛けに頬杖を突いたキルケの、満月を無理矢理左右に引っ張るみたいな嫌な笑い方が待っていた。

「何の音沙汰もないと思ったら、ちゃっかり生きてるんだね、あんたは」

「我がそう簡単に死ぬと思っっているのなら、そなたもずいぶん可愛らしいところがあった、というべきだろうな」

「よく言うよ。あーだこーだ言いながら、いつつも危険のただ中に飛び込んで行くのはあんたの方じゃないさ。ディックの気持ちも考えずに何度危ないことをしでかした？」

「ふむ。我としてはあれが最善だと信じていたが」

「それは否定しないけどね」

「ならば良いではないか」

「良かないわい」

じーっと睨みつけてやると、くつくつとキルケは笑って見せた。

やがて、我慢しきれなくて、タマも尻尾をふらふらと振って機嫌の良さを表明した。

懐かしくも小気味よい言葉の応酬。気心の知れたモノ同士にしか許されない、弛緩した空気が漂い始める。

何百年ぶり彼の再会は、衝撃でも驚きでもなく、ただ和やかによって成立しているようだった。

「それにしても、お前は未だに昔の主を忘れられぬようだな」キル

ケは言った。

「お前こそ、人間に未練たらたらのようなではないか」負けじとタマは言い返す。「聞いているぞ。滅びの魔女、だって？　なんて仰々しい二つ名だ。ルクルスみたいに、映画のキャラクタでもトレーヌしたってのかい」

「そんな無駄な事をせずとも、我々は映画やアニメのような馬鹿げたキャラクタになる事はできる。元は人間が生み出したモノだからな。我らと大きな違いは無い」くすつと、セルニアは口調と矛盾した可愛らしい微笑みを浮かべる。「それに、二つ名というのもそれほど悪くない。忌み嫌う称号であったとしても、私の生の一片だ」「腹は立たないのかい。あんたが滅ぼしてきたわけじゃないだろう」「だが、止められた事は一度も無い。我が現れれば滅びるといのは、統計的には正しい」

「違うね。あんたは滅びの危機を聞きつけては、やってきて止めようとする抗うモノだ。自虐的になるのはおよし。遊びにしたっておもしろかないよ」

ふんと鼻を鳴らす。ネガティブなのは、最近腹一杯なのだ。トキアキの世話をするだけでこうだったのに、昔なじみにまで付き合わされてはたまらない。だいたいこいつが、そんな事でへこむほど可愛い性格なはずが無いのだ。

「ふむ。トキアキという人間がよっぽどお気に入りに見えるな」「なんでそうなるんだい！」

ふしやーと毛を逆立てるタマ。それから、しまった、と思った時には、もう挽回のしようもなかった。キルケはきよとんと目を丸く見開いた後、ふはははと大笑いを始めたのだ。

タマ、尻尾ふにゃふにゃ。おーよしよしと背中を撫でてくるので、思いつきり爪を立ててやる。すか。はずれた。

「なんだ、もしやと思ったが本当にそうなのか。最近はずいぶん勘がさえている」

「意味わかんないこと言うてんじゃないよ。大体勘って何さ」

「うむ。最近ハマっててな、当てずっぽう的中精度を高めるシステムを組んでいる」

「……………」バカじゃないの？「まあいいけどさ」

「しかし、確かにトキアキはディック博士に似ているな。我々の生みの親よりは、いくらか情けない感じがするが」

「冗談だろう。ディックはもつとしっかりしていたさ。どっちかていうと、今のディックの方がそれっぽい」

「あれはできすぎであろう。ここにいるCBも今やすっかりやつには打ち解けているぞ。たった二日で、よくもまあそこまで人望を勝ち取れるモノだ」

「あいつはエクでもそのくらいで人望を勝ち取ったよ。トキアキとは大違いだ」

「だが、我々の生みの親はトキアキと同じくらい不器用だったではないか」

「……………」

「ふふん」

「なんだい」

「いやなに。確かに、あれには既視感を覚えたと思っただけよ」

きいと、キルケは揺り椅子を傾けた。タマは尻尾をゆっくりと振って、どうだかね、と曖昧に濁す。

「うるさいよ。そんなんじゃないっての。…………あー。ところで、そのトキアキはどうしてる？」

そわそわ。尻尾が揺れるのを、キルケは見逃さない。しかし今度はその口にしなかった。何事も限度があるという事だろうか。

「やはり気になるか」

「さつさと言いな」

「セルニアに興味津々のようだ」

「誰だい、セルニアって」

「なかなか複雑な娘だ。また難しい所目をつけたものだと感心している」

「待て。答えになってないわい。誰だい、セルニアって」
キルケはくつくつと笑って誤魔化し始める。タマ、毛を逆立てた。頬を引っ掻いてやるうかと爪を伸ばす。

アーベンロートは通りを抜けて、再び瓦礫の丘に入っていく。その足取りは遅い。もともと、猫の歩幅しかだせないタマと大差ない速度で歩いていたことがその証明だ。あえてゆっくり歩いているとしか思えないような速度で、ひび割れた道を進んでいく。

「ああ……………」

段々思い出してきた。サラミスに来るのはこれで三度目だ。

一度目はルクルスを経由して、キルケから呼ばれたのだった。サラミスの戦争で生き残ったモノ達が子供を欲しがっていたという、そういう理由だった。なんとも奇妙な依頼だったが、キルケが関わっているとなれば、なるほど納得できるところもある。

二度目はキルケから直接呼び出された。一度あれば二度目もあるかと思っていたが、まさか本当にその日が訪れるとは思っていなかった。CB同士で恋に落ちるといのは、なかなか興味深い現象だ。トリグラフやエクに聞いても前例が無いという話だったが、この現象は一体何故発生したのか。

「サラミスの環境がそれを許したのか……………いや、きっと違う。
「キルケが思想を改良したんですね」

おそらくは彼女の仕業だ。災いの魔女。数多の竜の滅びを見てきたモノ。擦れているようでいて、愚直な生き方を続ける不器用な一体のCB。真の意味で寄る辺を持たない独立した種。

この海に生きるCBのほぼ全ては母艦といわれる大竜を持つ。アーベンロートならトリグラフ、タマやカスレプスならエクという風だ。人災で滅びた街の生き残りであるにしても、旅立ち、別の母艦を見つけてそこに受け入れられるのが通常の流れである。

サラミスのように旧式の施設のCBであれば、場所に対する印象

が母艦持ちのCBよりも深く、話は異なってくるが……。

しかしそうではない。キルケは何度でも母艦を持つ機会があった。それにも関わらず、決して母艦を持つとはしなかった。彼女がまだ魔女呼ばわりされていた頃、アーベンロートがトリグラフで彼女のバックアップを取り扱おうかと提案した時も、キルケは遠慮した。通常であれば断るところは無い。バックアップを取ることで、自らが減びても、代わりの自分で目的に邁進できる用になるからだ。

「アーベンロート。それでは駄目なのだ。我は我の代わりがいるとわかれば、きつと我を無下に扱うことだろう。それでは駄目なのだ」
彼女はそう言った後微笑んで「だが申し出はありがたかった。感謝する」その言葉を残し、再び旅に出た。それから程なくして彼女の噂は途絶えることになる。

アーベンロートが記憶のバックアップを行わなくなったのは、それからだった。何が理由かは未だに整理が付かないが、おそらくは彼女とのそのやりとりがきっかけだったのは間違いない。

キルケは出会ったモノの意識を変えずにはおかないモノだ。そういう意味では、魔女という二つ名は実に相応しいモノのように感じられた。

そして、そんな彼女であるからこそ、CB同士が恋愛にいたるといふ奇妙な事もある気がするのだ。

事実として、このサラミスではCB同士の恋愛というモノが発生した。結局の所は、それだけが明かな事なのだ。そしてそれは、キルケがサラミスに居続ける事から考えても、彼女がこの深海の中で心地よく昼寝のできる、日向を見つけたことを意味していた。

深海の日向。タマも、カスレプスも、アーベンロートもそれぞれそれを探している。そして誰もが、それぞれの形でそれを手に入れつつある。タマはエクという居場所を。カスレプスは、機械整備という趣味を。アーベンロートは、モノとモノとをやりとりする商人という立ち位置を。

サラミスのモノも、そうなのだろうか。この深い闇に包まれた棺

の中で、日向を見つける事が出来たのだろうか。

そうであるなら、是非一度聞いて見たい。あなたはそれで、どうなったかと。

「、、」

ざざ、と。頭の内側をノイズがかき乱す。喉の奥に何か詰まるような感覚を経て、アーベンロートは自らが顔をしかめていることを自覚する。

奥歯を噛みしめたくなくなるような感情の去来は、自己と意識の乖離によるモノだ。アーベンロートという人格クロン体と、それを客観管理する仮想人格としての自己のズレ。アーベンロートになる事を目指して生きてきた自分を一瞬でも自覚すると、こうなってしまう。

ここ最近はずれる事など無かったというのに。珍しい事だと、苦笑する事でアーベンロートに回帰する。

「私もメンテナンスが必要ですかね」

アーベンロートはゆっくりと頭を巡らせた。まだ、目的のドール達の姿が見えない。発信信号から察するにこのあたりはずだが。

CBが竜を母艦とするにはそれなりに理由がある。それがメンテナンスだ。仮想人格は独立して存在し続ける事もできる自己修復可能なプログラムだが、だからといって、壊れないわけではない。むしろ、逆だ。定期的なメンテナンスを行い、記憶と意識の整合性を保たなければ、様々なひずみからひびが入り、簡単に崩れるようになってしまう。

そのために、CBの中でもまた特殊な存在である竜に頼る必要がある。竜は、その中でもにネプトウヌス級以上の大型艦は例外なくCBでもトップクラスの複雑な制御系を持つ。当然だった。水陸両善環境対応の船体の保守整備に、内部の生活環境維持機能。循環系における資源リサイクルのパーセンテージは99%を厳格に維持しなくてはならない。元が移民船として作られたモノであるが故に、大竜のスペックは高い。

それ故に、その処理系も他のCB以上に複雑な処理に対応しなくてはならなかった。その結果として竜が選んだのは人格の融和、複数のCBの意識を取り込み、並列分散処理するというメソッドだった。昔からよくある、情報処理系の基本的な対処方針だった。

もつとも、単独でさえ複雑な系を有しているCBをさらに複数連結させ処理するというのは、それだけで特化した機能・性能が必要になる。莫大なデータの可用性、整合性、ネットワーク分割耐性への処置は、結果として竜自身を各CBのデータを管理するだけのシステムへと変えた。竜における人格というのは、自身に含む各CBの意識集合体とも言うべきモノだった。

そのため、トリグラフにしるエクにしる、この手の大竜は皆奇妙な性格をする事になるし、滅多に表には出てこない。そもそも艦内のCB全ての意識集合体なのだから、わざわざ自分という姿をさらす意味を彼女たちは考えないのだ。

もつとも、アーベンロートのように人格を完全に独立させてしまうと、そうも言っていられない。普通のCBは普段から竜とつながっており、バックアップだけでなく、艦内のCB間の意識共有も行い、相互把握が完全にとれている。だからその際にメンテナンスも完了するが、アーベンロートのように外れたモノを時々だけメンテナンスを行うには、彼女たちも自ら姿を現し、意識的に同期しなければならぬ。

……そう言えば、トリグラフと対面したのは、アーベンロートがああに迎えられた時を除けば、独立した時が初めてだったかもしれない。

今にして思えば、彼女は不安を覚えたのだろう。自らの内側が欠けるような感触に驚いて、思わず飛び出してきてしまった、と。

そう考えると、竜というのもなかなか可愛らしいモノである。

「あ、いた」

そうこうしているうちに、目的地が見えてきた。

アーベンロートの視線の先には、瓦礫の丘に囲まれた平べったい

空き地が広がっていた。多少大きなイーグルであつても難なく着陸できそうな面積を開拓するには、一体どれだけの手間がかかったらうか。

その場所には、今は何体かのドールや人が集まっています、

「……へえ」

かきん、と快音が響く。

赤く錆が残ったバッドが白いボールを高く打ち上げる。小柄なドールが走って外野へ。届くだろうか。届かないだろうか。山なりのボールの行方を見守り、アーベンロートはふと微笑む。

知識にはある。これは……、そう、野球というゲームだ。

アーベンロートはゆっくりと辺りを見回すと、ベンチとおぼしき数体のドールが座っている方へと歩いて行く。するとその中に混じって座っていたセルニアがこちらに気づいた。にこりと笑うと、立ち上がり、こちらに近づいてくる。

「こんにちは、アーベンロートさん。お久しぶりですね」

「……………」

……………。

「あれ、前にも会いましたっけ」

どうも、キルケが指さしていたのを見たことがあるだけだった気がするのだけれど。

「ありますあります。子供達の相手をお願いしたりしたじゃないですか」

「きつと偽物ですね」

「えええ……。本当に忘れてます？ みんなで紙飛行機作ってる時一人だけ違う形の作っていたような」

「ああ。私っぽい」

「あは。お久しぶりです」

「はい、お久しぶりです」

ぺこりと頭を下げる。こうやって、会う人会う人全員に対して態度を変えているから、わけのわからない奴と皆は言われるんだろう

なあと考えつつ。

「今日はどのような用件で？」

「コレットとエルンストはいますか？」

「二人とも仲がいいですよ。ちよつと蹴っ飛ばしたいくらいに」

「なるほど」相変わらずバカップルやっていると。「懲らしめてもいいんですよ？」

「いやいやいや」

「二人はどこに？」

「観客席の方にいると思いますよ。えーと」セルニアはきよるきよると辺りを見回した後、丘の一点を指さした。「あ、あそこです」
「どうも」

アーベンロートはそちらに向かって歩いて行く。観客席、と指された瓦礫の山の中腹では、すでにこちらに気づいているコレットとエルンストが腰を上げて近づいてきていた。お互いの距離の中間……より、ややアーベンロートに近い場所、一塁から少し離れたところで合流する。

「こんにちは」

「またからかってたんですか」にやにやとエルンストは笑っている。
「調子ならいいよ。特に調整もいらなくらい」

「あ、別にアーベンロートのことを嫌ってるわけじゃないんです、この人」コレットが言う。「医者嫌いの人間みたいな癖が付いてるだけで」

「なるほど。バグですね。至急調査しましょう」

「まあまで話を聞け……って、アーベンロート？」

「はい？」

「機嫌が良さそうだな」

機嫌？ はて。覚えはありませんかという言葉を、喉の奥にぐつと押さえ込み、「そうですね」と頷いた。

「今日は私たちが、子供達のメンテナンスですか？」

「いえ、単に立ち寄ったので様子を見に来ただけです。二人は？」

「元気にやってますよ。ほら」

コレットがそつと腕を持ち上げる。その手の平が示す先へと視線を向ければ、ピッチャーマウンドで勢いよくボールを投擲するケートの姿が合った。飛来する白球は、暴走する獣のように疾走する。時速百三十キロの牙は、やがて、へたれトキアキのバットの下を高速で駆け抜けてキャッチャーミットに収まった。

「あれはトキアキには打てないでしょう」

「いや、あいつ第一球はホームランだしてたけど」

「へえ……………ああ。一度目はうまくいくんですよ。余計な事考え

ないから。それで降ぼるぼるのはずです。勘ですが」

「良く知ってるなあ。そうそう。そうなんだよ」

「勘つて、キルケみたいな事言いますね」コレットが苦笑した。

「心当たりがあるけれど差し障りのあることは勘と言うことにしているんです」

「ああは……………」二人とも、顔を見合わせた。

「キルケがどうかは知りませんが。今頃は旧友と再会して楽しくやっているんじゃないでしょうか」

「へえ。キルケの？ そんなのいたんだ」

「こら」容赦なく頬つねるコレット。「口が悪い」

態度が悪いのとどっちがマシなんだろうなあ、とアーベンロートは内心で考えた。

「まあそれより、親父はどうしてる？」エルンストが言った。「義母さんも」

「あの二人なら、もう二十年は前にトリグラフから出て行きましたよ。生粋の旅人のようで、二人を産んだ分の支払いを済ませて、知識と技術を身につけたらさっさと出て行きました。今頃は地球の反対側かもしれません」

「あり得る」にやりとエルンストは笑った。

「孫がいることを知ったらどう思うかしらねえ」にやにやと笑うコレット。「そのうち会いに来て欲しいなあ」

「気が向いたら来るでしょう」

言つて、アーベンロートは苦笑する。まあ仮に会いに来たとしても、それは孫に会いにくるのではなく、二人がそれぞれ愛した人間との間に儲けた子供、すなわちはエルンストとコレットを見に来るのだろうが。

エルンストもコレットも、その両親の片方は人間であり、片方がCBである。人間の人格クローンとCBの人格クローンを元にして、掛け合わせた結果生まれた仮想人格を子供型のドールにインストールしたモノだ。その後は、二人の成長に合わせて大人型の体にして、現在はその姿で安定している。

もつとも、その二人がまたそれぞれ恋仲になり、子供をもつける事になるとは思わなかったが。一体何なんだろうなあとは、エルンストとコレットに子供が欲しいと言われた時の感想である。

CBが恋、ねえ。

アーベンロートにはいまいちよくわからない。そもそも、アーベンロートのオリジナルとなった人間からしてそういう方面には疎かった人柄だ。知らないわけではなかったが、生涯実感できないだろうと考えていた節がある。

人間ですらそうなのに、CBが、とは。

現実としてはエルンストとコレットの親はそれぞれサラミスの生き残りの人間と愛し合い、子供を作るに至った。そしてその子供であるこの二人はそれぞれ恋仲になり、やはり子供をほしがった。キルケがどういう教育をしたのか知らないが、ケートとカシエを見ていると、二人もそのうちそう言うことを言い出しそうだとアーベンロートは考えている。百年後か、そのくらいには。

「ケートとカシエがいつ言い出しても良いように、システムは用意していますよ」

「二人が恋人かあ……………」コレットがほわんとした顔になる。「ふふふ」

「戻ってこいって」エルンストがコレットの頬を引っ張った。

「ちょっとおー」

「あーもういいです二人とも」

面倒くせえと頭の中で毒を吐く。

それにしても、と首を捻るアーベンロート。本当に、何をどうしてこうなったのか。二人は何をどう考えて子供を作ろうという結論に至ったのか。それ以上に、二人の親は、かつてサラミスで起こった戦いにどういう整理をつけたのか。

人災であれなんであれ、災厄に見舞われた人とCBは対立するか、距離を置くことが多い。そして距離を置くと同時に、急速に種として弱体化し、二十年と保たずに滅亡するのが統計的な事実だった。しかし距離を置かなければ二十年保たずに内乱が起こる。結局の所、一度でも傷つけ合い、離別を経ては、二度と再会することが叶わないというのが現実だった。

しかしこの二人は、その例外という生きた証明に該当する。それは別の可能性の提示でもある。

一体何が違ったのか。それを知るためには、二人の過去を暴き立てなければならぬ。だが二人は、竜へのバックアップも意識共有も拒否している。……やはり、そうやって独立していくと、一風変わった仕様になるのだろうか。

タマ、キルケ、アーベンロート。エクに棲まうCB達。いずれもスタンドアロン型で、一癖二癖あるタイプだ。

検討の余地はあるかもしれない。特に竜では、この方面の検討は不可能だろう。大抵のCBでも。何しろ、我々という種族は互いを理解していることが前提となっているのだ。つながらない事こそが例外的な種族。独立しているモノの思考回路を本当に理解するためには、圧倒的に経験が足りていない。

あるいは。

ふと、面を上げる。トキアキががっくりと肩を落としてバットを引きずり、ベンチ側へと戻っていく。成果は空振りだったらしい。

「あるいは、人間ならわかるのか」

互いを理解していない事が当たり前で、
それでも、生きてこられたあのモノ達なら。

野球は苦手だったというか、そもそもスポーツ全般が苦手だった。トキアキはほとんど無意識のうちに肩を落として、バットをデイツクに譲った。まあいい。もともとデイツクと平均してイーブンになるような戦力バランスと言われていたのだ。望み通り精々マイナスに突き進んでやるうではないかと思いを負の方向へ新たにする。

「ほい、任せた」

「任された。あの程度のボール、アルテミスのレーザーに比べたら
蠅みたいなもんだ」

「ケート、こいつレーザーでも狙って避けられるから全力で投げる
よ」 応援してみた。

「人間にそんなことできるわけ無いだろバカー」
からかわれたと思ったか、ケートはいーっと口を横に引つ張る顔。
思い切り張り手をしてやりたい衝動に駆られつつも、まあ後悔する
のは当人だという事でにやにやと寸劇を見守ることにする。ベンチ
という名の安全区域の地べたに座り、背中を曲げて膝の上に頬杖を
突く。

野球とは言うものの、今日のゲームはずいぶん曖昧なルールに
なっていた。そもそも人数が揃ってない。参加しているのは、トキ
アキ、デイツク、ケート、カシエ、セルニア、アルテミスの六人だ。
二人ほどスペックのぶつ壊れた連中がいるが、その分ケートやカシ
エも専用プログラムで対抗するという事で合意が取られた。

なんで強い方にあわせるんだよ、という不満は心の筆筒の奥の方
へとしまい込む。

この面子でどうやって野球をするのかと言えば、単に、ケートと
カシエが生きたピッチングマシンとなる事で解決した。空振り三振
で交代。四球は認められない。ファール、チップはストライク扱い

というルールである。ケートとカシエのどちらが成績がいいかの勝負だった。

ちなみに、トキアキは初めの一打でまぐれのホームランを出してしまい、いきりたったカシエにもう一度の挑戦を申し込まれ見事に三振してきた。その調整もあり、ケートの番でも最後にもう一回トキアキに回ってくる。三振に決まってるだろう馬鹿野郎。誰が打てるかあんなん。心の中では口が達者だが表向きは仏のごとき面と書いて仏頂面を保ってる。

さて、バッター・デイク。カシエの時は二ストライク、一チップの凡退だったが、悔えることは出来ない。あのかのカシエの打球速度は百四十キロだった。最後がカーブでなければ、カシエの速球は打ち取られていただろう。彼女はくすくす笑っていたけれど、内心はどうだったのか。

第一球。最初から遠慮無しとばかりに全力投球。白球は今や弾丸のように空気の壁を貫通する。待ち構えるデイクはしかし、それを見て口の端をつり上げた。

フルスイング。銀色の軌跡が白き疾走と交錯

「ストライク」

しなかった。ばしん、とアルテミスがボールを受け止める。くるくるんと回って、おつかしいなあとデイクは頭を掻いた。

「タイミングはあってました……よね？」セルニアがぼつりと言った。

「俺はそもそもボールもバットも見えてない」トキアキは半ば目を瞑るように視界を細くする。

「微妙に高さが違ったのかな？」

「……………」

いや、多分、と言いかけた言葉をひっこめる。予感があったが、根拠は無い。そうこう考えている内に第二球はチップ。バットの下側を擦ったのか、勢いよく地面に突き刺さり、バウンドした所をアルテミスが高速でキャッチした。

「あつれえー」

「惜しいっ」

「へっへー、あと一球」

賑やかだなあと、トキアキは少し離れた視線で事態を見守る。

「おい、トキアキ!」

が、何故かディックに八つ当たりされた。トキアキはえーという顔。

「なんだよ。俺のせいかな?」

「なんで当たらないんだ?」

「知らん」

「見てただろうお前」

「見えてねえよ」お前のような動体視力を期待するな。

大体、ディックくらい身体能力があるのなら、野球はピッチャーとの精神的な駆け引きに終始する。ボールが放たれるタイミング、球種、それらを読みあい、時に牽制し、いかにあわせるかが勝負の決め手だ。

……………いや、だからこそおかしいのか。ディックはタイミングが合っている。だがヒットしない。ディックも疑問に感じている。おそらく彼のイメージの中ではバットは快音を立てているはずだ。そしてそれが実現していないと言うことは、イメージと現実の間に差があるという事。その差を生む理由は、彼の身体能力が妄想の産物であるか、もしくは。

「ディック」

「なんだ」

「バットはそんなに重くないぞ」

「あ? ……………ああ、なるほど」

ディックは小さく頷くと、再びケートに向き合った。セルニアが不思議そうにこちらを見ているが、それには答えない。

さて、拝見。ディックは気づいたようだから、あとはこちらの指摘が正しいかどうか。果たしてその結果が目前に現れる第三球の行

方は、

「……あつ……」

セルニアとケートとカシエが声を上げる。アルテミスはその快音の行方を目で追いかけている。ディックは笑い、やりい、とガッツポーズ。

果たしてボールは、丘の向こうへと飛んでいく。詳しく語るまでもない。それは見事なホームランだった。

「運がいい」

自分の推論が当たるなんて、とトキアキは言って立ち上がる。ボールは一個しかないの、打ったら自分たちで取りに行かなくてはならないのだ。それを契機に皆がぞろぞろと立ち上がり、歩き出す。「どうして分かったんですか？」セルニアが隣で聞いた。

「あいつが、頭の中でホームランを打てるなら、それはその通りに体が動いてるって事だ。というのも」あいつは猿だから。違う。「身体制御に関してはC B並だからな。………それで打てないなら、まあ、道具に振り回されてるんだろうと思った」

正確には、道具が追いついてこない。ケケットも「最近ディックの操船について行けないの」としょぼんとこぼしていたことがある。ディックの動きに周りが追いつけないというのは、割と良くあることなのだ。

「それで微妙に上下にぶれたとか、タイミングがずれていたとか、まあ、あるんじゃないかと」

思っただけで、実際の所はどうかわからない。ただトキアキは、ディックがボールではなくバットをもつと意識すればいいと思っただけである。そのために適当に出任せを言っただけで、うまくいったとしたら、それはディックなりに何か工夫したからに他ならない。自分の指摘のおかげだとは、トキアキは思っていなかった。

「しかしまあ、ボールはどこなんだろうな」

頭をかきながら、トキアキはため息をつく。正直今はそっちの方が頭が痛い。これは当てずっぽうでやっても当たらないだろうとい

う予感が、余計に歩みを重くさせる。

「さつきはあつちに飛んでいきましたけど」セルニアは右の方の丘を指す。

「なるほど」

特に疑いもせず歩いて行く。

しかし三步と行かないところで、異変が起こった。

「っ、と」

ぐん、と地面から押し出される感覚。いきなり地滑りを起こしたもみtainな、足下全体を揺らす力がトキアキを微かに押し上げる。

一步、二歩とたたらを踏んで、トキアキは立ち止まった。冷や汗が背中をじんわりと濡らす。心臓がどくどくと元気良く飛び跳ねて耳元でやかましい。

何をそんなに驚いているんだと自らを窘めて、冷静なふりをしようとして辺りを見回す。

見ればセルニアものけぞって、今体勢を整えたところだった。

「大丈夫か」

「トキアキさんこそ。大丈夫ですか？」

「俺は」

「私も」

「……………」

微妙な空気。を、押し流すような倒壊音が遠くから響いてくる。

右手の、さつきセルニアが指さしたボールの飛んでいった方向だ。

そして「うおおおおお……………」！「聞き慣れた雄叫びが聞こえた。

まあ「助けてー」じゃないから緊急度としてはさほど高く無いだろうと聞き流す。しかしこれでボールの発見難易度は致命的に上がったしまったと、トキアキはため息をついた。

「あつ。い、今の！」

セルニアが何故か慌ててこちらを見る。トキアキは肩をすくめた。「ほつとけ。心配するだけ損だ」

それよりボールの所在が絶望的だ。地震以前にボールを見つけて

いたならあるいはという可能性もあるが……難しい。こればかりは運任せだ。

「トキアキさん？ 大丈夫なんですか、今の」

「デイツクだから大丈夫。地震か……そういえば、そういう物もあるんだな」

「え？」

「いや」トキアキは首を振った。「エクの中で暮らしてもう一年以上経つからだろうけど……すっかり地震というのを忘れてた」

「ここではよく在りますよ」セルニアは言った。「最近はそのせいで瓦礫の撤去が全然進まなくて。どうしてくれようかと」

「へえ」どうするつもりなのか、興味深い、とは言わずにおく。「瓦礫の撤去か……そういえば、アーベンロートから手伝いを借りたりはしないのか？ 偏屈だけど、言えば手伝ってくれると思うけど」エルとか、大型の機獣とか。対価に何を要求されるかはわからないが。

「あはは」セルニアは苦笑した。「うーん。まあ、趣味みたいなモノかな」

「片付けるのが？」

「あはは」

笑いながら、セルニアはそれ以上を口にしない。

表情はまるで変わらない。優しく細めた瞳に、少しだけ寄った眉根。隠さない笑みに、一見、相手を受け入れていそうな柔らかかな雰囲気。困気を化粧して。

それからすつと目を逸らし、こちらを見ずに歩き出す。

過ぎ去る背中に目を向ける。柔らかかそうな金髪に、柔らかかそうな肩の形。けれど、全体的にうっすらと灰色に、彼女は埃をかぶっている。それに弾かれた海底都市の照明は、セルニアの輪郭をうっすらとぼかしている。

そのせいか。

彼女の足取りはしっぴかりしているのに、まるで、ばらばらのピー

スの上をつま先立ちで歩くみたいに、彼女の歩みは不安定に見えた。

翌日。トキアキはサラミスにある施設の一つで目を覚ました。かつては民家だったのだから建物のリビングには、硬くほこりっぽいマットレスと布団。その上に寝そべっていたはずなのに、気づけばトキアキは床に直接倒れ込んでおり、自分の寝相の悪さに少し感動しそうになった。

ひんやりとした床の感触を頬と側頭部で十分に堪能した後、いっそ強情とも言える固さに不満を抱いて起き上がった。

じんじんとしびれを訴える頭蓋の内側。のけぞるように顔を上にあげ、眉根を揉む。これから一時間は頭がまともに働かないだろうと予想。けれど問題はその後だ。やる気を出さなければこのまま怠惰に睡眠をむさぼる一日となりかねない。

まあ、何にやる気を出せと言うのか、という問題はあるのだけだ。

その疑問を抱いた途端、脳裏を幾つかの設問がよぎった。落ち着きのない疑問の泡沫はあつという間に弾けて消える。さて、自分は何を疑問に思ったのかと、ゆっくりと頭をかき回す作業に没頭した。

「……………、ああ」
思い出した。セルニアのことを調べるんだった。
それと地震……………は、いいか。

大まかに捉えればこの二種類。トキアキが意識しているのはこれだけだ。他にもキルケの過去とか、CBの子供とか、気になる要素はばらばらにぶちまけたパズルのピースみたく断片的に散らばっているけれど、一つ一つ手にとって観賞するほど自分は勤勉ではない、と考えている。

さて、起床。ぼけーとした顔のまま立ち上がり、外に出て行く。左右にややふらつき気味なのはご容赦を。

そうして外に出た直後に、ディックに会った。道路の真ん中を歩

いていた彼は、こちらを見つけて近づいてきた。

「よ、寝坊助」

「お前は早起きだな」

「大抵の奴らはもう起きてるぞ」ディックは笑った。「どうしたんだ？ 死人みたいな顔してるぞ」

「どういう顔だ」

「目に力がない。頬に張りがない。視線が下を向いている」

「いつもの俺じゃないか」

「……………」

今、何か妙なモノを固定してしまった気がする。トキアキ自身違和感に首をねじってしまうが、角度を変えてもからっぽの頭からは何かが出てくる事はない。果たして首の角度をただして今し方のやりとりを闇の彼方へと葬り去る。

「まあ大抵死人みたいなもんだ、お前は」

そして若干時間遅れの無礼に追撃されるが、どうも、不満を言えるほど頭の回転数は上がっていないようだ。トキアキはこの方面に関する思考をパチンとスイッチして放棄した。

「いつ頃までここに居る？」

「そりやお前が決める」やっぱりそうか。「ただ、そんなに長くいられるもんかね」

「昨日の地震か？」

「ああ。ケート達に聞いたんだが、最近は頻繁にあるらしい。近くに火山でもあるのか。……ま、今日はこれから調べてくるよ。一日ケケット借りるぞ」

「借りるも何も」トキアキは顔をしかめた。「ま、戻りたいときはアーベンルートに声を掛けるよ」

「オーライ。あ、アルテミスに声をかけとけよ」

「あいつはそういえば、どうしてるんだ？」

「……………」

ディックは目を逸らし、首を斜めに傾ける。あーどーすりゃいい

んだろこいつ、という心の声が口にしてないのに聞こえてきそうな態度を目前に、少しだけ脳が活力を取り戻す。

「あいつ」ならそのへん散歩してるさ。そういや、ケケットの話だと、生物はいないみたいだ。あるのは受粉しないタイプの草花だけだっさ」

「なるほど」

「じゃ、俺は行くよ。戻るのにそんなに時間かからねえと思う」

「わかった。気をつけて」

「やっぱ寝ぼけてるな」

ディックは笑いながら、おうよと返して歩き出した。悪態の一つでもつくべきだったかと後悔しながら、トキアキはこれからの事を少しだけ考える。

何をしようかという具体的なイメージはない。セルニアのことを調べようとは思いつたものの、なんで調べようという気になったのかがいまいわからない。ひっかかりを覚えたという感触はあるのだけれど……。

寝ぼけた頭がゆっくりと鎌首をもたげる。対して、小心者の心根は怯えて巣穴に潜り込み、その姿を隠蔽する。ほじくり出すには自ら頭を突っ込む必要があり、その代償として窮鼠に顔をかじられてぼろぼろになる覚悟がいる。

まあ、自分の気持ちはおいとこう。人間の都合のいいところは、自分の事を棚に上げられるこの大らかさにあるのだろう。時と場合を間違えれば恥知らずにしか該当しないメソッドだが、全てを直視しては生きていけない人間が生きるには、ほどほどに必要な措置でもあった。

それに比べて、見た物全てを忘れることが出来ず、互いの全てを理解し合ってしまうCBというのは、一体どういう思考回路をしているのやら。……まあ、セルニアにしろアーベンロートにしろエクの皆にしる、独立志向の強い奴らが多いので、一概にCBはと言ってしまうのも乱暴か。

さて。自分を取り戻してきたぞ、とトキアキは頭を軽く振る。

セルニアの様子が気になるから、調べる。背景と目的はシンプルでさほど気になる所はない。問題は、どういったアプローチを選ぶかということだ。本人に聞いても笑顔と笑声で一定ラインから先はシャットアウトされるのは、もう散々繰り返した。かといって、本人以外から事情を尋ねても果たして教えてもらえるかどうか。

目標を無理からランクを落として、手頃なところで妥協する。まあ本人のことでなくてもいいかとトキアキは考える。彼女の本心に切り込むための武器は、果たして誰をやっつければ手に入るのか。まあケートとカシエはないだろう。その親であるエルンストとコレツトもだ。可能性があるとしたら、彼らとセルニアを除いた七体のCBの誰か。

今のところ知り合いと言えるのはキルケだけだが、他の誰かに声を掛けると言う手もある。もっともその場合、信用を勝ち取るための努力がひたすら必要になるのだが。

面倒くさい。トキアキは欠伸を奥歯でかみ殺しながら、果たして自分はなんでセルニアのことを調べようとしているのかと疑問に思った。しかしそれは先ほど行き止まりを感じてすぐ引き返した思考の道だ。二度も同じ道に突っ込んで同じように立ち止まるのは流石に間抜けが過ぎるだろう。

それとも、面倒くさいし、本人に突っかかってみる事にするか。寝起きだからか、それとも別の要因でか、トキアキの思考はいつもより剣呑に研がれ。乱暴に輝く。鋭さと言うよりは粗雑さとも言ふべき荒々しい凶器の感触が舌の上でざらついている。しかしそんな鉄錆じみた感覚の内側には、何か別の気配もした。

……何故自分は、セルニアを気にかけているのか。

「……………」返答は無し。

自らの心のがらくたさ加減にくつと口の端をつり上げる。やはり寝ぼけているなあと、トキアキは力を込めて目を瞬かせた後、頭痛を振り払うように歩き出した。

で、十メートルと行かずに当の本人とエンカウントしたので速攻で切り込んでみることにした。

「セルニア、どうしたんだ？」

「え？ はい？」

言われた方は目を白黒させている。それもそうかと、自分のうかつさにトキアキは舌打ちしかけて自制する。まずい、どう考えても不機嫌のただ中だ。

「すまん。寝起きで多少狂ってる」

「あー。昨日もちよつと寝起きは変な感じでしたよね、トキアキさん」

くすくすと笑われるが、何があつたかさっぱり思い出せない事に恐怖して口がにわかにはフリーズする。ややあつて解凍すると、熱を取り戻すと言わんばかりに舌にヘイストの魔法がかかった。

「端的に聞きたいんだが」

「はい」

「あー」

……………端的に、何を聞けばいいんだ？ ぐつと眉根を寄せて上を向く。きつと、バカみたいな顔をしているんだろつなあとか、自分の事を客観的に想像する振りをして軽く現実逃避する。

「あはは。何か悩んでることはわかりました」

「あー。いや、なんとというか。自分の事ではさほど悩んではないんだが」

「でもエクではいつも暗い顔をしてるそうですけど」

「否定はしない」が、誰に聞いた。「ただ、自覚はあるんだが。：

……………なんだろうなあ。いつもの事というか。いつの間にかこうなっていたから、違和感を感じない」

「へー。今もちよつと暗いですよね」

「どつしてそう思つ？」

「んー。首を傾げる角度とか、瞼の閉じ方とか、視線の方向とか」
いやに明確に要所要所を指摘された。トキアキは眉根を寄せた後、
そうか、と頷いた。

「わかった。もうちょっと表情を意識する事にする」
「無理に気をつけなくても……」

とりあえず面を上げてみた。しかしそうすると、どういつ表情を
浮かべればいいのか。

「なんだか、トキアキさんの方がCBっぽいですよ」そう言っ
てセルニアは悪戯っぽく笑みを浮かべる。

「よく言われる」

「本当に人間ですか？ 生体クローニングされたCBだったりしま
せん？」

「そうだったとして、人間と何か違うのか？」トキアキは聞いた。

「え？ えーと」

セルニアは不意を突かれたように目を丸くして、一秒ほど硬直し
た。

「そういえば、あんまり違いつてないかもしれませんね」

「ただ、その線は昔夕マに否定はされている」

ルクルスというドールにそういういやもんをつけられたことが
あるのだ。そうかもしれないと流したら殴りかかられたが、今で
は良い思い出……にするには、流石にまだ時間が足りないようだ。

とりあえずその後、言葉の刃でぼろぼろに精神を抉ってやった事を
思い出す。無自覚だったせいで歯止めがきかなかったのだ。反省。

そういう意味では、セルニアに関わるのも気をつけないといけな
いな……。トキアキが黙っていると、「ほらまた」と俯いているこ
とを指摘された。

「あー。すまん」

「いえいえ。でも、そういう顔をするなら、そうなる理由があるん
だと思いますよ？」

「だろーな」さして深く考えず頷いてみせる。それからふと、疑問

を思いついた。「セルニアが笑ってる理由は何だ？」

「え？」

「よく笑ってるだろ」

本心から楽しんでるのか、心の壁としての意味があるのかはわからないけれど。

「あー。私もいつの間にかこうなっていましたねえ、そういえば。なんででしょう」

「まあ、暗い顔をしてるよりはいい」

「んー」そうかなあ、と首を傾げるセルニア。

「そのほうが、周りの気分もいい事が多い。暗い雰囲気まいて周りを心配させるよりマシだろ」

………なんで、フオローするだけで自分の心の自傷行為に走らなくてはならないのか。ともあれ、益々自分の表情に気を遣わなくてはとトキアキはじんわりと思ひ知る。

「なるほどー」セルニアはにこにこ笑っている。「いいですね、それ」

「セルニアがそれを考えていなかったとは思えないんだが」

「あはは」

「笑って誤魔化する」

「あー……………」笑い声が途中で消えた。「誤魔化してますか」

「違ったら悪い」

「いえ」セルニアは首を振った。「そうですね、誤魔化してるって言われたら、否定できない、かなあ……………」

かなあ、といいながら、その視線は今確実にトキアキから一步以上の距離を置いていた。アプローチの仕方を間違えたのは言わずもがなで、朝っぱらから難易度の高い挽回プレイングを求められたこの頭脳は期待に応えられるのだろうか。

無理かなあ。全開でも無理そうだ。

「ごめんなさい」アイデア、無し。速攻で謝ってみた。

「えええ。何ですか突然」

「悪いことを言った」

「いやいや。そんなこと無いですよ」

「今、暇か？」

「え？ はい」

「少し散歩に……あー。付き合ってくれませんか？」

「いきなり丁寧語ですね。あはは。いいですよ」

セルニアと並んで歩き出す。トキアキは、その口の回りの遅さが足にまで移ったか、一歩一歩がやたらと不器用になりさがっていた。………ただの寝不足だと言いつ聞かせる。

とりあえず誰かがいる方から離れる方向に移動したのは別に他意があつたわけではなく、この村なのか町なのかわからない廃墟の一角以外は誰もいなかっただけである。歩けば確実に二人きりになれてしまうが、そういえば、CBには異性間で二人きりという発想はあるのだろうか。少し考え込む。そして口は、別の考えを紡いでいる。

「正直な話、いつ頃までここに居ようかと少し悩んでる」

「別にいつでも大丈夫ですよ？」

きょとんとしたセルニアの態度は、果たして滞在を許容するものか退出を許容したものか。悪意ではないだろうと希望的に仮定して、どちらにしても決定の指針になりそうもないと結論した。

「セルニアはもう三〇〇年くらいここに居るんだよな」

確認するも、返事は無し。どうも、年齢に関わる指摘はタブーらしい。タマなんかは自慢げに年齢を口にするのだが、そっちはもう忘れてしまった。

「そっちは普段は、何をやって暮らしてるんだ？」

「え？ あー」セルニアは小首を傾げた。「そうですね。特に決まってるない、かな。エルンストとコレットはあちこち散歩に出たり、時々ここを見つけたCBと話し込んだりしてるけど、それ以外の時

間はケートとカシエの相手をしていれば楽しそうな感じだし」

「ケートとカシエは？」

「いつも何か遊ぶ事を考えてる。ちょっと退屈みたい。あ」ぱちんと両手を胸の前で叩く。「あの四人なら、エクの方が楽しいかも。今度話してみようっと」

「本当にやるなら、タマに話を通すといいと思う。エクは基本文句は言わないし、言ってもタマが説得する」

「竜が文句を言うの？」きよとんと、セルニアは首を傾げる。「どうして？」

「俺やディックがいるからだろ。危険因子は大体拒絶されがちだ。アルテミスとかが来た時は一悶着があつたな」

竜は艦内のCBの意識の総体。エクでもその事実は変わらない。エクのCBはほとんどが独立しているが、人格クローンのバックアップは行っているし、それを元に自らの人格を構築している。もっとも、相互に同期をおこなうのがCBの本来の姿なので、そういう意味では片手落ちだ。同期しなければ、いざというとき各CBを運用して艦内環境・機能の維持につとめる事が出来ない。艦内にいるCBそれぞれの意志に任せなくてはならないからだ。

その点、エクの艦内セキュリティ能力、環境保持能力は低い。アーベンロートの母艦トリグラフや、ルクルスの母艦セイレンは比較的CBの独立を認めているが、それでも、ここまで極端な配置はしない。竜というのは複雑なシステムで、性能を維持し、不具合を検証し、緊急時に備えるためにはそんな余裕は無いのである。

故に。アルテミスのような不確定因子については、大抵のCBは懐疑的になる。ただでさえ環境維持能力に疑問のあるエクに、本来であれば規制対象であり、技術的には存在し得てもルール面から存在し得ないアルテミスのようなCBを受け入れるのは危険が大き過ぎる。キルケのように、初見であるにもかかわらず受け入れるCBの方が例外で、普通はセルニアのように、良くても距離を置くくらい態度は取る。受け入れるとなれば、反発もある。

だが、エクの中では総意を取るのには難しい。CB個々に、その時々々に態度を変えるからだ。だから皆の意識の総体であるエクに許可をもらう事になる。

「へー。そっかあ……………」セルニアはどこかおもしろがるように頷いた。顎に人差し指を当て、少しだけ笑う。

「変わってる事らしいな」アーベンロートやルクルスにもそう指摘された事はある。

「普通は、竜の中で暮らしているなら、誰に聞いても同じ答えを返してくれますしね。竜と直接話すなんて珍しいなあって」

「まあ、あんまり姿は見せないな、確かに」トキアキは頷いた。「それでもダメージコントロールルームに行けば大抵姿を見せてくれるぞ。ホログラムだけだ」

「へー！ 変わってるっ」

「変わってるのか……………」

変わっているとさえ言えば、確かにあの人格はなかなか風変わりである。全てを見透かしているようでもあり、何も知らないようでもあり。かなりあやふやな感じのする存在なのだ。ディックあたりに言わせれば「神様みたいなもんだ」らしい。いまいちよくわからないが、よくわからないものなんだろうという認識は伝わってきた。

「セルニアは竜には会った事は？」

「無いですねー。今までずっとここで暮らしてきましたから、竜に乗ったことは一度も無いんです」

「誘われたりはしなかったのか？」

「え？ あはは……………えーっと。結構誘われて、出て行ったCBも多いですね」

「へえ」

「エルンストとコレットの親は、トリグラフに乗っていきましたし。あの二人も子供が大きくなったら旅に出ようって言ってますよ」

「旅かあ……………旅って、どこに？」

「うーん。正直、私にはわからないかな」セルニアは苦笑する。「

どこに行っても、変わらないと思う」

達観に絶望を織り交ぜた、明るさに化粧された言葉を紡ぐ。しかしその感想は、

「まるで、外に出た事があるみたいない言分だな」

「……………あはは」

「あー。けどまあ」話題を少しだけ元に戻す。思い出したことがあったのだ。「ディックも、よく海の中を散歩してるな。ケケットと一緒に」

「あ、そういえばそうなんですよね。それにここを見つけたのはトキアキさんでしたよね」

「だ、な。運が良かった……………のか？」

「えー。なんですかそれは」

「んー」トキアキは小首を傾げる。「いや、特に根拠は無い。ただまあ、隠れていたなら見つけたのは悪かったかも知れない、と思った。別に隠れてるかどうかはわからないんだけど」

「あはは。隠れていたわけじゃないですよ」

「ほっとした」

「ふふふ」セルニアはにやにやと笑う。「心配性」

「……………」

なら、勇気を出して踏み込んでみようか、と心の中で誰にも聞かえぬ脅しをかけて、実行の可否を脊髄に任せた。

「それで、セルニアは何をやってるんだ？」

「え？」

「さつきから、他人のことばかりだろ」

脊髄は踏み込むことを選択したらしい。氷結する空気の中で、足音だけがざくざくと遠慮無く廃墟の瓦礫を削っていく。

「セルニアは最初からそうだったけど、自分の話に踏み込まれると笑って誤魔化すし、話題を挙げればまず他の誰かのことを言う。答えたのは瓦礫を避けてたって言う最初だけ。それは、それだけ周りを見てるってことなんだろうけど」

そしてだからこそ、こうやって笑い、いつも表情と態度を明るく作っているのだろうけれど。

「自分の事はどうなんだ？」

そう聞いて、平然と返せるほど、あなたは本物なのかと問いかける。

「……………」

回答は、今までよりも手応えがあった。

笑顔から笑みを消失させて、独立できない気持ちが混じり合っただろどろのシチューになったみたいな、能面とはほど遠い無表情が完成する。

「っ」

これが、怖かった。

トキアキは知らぬ間に唾を飲み、息を止めていた。胸のあたりでびくびくと跳ねる心臓を意識し始める。目が、ひりひりとかゆみを発する。血管がぷつぷつと切れていき目尻から別物が吹き出るイメージ。

彼女が次に紡ぐのはどんな言葉か。肯定や許容ではあり得ないと知りながら、しかし引き返せる場所は脊髄に任せた時点で消えていた。意識しての踏み込みでないだけに覚悟が一回り遅くなり、それ故に萎縮が恐怖となって神経をびきびきとくりぬいていく。

……………一秒。二秒。数えるのが億劫になって心音にカウントをゆだねてしまう。

そして。ようやく、と言えるほどの時間が経って。

「私がしている事は、あんまり面白くないですよ」

彼女は笑顔を取り戻して、そう言った。

どうやら沈黙は、別の上澄みを作り出すための緊急避難に使われたようだ。それでもと、進展しないよりはマシだと断じて踏み込んでみる。

「私がやっているのは、瓦礫をどける事ばかりですね。ほとんど毎日それしかしてません」

「なんで瓦礫をどけてるんだ？」

「荒れてるからですな」セルニアは苦笑する。もうその表情は、いつもの通りだ。「私、元々はこの都市の市長の秘書だったんですよ。結構有能って言われてたんですけどね。結局、うまくいかなくて」

「セルニアのせいなのか？」

「えっと……」

セルニアは再び沈黙する。何かを言いよどむように口を閉ざして、それから、小さく首を振る。

「きつと、私のせいじゃないんです。でも、私は何もできなかったんです」

「何も？」

「うん」

「それで、戦争になった？」

「うん」セルニアは頷く。それから面を上げて、苦笑した。「だから、私のせいじゃないけど私のせい……かな。だから、どうしても、こうやって瓦礫だらけの場所を見ているのは辛くて」

辛くて、と言葉を切って、辺りを見回す。それにつられてトキアキも首をねじって、視界を広げた。

二人が歩いているのは瓦礫の丘だ。始めて会った場所にほど近いところにある。右手にはしばらく先に行ったところに森があり、水飛沫を浴びて濃い色に塗れている。その向こうでは、轟音と水飛沫を盛大に吹き上げる太い滝の姿。人間なんか飛び込めば、あっという間にぎちゃぐちゃに潰されてしまっただろう。

翻って、ぐるりと景色を意識に納める。

それ以外の場所は、ランダムに起伏を描いた灰色の丘だ。砕けたコンクリート、下敷きになった民家。粉々に砕けた破片の下から突き出た砲塔。そう、よく見れば、瓦礫の下には兵器のそれとわかるモノもいくつもある。きつと掘り起こせば、装甲車や戦車、武装した戦闘用の大竜といったものまで見つける事ができるだろう。

戦争で、滅びた街。そう。この街は戦争で滅びたのだ。

その街の長となった人間を助けていたドールが、何故生き残ったのか。

「どういう理由で争う事になったんだ？」

「うーん」セルニアは困ったように視線を逸らす。「あんまり言いたくない、かなあ」

「そうか」

「ごめんね」

「いや」

謝られても、話が聞けるわけでもないの。

トキアキは歩みを止めて、セルニアの顔をじっと見る。優しく垂れた瞳、すつきりとした形の鼻に、完璧な微笑。違和感はどこにもない。ただ、よく見ればその肌色は少し煤けていて、長く埃をかぶっている事が伺える。

触れたら、その埃を少しだけぬぐえるかもしれないし、

そのまま、乾いた皮膚材が剥がれ落ちるかもしれない。

「ごめんなさい、ちょっと」

セルニアは少し頭を下げて歩き出す。トキアキは呼び止めず、その背中を見送ろうかと考えて、すれ違ったまま振り向かず足音の遠のく音だけを耳に留めた。

しまった、と思ったのは、足音が聞こえなくなった後。

一瞬後でこみあげてきたものが、胃と、心臓と、頭を溶かすように熱を生む。

「くそっ」

なんで声をかけなかったのかと自らをなじる。

けれど、なんと声をかけたらいいのかもわからなかったのも事実。どうしたいのか、どうすれば良かったのか、手放した覚えはないのに、ここにはもう手を伸ばすべき相手がいなかった。

灰色の亀が張り付いたような海底都市の側面から、一頭の竜が離れていく。それは尻尾をピンと伸ばし、翼を広げ、ややのけぞるようにして首を持ち上げ顎を突き出した姿勢で泳ぐ。翼を大きく打ち振るい、海を力強くかき分け、押しつける。反動で丸まった背を伸ばして、海底都市から遠ざかるようにゆるやかな疾走を開始した。

その竜の腹部に当たるコクピットの中で、ディックはゆったりとシートに腰掛けている。両腕は肘掛け部分にある筒状のコントロールラへと差し込まれたままで、体はシートベルトに押さえつけられてぴたりとシートに貼り付けられている。画像補正のされていない暗いコクピットで目を閉じて、そうすれば海に溶け込めると言わんばかりに瞼の内側を凝視している。

実際、ディックの頭の中には周囲の景色が色鮮やかに描かれていた。海底のざらついた斜面、左右に広く続く空間、そしてずっと先の正面にそびえる半球状の山。今ディックが目指しているのはその山だ。おそらくは海底火山。昨日の地震の正体はそれだろう。

エクの中のCBで、この手の調査に一番向いているのがケケットである。元々探査・調査用の大竜である。ルクルスなどの海賊や、以前アルテミスがいたような人に敵意を持つCBとの戦いに備えて多少戦闘力を補強されているが、一番活躍ができるのはこういう探査作業だった。

つい先ほども、一つ調査を済ませてきて、ケケットの調子は良好だと太鼓判を押して生きたところである。実のところ、ディックにしてみれば細かい調査の是非はいまいちよくわからない。そういうのにはトキアキの方が詳しい。ディックが得意なのは操船だけである。なのでこういうことに関しては、トキアキがいなければケケットに判断をゆだねるしか無く、本人が「完璧」と言い切っているのであ、そういうことなんだろうと納得しておいた。

「にしても、今日は機嫌がいいな」

ディックが口を開く。すると、コクピットの中で反響を極力抑えた声で、ケケットが応じた。

「そうかな？」

「ああ。いつもより動きに切れがある」

言いながらディックは、少し笑う。コントローラに手をいれてはいるものの、現在はオートパイロット、ケケット任せの操船だった。ディックとケケットの潜水時間は五百時間を越えている。何故かは知らないが、危機をくぐり抜ける機会も無数にあった。ディック自身が比類無いドラグーンライダーへ成長するのにそれは充分な時間であり、そしてそれ故に、ディックと長く海を泳いできたケケットもその操縦の癖を完璧に飲み込んでいた。今では、並大抵の戦闘用大竜ですら、ケケットに敵いはしないだろう。

それでも、ケケットは多少むらつきが強い。ディックの影響かも知れないが、日によって操船に「味」が出る。今日のケケットは切れが良く、微細な水流の変化を察知しては適格に船体をあわせていき、まるで音楽に合わせて躍るように闇の中を滑っていた。

「ディックにほめられるなんて珍しいね」ケケットは弾む様子で言った。「でも、トキアキの事は放っておいて良かったの？」

「ま、本当にやばいことになったらアルテミスがどうにかするだろう」信用してるんだね」

「なんだ、お前は信用してないのか？」

「うーん。実は微妙」

「へえ。なんでだよ」

「元は敵だよ？ しかも大竜に入ってきたってだけで襲いかかってきたじゃない」

「何事にも理由があるもんだ」ディックは笑った。「アルテミスにだって、あつただろ？」

「そうだけど……」

「あいつは真面目すぎる分、信用できるよ。信頼はちっと難しいけ

どな」

「え、なんで？」

「お前と同じさ。人が良すぎる」

「えーっ。何それ」

ディックは付け笑いなから、それには答えない。言っても、ケケットやアルテミスには実感のわからないモノだろう。だからこそトキアキとのやりとりに戸惑うのだ。

トキアキは本質的に性格が悪い。さらに性格がねじれている。それが裏目に出て自分のやりたいこともろくに分かっていない節がある。

なんでもかんでも怖がっているぶん距離を置きがちで、そのおかげで客観性はあるが、能動的なアクションは弱い。そして、その事を誤魔化そうとして変に理屈を立てようとしてねじれるのだ。

もつと単純に好き勝手にやってもいい、と常々思っているのだが、まあ、なかなか簡単にはいかないモノである。しかし難儀な性格をしているせいで、結構わかりにくい奴になっていて、ケケットやアルテミスみたいな純粹さでは理解しがたいモノがある。彼らに見えるのは、トキアキが何かを怖がっているというそれだけだろう。

アルテミスだけは、それにもかかわらずトキアキとは結構うまくいっているが……お互い、使っている言葉が近いから話しやすいのだろう。あれは運が良かった。普通なら、タマとかアーベンロート、キルケくらいひねくれてないと相手できないだろう。まあ、あのレベルになると相手を出来ても不愉快にだからたたきめそうとするだろうが。タマなんかがまさにその口だ。

しかしまあ、そんな事を考えている俺は何なんだろうねと、ディックは思う。なかなか半端な立場だ。

「ま、お前はいい奴だっけ事だよ」

「誤魔化してるでしょう」

「本音だ」

「……………」

ケケツトが生物なら、唸り声を上げるところか。二秒ほどすると、ありがとう、とぼそりとつぶやいた。ディックは気にすんなど言う。「ま、トキアキとうまくやりたいなら、あいつの話聞いてやることだ。あいつはあれでかなりしゃべりたがり屋だからな」

「トキアキって何を目的として話してるのかよくわからないんだもん」

「目的なんか無いんだよ。あいつにとっては話す事が目的なんだから」

「不毛だね」

「人の生に不毛じゃないところがどこにあるってんだ」ディックは笑った。「そんなもんだよ。あいつは誰かの話を聞き、誰かと話すために生まれてきた。いいじゃねえか、楽しそうだよ」

「そこまで決めつけなくてもいいと思うけど」ケケツトは消極的で否定と肯定の狭間を彷徨っている。「それを言うなら、ディックはどうなの？ なんの為に生きてるの？」

いい切り返した、と内心でケケツトをほめる。だが、トキアキにそれをやったらフリーズされるだろうと忠告すべきか、少し悩んで自分の事を答えることにした。

「俺はな、この闇の先を見るために生きてるんだよ」

「海から出るの？」

「ははは。シンプルだな。そんなところかもな」

「無理だと思うよ」ケケツトはさっぱりとした態度で否定する。「別に、僕とかエクだけならついて行くかもしれないけど。今更海から出たいなんてCBはほとんどいないよ。元々捨てられていったんだからさ」

その声には、深い谷底のような大きな断裂を思わせた。

箱舟作戦で、不良品・欠陥品と見なされて使用されずに残されたCB。この海に漂う遺されたモノ達。レットルを貼り付けることと引き替えに、彼らを生み出した人間は彼らと取るべき手を放した。そしてもう、つなげる距離に彼らはいない。

捨てられた側は何を思うか。悲しむか、憤るか。様々な思いがこの海には渦巻いている。

けれど、あらゆる感情の下敷きとなっているのは捨てられたというその過去だ。そしてもう手が届かないという絶望を現実に押しつけて、海の中に閉じこもっている。

馬鹿馬鹿しい、とディックは思う。本当に無理なら、どうして自分は今ここにいるというのか。

奇跡的な確率をどうして信じられないのか。

ま、信じるのは怖いよなど、トキアキの事を思いだして、ディックは優しく微笑んだ。そして未だ、自らの思いを打ち明ける時ではないと考えて、ケケットの額をそっと撫でるように肯定の言葉を口にする。

「無理かもな」

「……………」

「それでもいいんだ。あのな、ケケット」

「何？」

「俺は無理とか無茶とか言われると、それをどうにかして実現したくなるひねくれ者なんだよ」

「トキアキみたいだね」

「だ、な」

「人間ってバカだね」

「そうだな」

「……………でも、ディックやトキアキの、そういう所は好きだよ」

「はは。ありがとよ。俺もお前の事は好きだよ、ケケット」

「……………えへへ」

ふわりと、海流を捉えて微かにケケットが上昇する。ほんの少しだけの押しつけられるような感覚から、ディックはそれを察知した。常人なら察知する事すら難しいだろう微細な変化が、ディックの脳裏に新しく海の景色を描き直す。

しばらくすると、目的地にたどり着いた。

海底都市サラミスから数キロ離れた海底は、火山列が獣の牙のように無数に突き出ていて、肉食獣の顎を連想させる。

だが、それはディックが常人では不可能な感覚で水の乱流を捉えたから察知できた景色である。もしもトキアキがケケットに頼んでこの景色を画像補正して表示させようとしたら、そんな景色を捉える事は不可能であっただろう。

なぜなら、いくつも突き出た火山の煙突からは、今なお金属硫化物の毒々しい黒煙が吹きだしていたからだ。

無数の海底火山の連なりからブラックスモーカーが吹きだして、距離数キロ、高さ数十メートルものカーテンを作り出している。さながら、大規模工場が戦時でフル回転させられているような有様で、もしもあの火山の下で、化け物達が世界を蹂躪するため武器を作っているのだと言われたら、信じてしまいそうだった。

「ケケット。マニュアル、いいか？」

「うん。任せた。僕じゃあ進むのに凄く時間がかかると思う。解析だけしてるね」

「OK」

操船をマニュアルに切り替える。マニュアルではなく感覚同調。

手首と腕、シートにぴたりと貼り付けた全身でケケットの動きを制御する。コントロールのボタンは無限大に発散するため、理屈ではなく、感覚でしか扱えない。

ディックは一つ息を吸うと、意識の上で、竜となった。

目を開く、そんな気持ちで、辺りの景色をつかみ取る。

二百度を超えるブラックスモーカーでも、竜の装甲はびくりともしない。それでも、あえて煙の中を行く事もあるまいとケケットの船体は煙の下をくぐっていく。

火山の下の方では、幾つかの突き出た突起がある。熱水孔から吹きだしていたモノが、深海の水に触れて凝結したモノだろう。でこ

ぼこした表面からはある程度距離を取って、隙間を縫うように海底近くを進んで行く。

「ケケツト、地下の様子とわかるか？」

「一応、推測はできるけど。本当に知りたかったら」

「飛び込むか」

「やめてよね。絶対ひっかかるから」

「ダイエツトしないとなあ」

「えー。いやそうじゃなくて、エクから探索機をもらってくるか、アルテミスの分離体を投げ込むとかすればいいと思うよ」

「……………ま、そこまでする必要ないだろ。どう考えても活火山だしな、これ」

ケケツトの体を斜めにして、一つの大きな煙突の周りをぐるりと旋回する。三メートル上に進めば、金属硫化物の黒煙が高温のカーテンを生み出していた。それを見上げて、ディックは再び口を開く。「これだけ口あけてりゃあ、そんなに爆発しそうにないけどなあ」

「地震の事？」

「ああ」

「そうだね。でも最近が多いって言う話だし。もしかしたら、ここしばらく溜まっていたモノをはき出している状態なのかもね、少しずつ」

「だな……………っ、！」

突然、ディックは腕に力を込めた。

動きが高速で反映される。翼を打ち振るうケケツト。否、それだけでは間に合わないとはかりに尻尾を海底火山の壁面に叩きつけた。轟音を立てて火山の半ばがべきべきと響きを立ててへし折れる。苦鳴を挙げるが如く吹き上がる黒煙が乱流を生みだし、それがケケツトの姿を隠した。

「何、ディック！」

「距離を取る」

慌てるケケツトの声に反して、ディックのそれは深海の底の一番

冷たい水を掬い上げたように透徹していた。目を瞑ったまま、荒れ狂う海流に体をあわせて翼を打ち振るい、加速する。足の裏から高圧力で吹き出した水流が船体を押し上げて、船体速度を無理矢理に上げていく。

ケケツトは上昇し、広い場所に出るよりもより狭い場所を目指して深度を下げる。複雑に隆起した海底火山の隙間を縫ってスピードを上げるのはいかな竜でも自殺行為に等しい。正面からぶつかればただではすむまい。

だがしかし。逃げるモノが尋常でない腕を持つのなら、追いつがるモノは、それを上回る苛烈さを有していた。

目を瞑り、周囲をの全てを感覚で脳裏に投影するディックには追いつがるモノの姿がはつきりと見えている。それは竜だ。しかも、ケケツトよりも遙かに性能が高い。エンジン出力にモノを言わせた突撃は、最早海底火山の固さなど考えていないのだろう。真正面から突起をぶち破り、崩れ落ちる岩や金属の塊を尻尾で弾き飛ばして追いつがる。その姿は獯猛というに相応しく、手負いの獣ですら圧倒したであろう。

極限の技術と凶悪な意志が一キロの疾走を経て漸近する。

だが、逃走の始まりが突然であるのなら、その終わりもまた突然であるべきとでもいうのか。

海底火山を抜けたところで、ケケツトは速度を落とした。そして背後から迫るそれも、ケケツトの上を確保したまま併走にうつる。

「なんだ」ケケツトの、呆れたような声。自らの上に立った赤色の大竜に、非難するようなを送る。「何？ ハルシオン。突然こんな事をして」

「突然こんな事を始めたのはルクルスよ」

返ってきたのは、不満に羞恥の隠し味をブレンドしたオブラートでトゲを包んだ声だった。ハルシオンと呼ばれた竜の声であることは、ディックは既に知っている。何せ、過去に何度か手合わせした仲である。

「ま、気にすんな」ディックは言った。「ルクルスは海賊だしな。怪しいやつを見つけたらとりあえず潰すか殺すかして、運良く生きていたら捕まえるっていうのは自然な在り方だろうさ」

「あなたがそう言うならそれでもいいけれど……ごめんなさいね。ありがとう」ハルシオンの申し訳なさそうな声。

「ディックはルクルスに甘すぎると思う」

敵に感謝されて味方に非難されるという、変な構図になってしまった。ま、そう拗ねるなど、コントローラの内側を少しだけ撫でる。

「それじゃあルクルスにつなぐわね。用があるみたい」

「はいよ」

「お前こんなところで何してる」

「うっわ、ずいぶんなご挨拶だな」

一秒の間隙すら許さずに、先ほどの奇襲を思わせる唐突さでルクルスは用件を切り出してきた。正面のウィンドウからホログラムが浮かびだし、一人の男の姿を出す。

ルクルス。大竜セイレンに属するドールだ。この海に散らばっている危険物の回収や、対立の仲裁として各地を巡っているある種の警官的な立場である。が、本人はそれを正義と言つつもりはまったく無いらしく、自分たちの行いは海賊行為だと言っている。

まあ実際、今の奇襲もそうだが、なかなか凶悪な判断をする。立場上恨みを買うことも多く、長く危険と付き合っている分、その方面に研ぎ澄まされている。一般人からすれば歩く火砕流と見られてもおかしくない。先ほどディックが言った表現は、認識として正しいのである。

「ふざけてると襲うぞ」

「あー。同性でそれはねえわ」ディックはため息をつく。しかしこいつが美少女だったりすれば在りなのだろうか。……いや、ないなあ。トキアキの真似をして適当な事を言ってみただけけど、その程度では何が変わったのかよくわからない。現実に会話を回帰させよう。「最近エクがサラミスにいるのは知ってるか？」

「ああ。それで？」

「地震が頻発してるって言うんでな。調査のまねごとだ」

「あそこはそんなに保たないぞ」

「ああ。そうだな」

ディックは簡単に頷いた。その情報はすでに既知のものである。

「海底都市には所々補修の手が入ってたらしいけど。おまえらか？」

「ああ。百年前に来たときにちょっといじっておいたが、もう保たないだろう。エクがいるなら丁度いい。うまくだまくらかして受け入れてやれ」

「そううまくいくと思うか？」

「おまえらで駄目なら誰にも出来ないだろ、人間」

ルクルスは舌打ちする。交渉、説得。コミュニケーションを必要とする地道な作業には向いていないとルクルスは自らを評価している。自覚があるのは素晴らしいが、自覚しても自分を変えられないあたり所詮そんなもんなんだなあと残念な気持ちで評価せざるを得ない。CBも万能にはほど遠い。

……それもそうか。そもそも元となっている人間の人格自体、万能とはほど遠い代物なのだ。不完全を許容するが故の性能に、万能というボトルネックを付け加えるはずも無し。

「まあ、やるだけはやってみるよ」トキアキが、と内心で付け加えてディックは言う。「お前だったら無理矢理ふん縛って連れ去るくらいのことしかできねえもんな」

「そうだな」ルクルスはあっさりと言った。「元々乱暴な奴らを相手にする以外の事には向いてねえんだ」

「最近そっちはどうよ」

「どうってことは無い。いつも通りだ。ああ……それより、噂に聞くアルテミスはどうなんだ？」

「いい感じにほやほやしてるな」

「ほやほや？」ルクルスが顔をしかめる。

「まるで子供だよ。トキアキにかなり懐いてる」

「……………」
ルクルスの表情が、鉛の混じったような苦みを帯びる。トキアキ嫌いなのは相変わらずらしい。まあしかし、彼がいなければディックとルクルスがこうして話すようになる事も無かつただろう事を考えると、人間関係とは不思議なねじれ方をしているらしい。

そう。元々ディックとルクルスは戦うだけの関係だったのだが、そこに楔を打ち込んだのがトキアキだ。あれはあれで、時々根性を見せつける。

「トキアキはどうしてる」

「今はセルニアに首つたけだな」

「また難しい所を」ルクルスは呆れたように肩を落とした。「あいつはサラミスに残るぞ。間違はなく。全員どこかしら執着があるが……あいつが一番執着してるんだ」

「つまり、セルニアを突破できるんなら、他もどうにかなるだろ」まあ実際は、それぞれが抱えている問題が別々だった場合、そう簡単な話でもないのだが。そうであるなら、誰から突破しても話は変わらない。一人ずつ撃破していくしかないのである。

ルクルスはその言葉に何を思ったのか、呆れた表情を諦めで塗りつぶして、やれやれと首を振って見せた。彼にしては力ない態度に、ディックの眉が持ち上がる。

「どうした」

「楽観的だなあと思ったんだよ」

「そうか？」

「あいつらがどれだけの時間あそこに縛り付けられてると思うんだ」ルクルスは顔をしかめる。「それが、どうにかなる、だと？」

「どうにでもなる問題だろ、こんなの。俺たち以外の人間を捜して見つけ出すよりは勝算は高い」

実際の所、ディックはこのことを問題だとすら考えていなかった。極端な事を言えば、サラミスのモノを全員見捨てても、エクのモノは被害を受けないのだ。かなりいろいろなモノを切り捨てた考え

方ではあるが、ケケットにしるアルテミスにしるタマにしるカスレプスにしるキルシュトルテにしる、エクの住民であって、サラミスの住民ではない。彼らが普通のCBのように、意識を共有させるなら話は別だが、人間のように人格を切り分けている以上究極の所対岸の火事、他人事に過ぎない。

自分が傷つかなければ痛みはわからず、他人の痛みはどこまでいっても他人事だ。

自分と他人が異なっている、人間にとっての基本である。

もっとも、それを後ろめたいと思うようなら、最早それは他人事でもなく対岸の火事でもない、自分が抱えた問題だ。それは自らの我が俣に従って解決すべき事柄であり、果たして、今回は誰がどれだけ動くことになるのだろうか。

ディックとしては、真実どちらでもよかったからこそ、どうするかはもう決めている。

サラミスを見つけたのはトキアキだ。彼の気持ちが晴れる過程を行く選択肢が、最も優先順位が高い。ディックはそのために、トキアキがやりたがるであろうあれこれを予想して、そのための事前準備をしておくだけである。この調査も、その一環だ。

まあ、無駄に終わるかも知れないけどな、と心の中でつぶやきつつ。

「ルクルス。一つ教えておく」

「あん？」

「誰かに手を貸したいなら素直に言うことだ。追いかけてる相手が誰か分かっているくせに襲いかかるなんて、遠回りな事をするんじゃないくてな。ケケット、情報提供受けたか？」

「え？ うん。この海底火山列の観測データをもらったよ」

「ありがとな、ハルシオン」

「あなたには驚かされてばかりよ」ハルシオンは呆れた声。

「じゃな。俺あ戻るよ」

ルクルスがなにやらわめいているが、ケケットに回線を切断させ

る。まああいつはあいつで素直な奴なんだが、持てる力が大きいだけに使い方には気をつけた方がいいとは思う。普通の竜では組み敷かれていただろう。

ケケツトは滑るようにして進み出す。翼を一度だけ揺らして上昇し、後は尻尾でバランスを取って海底火山列の横を抜けていく。

「ケケツト？」

「うん、何？」

「解析頼まあ」

「アイアイサー。といつても、もうほとんど終わってるけどね。これからもしばらく、断続的に地震が続きそうだよ」

「そうかあ。海底都市はどうなりそうだ？」

「うーん。微妙。昨日くらいはやつなら当分保つだろうけど、もっと大きいのが来たらどうなるかわからない」

それはサラミスが崩れると言っているのと同義だと言つことに、本人は気づいているのかいないのか。ディックは首をこきこき言わせて、カスレプスに手伝いを要求しようと考える。応急措置くらいは必要だろう。

その旨を告げると、ケケツトはわずかに言いよどんだ後、こつ聞いてきた。

「それって、余計なお世話じゃない？」

「お世話なんて余計な物だろ、どんな事だつて」ディックは笑った。「これは俺が俺の勝手に、あいつのためになると思つてやってることだよ。本質的には自分勝手だ。善意から生まれてはいるけれど、善であるとする思つちやいないな」

「ふうん……じゃあそれが、迷惑になつたら？」

「謝るさ」

「謝れなかつたら？」

「もうどうしようもないんだから、考える事でもないだろ、そんなの」

謝ることすら出来ない関係というのは、二度と会えない関係、つ

まりは死別だ。死んだ相手のことなんか、必要性が無い限り考慮してもなあ、である。生者というのはただ生きているだけで死者よりも優先順位が高いのだ。死ねば聖人でも悪人でも配慮の対象には値しない。

「そっか……」

「ま、余計なお世話になるかもしれないってのは考えてるよ」デイツクは言う。「だから、お前のためだ、とかとんちんかな事を言っただけで押しつけないようにしてる。本人が必要ないと言えばやらないしな」

「デイツクは、自分のためにそれをやるんだね」

「そうだ。俺は俺の自分勝手にこれをやってるんだ。ま、自分勝手に押し通すには工夫がいるがな」

自分勝手に始めた以上、自分が正しいわけでも、優しいわけでも、善なわけでもないのである。我が侂人間のルールは二つ。他人を言い訳にしない。そして、自分のやりたいことをはっきりと定めておくこと。

自分の目的を定めずに何かをすれば、他人を言い訳にした押しつけがましさに墮するからだ。

海底火山列を抜けて、サラミスへの進路をとる。この距離では通信も届かない。この報告が届くには今しばらくの時間が必要だろう。その時間を潰すために、ケケットが不意に声をかけてきた。

「ねえ、デイツク」

けれどその口調は、いつもよりも不安の色が強めに出ていた。デイツクは身じろぎして、少しだけ警戒する。

「何だ？」

「竜の事は知ってる？」

竜の事。思いつく事は、以前カスレプスから小耳に挟んだことだ。なんでも、自分の腕に見合った新しい竜を設計している、とか。

「ああ」

頷きながら、ディックは優しく微笑んだ。ケケットの不安の種が透けて見える。やはりこいつは純粹だ。トキアキみたくひねくれて無い分、可愛げがあるという事か。

「俺の新しい竜だつてな。……お前は どう思う？」

「僕じゃあ、もうディックの腕を満足させられないってわかってるよ」ケケットは淡々と言った。「ディックは、カスレプスと同じで腕を磨くのを楽しんでるし。……ディックに見合った竜が作られるなら、そっちに乗るといいと思う」

「お前は優しいな、ケケット」

「そうかな」

「ああ。もう少し我が侂でもいいと思うがな」

「僕は……」

その言葉の続きが紡がれない。ケケットは、石に変わってしまったように沈黙した。胸中で揺れている不安と期待、主観と客観の垣根を捉えきれずに蛇行する感觸。

ディックは無理に話を進めずに、しばしの間、答えを待つ事にする。その一方で、答えを見つけれない可能性も考える。

答えを見つけないのは難しい。自分の気持ちと向き合いのは難しい。言葉にすればどうしても陳腐になってしまうその感觸は、誰かに伝える事は難しい。ただ、実感したことのあるモノ同士、苦笑しあうことしかできないモノだ。

あえて言うなら、それはこの景色に似ている。どこもかしこも闇に包まれていて、そこには何があるかわからない。本当は少し右に傾けば硬い岩盤に衝突してしまうかもしれない。ほんの少し上の方には、悪意をもった牙が虎視眈々と待ち受けているかもしれない。

闇は、想像できるあらゆる恐怖を写し出す。

だがそれでも、望みというのはその闇の向こうにしか存在しない。だからこそ恐怖におののいて立ち止まるか、それでもと想起した夢に手を延ばすかが分かれ目となる。

ケケットはまだ沈黙している。ディックはそろそろ助け船をだそうかと、少しだけ思考の道を逸らしていく。……けれど、これはどれだけ助けようとしても、難しい。結局、闇の中に光を夢想するのは自らおこなうしかないからである。

恐怖を超克するのではなく、恐怖を内に秘めること。そして、闇の中に夢想した光へ、手を伸ばそうと決めること。どちらも、誰の助けも得られない。

厳しいモノであれば、そんな事は自分で決めると言うだろう。優しいモノであっても、考えてご覧としか言いようがない。

ディックにできるのは、ケケットやトキアキがそれに挫折仕掛けたときに、励ましたり支えたりすることだけだ。

少しだけ笑う。昔はそれが、自分の無力の証だと思っていた事もある。今は、どうだろうか。

「ディックはなんで笑ってるの？」

「ん？ ああ。人は変わるんだなって思ってたよ」

自分は相変わらず無力だが、それは無価値ではないのだと、今はもう知っている。

そう変わる事ができたからこうして笑う事ができるのだろう。

そんな事を考えていると、ケケットはおずおずと切り出してきた。

「……。ディック」

「何だ？」

「本当に我が侂を言ってもいいの？」

「言え言え。言っちゃまえ」

「僕、ディックと一緒にいたい」

肯定から一秒の時間もかけず、ケケットは早口にそう言った。

「他の竜に取られたくない。ずっと一緒にいたい。捨てられたくない。そう思ってる。でも、ディックには迷惑だよな」

「自分の夢に他人の迷惑なんか考えるなよ、ばからしい」ディックは笑った。「それにな、お前、俺だってお前と離れたくねえぞ」

「本当？」

「何聞き返してるんだよ」「むっとするディック。」「お前は俺の相棒だろ」

「……………うん」

「ケケット。お前は俺の相棒だ。俺と長い間一緒に海を渡ってきた友だ。別れたいと思うはずがあるか？」

「でも、ディックは新しい竜に乗るんだよね」

「そうだろうな」

「僕の我が侂は、迷惑じゃない？」

「なんでそうなる。俺がお前の望みを否定するわけねえだろうが」

「……………」

「ケケット。今から俺は大事なことを言う。よく聞いておけ」

「ディックの言うことは、いつもちゃんと聞いているよ」

ディックは口を閉ざす。一秒かけて言いたいことを整理する。こ
ういうのはトキアキの方が得意だと、少しだけ思考が寄り道した。

「俺は、俺が離れたくらいじゃ、俺はいなくならないと思ってる」

「……………何、それ」

「聞け。ケケット。今はお前は自分で海を泳いでるな」

「うん」

「捕まえる波を自分で選んで、自分で泳いでる。けどそれは、お前
が最初から出来たことか？」

「違う。ディックに教えてもらった事だよ。僕はそれを真似してる
だけ」

「そうだ。けど今じゃあ、俺が教えなくても、それくらいやっての
ける。俺が必要ないって意味じゃない。けど、俺がいた証はお前の
在り方にしっかりと息づいてる」

「寄生？」

「……………」CBのセンスってのは、こつ、なんだかなあ。

「まあそんな感じだ」とりあえず肯定しておく。

「言ってる事はわかるよ。でも、実際にここにいるかいはいかは、
大きな違いじゃない？」

そう思っているからこそ、ケケットは悩んでいるのだろう。不思議な事ではない。実際それは、この海に遺されたCB共通のトラウマだ。

離れたくない、一緒にいたい。別にその考えは間違っていない。けれど、ディックとしてはこの点が不思議なのだが、どうして離れたくらいで、いなくなつたと思えるのだろうか。

過去は変わらない。自分がいた事も変わらない。ディックは、例え別の竜に乗ることになつても、ケケットの存在を感じ取ることができるだろう。それだけの時間、共に海を泳いだのだ。操縦の癖。海の感覚を掴み取るときの没入のイメージ。竜の体を捉える感覚。その全てをケケットから学んだ。そのいずれかを行うだけでも、ケケットの存在が過去に煌めく。

たとえどのような竜に乗つても、それは変わらない。ケケットが在つたという事実が、ディックを支える。もう、離れることがないくらいに染みついているのだ。

CBじゃないからわからないとは言わせない。自分だって、この時代に遺された異物なのだ。いなくなつたはずの人間なのに、ワールドスリープなんて形で奇跡的な確率で遺されていた存在。記憶も失い、名前もわからず、それまでは一緒に居たはずのに何かもと強制的に離別することになった。けれど。

たとえ自分に記憶が無くても、自分が生まれる理由があつたという事実があるこそ、今のディックは存在するのだ。たとえそれを望んだモノが、ここにいなくてもそれは変わらない。

それで、充分だ。自分が立脚することに、何の不足もない。

……けれど、どうしても上手く伝える事が出来ない。トキアキにも何度か言つた事があるが伝わらなかつた。おそらくは、これは口で言つても理解する事は出来ない事柄なのだろう。言葉にはできるけれど言葉では絶対に実感が伴わないから。

だが、絶対実感できるはずなのだ。ディックには実感がある。ケケットも、ディックと共にこの海を泳いできたはずだ。

これだけの長い時間、同じ時を過ごしているのだから、きっとできるはずだ。

「ケケツト」ディックは口を開いた。「なんで大きな違いだと思うか、わかるか？」

「……よく、わからないよ」ケケツトは言った。

「考えてみるといい」ディックは笑いかけて、そつと手元のコントローラを撫でる。「すぐに竜ができるってわけでもない。まだ当分は俺もこつちに乗るんだ。時間はある。……けど、考え続ける。そうすればわかるし、わからないなら……俺はお前が心から納得できるまで、お前といると約束する」

「……、ありがとう」

礼を言われることではないよなど、ディックはそつと考え込む。結局の所、自分は何も解決していない。時間を稼いでいるだけだ。

解決できないことだとはわかってはいるし、それに納得もしているが、だからこそ、このお礼に違和感を感じてしまうのは、いささかひねくれすぎだろうか。

だから、そのお礼と言うつもりではないが。気づけば再び口を開いていた。

「トキアキをよく見ておけよ」

「え？」ケケツトの疑問の声。「なんで？」

「あいつはこれから、お前と同じ悩みに挑む」口にしながら、考えるよりも先に言葉を紡いでいく。「いや、もう挑んでるか。人ごとじゃない。そうと考えると見れば、あいつから見つけられるモノは多いはずだ。あいつを助ける、ケケツト。そうすればお前の糧になる」

「……考えてみる」

「がんばれ」

ディックは頷くと、さて、と首を振った。

地震の予兆。崩れかけた海底都市。手にした災禍の報せは、この闇をいかなる輝きで彩るか。

危機を好機に変えられるのは、運でもなければ技量でもない。人

間にはそもそも限界というモノがあつて、創意工夫でなんでも乗り越えられるほど器用ではない。

恐怖の中心へ覚悟を持って踏み込むモノだけが、好機を見いだすことができるのだ。

トキアキはそれができるのか。

できるよう、手伝つつもりではあるが、問題の本質はケケツと同じだ。自らの意志で、恐怖と向き合うことができるかどうか。

闇の中に、何かを夢想し、手を延ばす事ができるかどうか。

「くっ……」

期待に口の端が釣り上がり、獰猛な笑みが浮かび上がる。黒瞳は闇に紛れるどころか、いつそ輝いているように見えた。けれど、そこに含まれている期待と恐怖の混合物は、驚くほど透き通っている。できないとは思わない。気になるのは、トキアキが何を夢想するかと言っただけだ。

黒衣に相応しく、ディックは不吉の死者として海底都市へと戻っていった。

悪いことは続くというのか。セルニアに振られて（微妙に間違った表現）数時間後には、ディックから地震と、この海底都市の危うさという話を持ち込まれた。

「だから、どうして、こうなる」

がくりと、トキアキは肩を落とした。すでに問題を一つ抱えているといふのに、この上なんて難易度が上がるのか。……まあ、地震が起こった時点で予想しなかったわけではないので、実質的には不安と現実がよりそって目の前に現れただけなのだが。

「おー。頭抱えてるな。どうした」

「どうしたもこうしたも、お前のせいだ」

テーブルにべたつと突っ伏して頭を抱えたトキアキの頭上に、ディックの無駄に明るい声が降り落ちてくる。こいつの場合、問題が雨あられとふってきた方がどんどん元気になるので、こういう状況は願ったり叶ったりという所だろう。

ちよつと首を絞めてやりたいが、そこはさておく。

サラミスの、整理された村だか街だかの一角。初日、ケートとカシエのいたレストランの一角に座ったまま、トキアキはため息をついた。突っ伏した先のテーブルに跳ね返って、顔に生暖かさが混じり込む。顔を上げた。

さて。ディックがいない間にしでかしてしまった事もあり、どう落とし前をつけるかという問題は、ついに時間制限まであたえられたわけだ。しかもいつまで、と明確に決められるタイプではない。状況から察するに、「なるはや」というやつだ。

解決策や打開策以前の問題として、何をどうしたいのかもわからない自分にはなかなか厳しい制限が降ってわいてきた。眉間に皺が寄るのが止まらず、そのまま額の皮膚がぶちぶちと引きちぎられて頭の中に引きずり込まれてしまいそうな気分になる。

「あー。お前、大丈夫か？」

心配しているのかどうか曖昧な、若干投げやりな口調で尋ねられた。

「あんまり大丈夫じゃない……けど、なんか、考えてみる」

「おう。がんばれ」

「とにかくまずは」

まずは……そう、周りのモノがこの事態にどう動こうとしているか、それを調べなくてはならない。

誰について調べるか。まず思いついたのがセルニア。は、まあ聞くまでもなさそうな感じがする。あの様子だとここに残るとか言いそうだ。そして出ていくモノを止めることも、またないだろう。

では次、他のCB達。サラミスに居るのは十二体。セルニアを除けば、キルケ、エルンスト、コレット、ケート、カシエ、他には誰だ。交友関係を積極的に広げていなかった事が悔やまれる。

悔やんでいても仕方がない。事態は時限つきで立ち止まっても進行している。ならば、迷う余地もなく、

「デイツク、お前ここのCB全員と交流あるか？」

「ねえよ。ケートとカシエに何人が引き合わされたが、微妙に警戒してたしな」

「うあー。警戒って人間に対する？」

「そうそう」

「マジカー」この期に及んでマイナス要素が浮上するか。「まあいいや」

「いいのかよ」

「まだどうこうするつもりはないしな」

「というか何をどうこうしたいのかも決まってるない。」

「ふむ。どうしたものだろうか。」

情報収集をするのなら、トキアキ一人でやるなら相手は限られるが、いざやるうと思うのなら別に一人でやる必要も無いというか、他人を巻き込んだ方が手っ取り早い。そんなどうにでもなる事を考

えていても仕方がないなと結論して、もつと基本的に課題を考える。知りたいのは、サラミスに居るCB、そしてサラミスに関わったCBの意見だ。サラミスにいるCB達はこれを知ってどうしたがるか、アーベンロートはどこまで支援する気があるか、タマなどのエクのCB達はどうしたいか。

そして一番近くにいる輩の意見を聞いていなかったことを思い出した。トキアキは面を上げる。

「ディック。お前ならどうする？」

「あ？ そりゃみんな受け入れちまえば早いだろ」何言ってるんだ、お前、という顔のディック。

「だよなあ」

まあこいつはそういう奴だ。しかしその癖、残りたいという奴がいたらさっさと見捨てる気もする。……うーむ。自分はそういうモノも助けたいというのだろうか。余計なお世話過ぎる。

「あー」

どうしたいのかいまいちよくわからない。

自分の事を考えれば、いざとなればサラミスから出て行ってしまえばいい。それで万事解決だ。解決なのだが、そうする事を考えると心臓の裏側あたりがじくじくと痛みを覚えるのである。それに、後ろ髪を引かれるというか。

というか。セルニアがなあ。トキアキは顔をしかめる。

「ま、俺の答えで不満なら、他の奴らがどうしようとしてるか、聞いてみるってのもありじゃないか？」ディックは苦笑した。「それこそ、サラミスのCBは当事者なんだ。お前よりもいろいろ考えてきただろうし、そのぶんすぐに答えも出せるだろう」

「そうしてくる」さっさと立ち上がるトキアキ。

「お、行動早いな。どうしたんだ？」

「いや……」

ディックにはセルニアの事は話していない。というか、このことはまだ誰にも話していない。まだ人に話せるほど考えはまとまって

いないのだ、という言い訳をしつつ、単に自分のミスが恥ずかしくて誰にも言えないだけである。無駄なプライドばかり抱えている自分に辟易しつつ、不満が重みを増して行って自ら動けなくなる前にため息にしてはき出した。

ここは暢気に、まあ地震なんか早々来ないだろうと気を落ち着けてみるべきだろうか。そんな事を考えつつも歩き出して、それから散歩で、もう一つ質問を忘れていたことに気づいて立ち止まった。足を軸にくるりと振り返る。

「ディック」

「あん？ なによ」

「なんでお前は受け入れるって言ったんだ？」

「お前好みの答えなら、そのほうが後ろめたくないから。俺からすると、なんで悩むのかよくわからないから、答えられない」

「なるほど。お前はお前だな」

ひとまず、自分の好みをよくよく知られているという点については、もう少し悩んでみるべきだろうかと悩んだ。本題の遙か手前でけつまずくのはどうも、セルニアに限ったことではないらしい。

ということでしたと外に出て行き、まずは誰を訪ねるか脳内でリストアップする。とりあえず知人全員をイメージした後、一番近くにいるモノから順々に尋ねていくという最短経路問題に落とし込んだ。ただし尋ねる相手がどこにいるのか大雑把にしかわからないというペナルティがあるので、所在が明確そうな相手を優先するという若干の重み付けをおこなった。つまり、手頃な奴から総当たりというわけだ。

歩きながら考えていた結果として、ある程度の時間短縮に成功した。気づけばレストランからほど近い位置にあるキルケの八百屋（かどうかは知らない）にたどり着いていた。彼女は相変わらず揺り椅子に腰掛けていて、向かいにあるテーブルにはタマが白い体を丸めていて鞠みたいになっていた。

「タマ、少し痩せた方がいいんじゃないか」

「じゃにい」

「違った、そんなことはどうでもよくて」文句を続けるタマを無視しつつ、キルケに向き合う。「もう話は聞いたか？」

「一体どれの事だ？」

キルケはゆっくりと目を開くと、ぱちぱちと瞬かせた。微かに釣り上がった唇が、おもしろがるように弧を描く。それは、自分だけ慌てているのをトキアキに否応なしに突きつけているようで、少しだけ嫌な気分になった。

けどまあ、所詮自分は見栄っ張りである。今更ながら深呼吸を一度して、表情を比較的いつものそれに近づけてから、言葉を続けた。
「地震と、海底都市」

「聞いている」

「どうするつもりなのか、聞いてもいいですか？」あ、弱気になった。

「かまわん。それについてはおおむね合意がとれている」キルケは頷いた。「我々はほぼ全員、エクに迎え入れてもらう事になるだろう」

「何人残ると言ってる？」

「焦っているな」キルケは笑う。「三体だ。うち二体はお前が会ったことのない奴だろう。一体は、セルニアだ」

「だろうなあ」トキアキは苦い顔。「なんでなのか、知ってるか？」

「我が言うことではない。だが、サラミスのCBであれば誰もが知っている事でもある。昔、このあたりの復興をするときに、作業を円滑におこなうために全員で意識共有をおこなったからな。皆セルニアの指示に従ってよく動いた。あの二体は、同情したのだろう」

「……………」
「何をそんなに慌てている」キルケはゆっくりと首を振った。「お前には関係のない事だろう。身の安全を図りたいのなら、エクに戻ればいい。何故、そうしない」

「別に……………」

トキアキは目を逸らした。うまく言葉が続かない。いや、続くはずがない。そもそも何をどうしたいのか自分でもよくわかっていないのだから。

いや、それだ。それを聞きに来たのだ。トキアキはもう一度キルケを見た。

「キルケは……エクに来るんですよね」

「こいつに敬語なんかいりやしないよ」タマは苛々と言った。「トキアキ。こいつにモノを聞きたいなら、自分が何を求めているかを先に口にしな。でないともない答えが返ってくるよ」

「それは……いや。俺は自分が何をしたいのかがよくわからないんだ。だから、誰が何をしようとしているのか聞いて、考えようと思ってる」

「我は、私の好きなようにしている」キルケはおもしろがるように言った。「そなたがそうしたところで、文句は言わぬ。ただ、我にとって都合が悪ければ、叩き潰すのみだ」

「あんたって奴はね」ふしゃーと毛を逆立てるタマ。

「あんたにとっての都合が悪いつて何を指すんだ？」トキアキはタマを無視して聞いた。今度はこちらが威嚇されたがそれも無視する。「そうだな。……いや、難しいな。死なねば大抵の事はどうにかなるだろう」

「そうだろうとも」タマがぼやいた。「トキアキ。こいつに自分の行動の指針を聞いても意味が無いよ。そもそも、人間にわかる指針ですらないだろうさ」

「タマ、あんたにはわかるのか？」

「私はこいつじゃないよ」タマは尻尾を振る。「だが、私も私の方針がある」

「タマの方針か……」まあ聞いて見るか。「どんなのだ？」

「ふふん」タマは笑った。楽しそうに眼を細める。「こればかりは簡単には言えないよ。が、私にとって幸せな事さ。それだけは間違いない」

「なるほど」

……まあ、納得はできるが。

この意見、今の事態にあんまり関係ないよな。トキアキは聞く相手を間違えたかと後悔して、落胆という言葉の通りに気持ちが悪く下がりしていった。

いや、それでもいくつかの情報は得られたのだ。サラミスに残ろうとするのは三体のCB。そのうちの一体がセルニア。十二体相手にするよりはよほど勝算が見えてくる。

そこまで考えて、トキアキは疑問に思う。自分は何の勝算を考えているのだろうか。

「トキアキはどうするんだい」タマが聞いた。

「それを今考えてる」

「好きなことをやればいいよ」

「それがよくわからないんだがな」

言って、トキアキは歩き出す。さて次は、サラミスの中の別のCBを探るか……それだったら、ケットに座標調査してもらったのが良さそうだ。二度手間だが、まずはディックの所に戻り、それからケットの所だ。

しかしそう考えながら歩いていると、程なくして横やりが入った。レストランに戻る途中に道すがら、アーベンロートとエルンストが話しているのを見かけたのだ。トキアキは通り過ぎようかどうか迷い、そうこうしているうちに二人に話しかけやすい距離に近づいてしまった。

先ほどの方針に従うならば、話しかけるしかない。

が、予期していなかったタイミングであるためか、突然話しかける事に、分厚い壁のごとき抵抗を意識してしまう。元々、話し下手であるし、コミュニケーション能力が高い方でもない。また、セルニアのように失敗するのではと言う不安のためか、鼓動の周期が突

然半分になつたような痛みが走る。

しかし逆にそのせいで歩みがゆっくりになつてしまい、図らずも二人の前で立ち止まつてしまった。

「どうしたんですか」そう言ったのはアーベンロートだ。やや驚いた顔をしている。「今日はぜひぶん焦つてますね」

「あー。やつぱりわかるか」

言いつつ、こんにちは、とエルンストの方に頭を下げる。エルンストはこくりと頭を下げてから、微妙な顔。トキアキが見ていると、エルンストはややひきつった顔で聞いた。

「セルニアに何かしたんですか？」

「あー。もうそんな話が。いや、今挽回しようとしているところ」

「何かはしたのか」エルンストは苦笑した。「セルニアは自分の事は滅多に話さないから、あんまり関わつても、うまくいかないと思うよ」

適度な遠さから諦める事を推奨された。トキアキは応じ方に迷つて、眉根を顰める。関係ないとか、そんなの今更だとか、ですよねーとか、なんと言い返すか頭の中で気泡が湧き出る。けれど結局、どれ一つとして言葉にならずにトキアキは目を逸らした。

その先で、アーベンロートが微笑している。これはセルニアとはまた違った味のある仮面である。死んだ蝶を麵棒で広げて無理矢理貼り付けたみたいなの奇妙な味わいがある。不思議な事に、表面上は綺麗な笑顔のに、どう解釈しても笑顔に見えないのだった。

「アーベンロート？」

「なんですか？」

口調はいつも通りだった。と思うと、表情もいつもの笑顔に戻つたような気がする。……気のせい、だったのだろうか。トキアキは内心で首を捻りつつも、要点を押して尋ねた。

「アーベンロートは、何かするつもりがあるか？」

「今のところは、特に」アーベンロートは首を振った。「輸送力が足りないのですしたら、大竜を何頭か派遣しようと考えているくらい

ですね。あとは補強資材を頼まれる事を想定していますが」

「ああ。海底都市の？」

「そうか、その手があったかとトキアキはぱつと顔を輝かせた。だがアーベンロート肩をすくめて、その期待を粉々に打ち砕く。

「ええ。ですが、応急措置以外の何物でもありませんよ。もともと想定寿命を越えた施設なんです。前にもルクルスに補修資材を融通しましたが……先送りも、もう限界でしょう」

「そうか……」

「ずいぶんがっかりしてますね」アーベンロートは笑った。「何してるんですか、トキアキは」

「いや、俺は」

何がしたいのかわからないから、こうしているのだとは、言えない。そもそも、セルニアの時だってそれで脊髄任せにして失敗しているのだ。同じミスを何度も繰り返してもしょうがない。

そう。しょうがないのだから、いい加減自分のやりたいことを考えなくてはならないはずだ。

「アーベンロートは、何がたくてここにいるんだ？」

「まあ、商売の機会がありそうだったからですな」アーベンロートはあつさりと言った。「今もここに残っているのも、究極的にはそれが理由です」

「なんで商売なんだ？」

「私のオリジナルにあたる人間が、そういう人格だったからですよ。そうですね。おそらくは、そうやって生きる事自体が楽しかったからでしょう」

「……なるほど」

「デイツクもそうでしょうし、タマも、キルケもそうでしょう。しかし、トキアキは迷っている、と」

「あ、ああ。……正直、何をしようか迷ってる」

「やりたいことをやればいいじゃないですか」きょんととして、アーベンロート。

「それがよくわからないから悩んでるんだと……」

「それくらい自分で決めなさい」

アーベンロートは呆れたように一喝した。

勿論、言い訳が思いつくはずもない。全くその通りなのだ。

「少し考えてくる」

「はい」

「……それじゃ」

再び歩き出す。背中に突き刺さる視線が一つ。アーベンロートのモノではないから、まず間違いなく、それはエルンストのモノだろう。

まあ、こんなモノか。トキアキは納得の証拠とばかりに一つだけ頷いてみせる。アーベンロートに聞いて答えが得られるとは考えた事すら無かった。だからタマやキルケと話した時のような苛立ちや落胆は存在しない。

あるのは、確かな手応え。

彼から聞きたかったのは、別の事だった。そしてそれは、期待通りの返事が得られたことで確信した。

アーベンロートはこれでいい。そして後は……そう、いい加減無視しないで、自分の気持ちの整理をつけよう。これ以上誰かに聞いて回っても考えは進まない。

すでに皆、自分のする事を決めている。

それを見て、自分一人が慌てたところでどうしようもないのだ。

……知らず、急いでいた歩調を元に戻す。ふう、と息を吐けば、じんと頭の裏側にしびれを覚えた。緊張にこわばっている体から意識して力を抜き、ゆっくりと道を進む。

そしてふと、気づいた。いつの間にか自分は、あの村だか街だかを抜けて、瓦礫の丘の間を歩いていたことに。

「はは……」

自分がどこを歩いているかすら気づかないほど、視野が狭くなっていたのか。その事実にも、軽く額を弾かれたようなショックを感じ

る。トキアキは目を白黒させながら、ぼんやりと辺りを見回す。

前後にくねった道と、うずたかく積まれた瓦礫の丘。

頭上を見上げれば、まぶしい位の白い天井。

……けれど、意識していなければ、そんなのは闇の中と何も変わらない。

トキアキはそつと目を瞑る。そしてそのまま、足を引きずるようにして不安そうに歩き出す。

目を瞑っても、海の闇にはほど遠い。瞼を貫くほどに強い光が、砂まみれのような景色を浮かべて、ちかちかと光が乱舞する。

けれどその実体は闇と変わらない。

目を開いていても、いなくても。

どこに行きたいかわからなければ。右も左も関係がない。

ただ、歩いているという感触が残るだけ。ただ、移動しているという感触が体に伝わってくるだけ。

どこに行きたいかイメージしているからこそ、どう進んでいるかわかるのに。

トキアキにはそれが無いから、海の中を、自在に泳げない。

それなら、何故、この海底都市を見つける事が出来たのだろうか。

ぱちん、と頭の奥でスイッチが入る。答えを見つげるための、何かヒントが手の中に落ちて来た感触。

心の奥から、ゆっくりと最初の記憶を引きずり出す。

闇の海を進んでいた。本当は何も見えていなかった。ケケットが反転したところ。違和感を覚えて、振り返ることを強要した。

そう、違和感だ。違和感があったから、それが気になったから振り返った。

……気になったから、見つける事が出来た。

「ああ、そっか」

一つ、納得した。

なんで気になるのかわからないけれど。自分が今慌てているのは、何かが気になるからなのだ。

いや、今更何かと言うのも馬鹿らしい。簡潔にまとめよう。

「俺はセルニアが気になるってわけだ」

口にしてみると、しっくりきた。それから目を開く。

海底都市中を照らす光が、いつそ、目を焼かんとばかりにまばゆい。いつの間にか上を見上げていたらしく、トキアキの視線の先にあったのは海底都市の天井だった。いつ崩れてくるのだろうか、ほけた考えをこねくり回す。

いや、それはどうでもいいか。

よく考えてみたら、自分はセルニアが気になるだけで、この海底都市がどうなるかは実のところどうでもいいのだ。極論を言えば、セルニア以外のCBがどうなるかも実の所関係ない。うむ。ほどよく人でなしになってきた。トキアキは頬を撫でて、視線を下ろした。ぼんやりとして、歩みを再開する事無く、その場にぺたんと座り込む。

気になるのはセルニアの事。して、何故セルニアが気になる？

「……、うあ」

それが鬼門だったのか。考えようとした途端、胸の奥が無様にねじれた。何か溶け出す。硬い岩を無理矢理溶かそうとして半端にペースト状になったモノが渦巻いているような感触。

失敗を理解するのは、のど元まで吐き気が進軍してきた後だった。考えてはならないことを考えようとした証拠。目を逸らし続けてきたモノに直視しようとする行為に、無意識が力一杯反発する。

けれど、これを考えないと。

無理矢理吐き気を飲み込んで、面を上げる。

「あ。お前……」

「大丈夫か？」

そこに。

無感情を顔に貼り付けた、アルテミスが立っていた。

アルテミスは、様子を見ていたんだと説明した。

「都市が崩れかけている事を聞いた。それと、ディックが心配していた」

「俺を？」

「トキアキを」こくりと頷く。

二人は瓦礫の丘の中腹に座っていた。遠くで、巨大な滝がノイズを生み出す。これで鳥の鳴き声とか春風が吹いていれば完璧だなと思いつつも、地上ではなく完全に人口の施設ではそのような無修正の自然なんて期待すら許さない。

そういえば、ここには四季が無いんだなと、どうでもいいことにトキアキは気づいた。

「考え事か？」

「ん？ ああ。アルテミスは四季ってわかるか？」

「知ってはいる。不便そうだ」

「あー」トキアキは笑った。「確かに」

「トキアキは大丈夫か？ さっき調子が悪そうに見えた」

「少しかだけ調子が戻り始めた体の内側が、その一言でねじれかける。」

「別に、特に問題は無い」

「ほじくり返されたくない。その思いだけで作った言い訳は、しかし、アルテミスの信用は買うには説得力が足りなかったようだ。疑いに満ちた眼差しは、台座に飾られた指輪のように強い光を発している。」

「トキアキは沈黙を選ぶ。……………ダメだ、無理だった。」

「いや、本当はあんまり大丈夫じゃなかった」

「だろうな」アルテミスは頷いた。

そして、そつと手を伸ばしてきた。額に触れたそれは、氷の中心だけくりぬいたように、ひんやりと心地いい。

「自動調整システムをいれた」

「おいまで」何勝手に人の体に仕込んでいるんだ。「そういう意味じゃない」

「どういう意味だ」

眉根を寄せるアルテミス。どうも本気で戸惑っているらしい。

……誰れかこいつに常識というモノを教えろと。トキアキため息をついた。

「いや、なんでもない。気遣いは通じた。感謝してる」

「その割には残念な感じがする声だ」

「そうだなあ……なかなか難しいという奴だ」

「確かに、トキアキとどう接するかは難しい。ディックとは別の悩みがある」

「ほー」………あー。そうだ。この際だし聞いてみるか。「どんなところが難しいんだ？」

「何を考えているかはわかるのに、何をしたいのかがわからないところ」

「………」

的確に人の一番駄目な所をつかれてしまった。自覚を覚えた後だけに、返す言葉が思いつかない。「冗談でもいいから何か思いつくと脊髄に意志を放棄しかけるが、だからそれが今指摘されたことなんだよと寸前で理性が制止をかけた。

「ディックだったら、わかりやすいか？ いやまあわかりやすいよな」さつきも、質問にあっさり答えていたしな。

「うん。けど、それでもない」アルテミスは首を振る。「ディックが自分から言うには、わかる。けど、ディックが何を言い出すか考えるのは、難しい」

「あー」

そう言われればそうかもしれない。こういう状況に置かれたとき、ディックが何をするかというのは想像できるのだが。普段ディックが何をしていたかというのはいまいち分かったためしがない。

だから先回りが出来ないんだろう。

「けれど、それでもいいと思う」

「うん？」

「それでいいと思う」

アルテミスは、あくまで真っ直ぐにこちらを見つめてくる。

白い顔の、薄い色素の唇がわずかに開かれる。

「私はそれでもいいと思う。ディックの事がわからなくても、トキアキの事がわからなくても、それでも私はかまわないと思う」

「……そうか？」

「うん。そんなことでは私は変わらない。私はお前の味方でいたい。それが変わらないから、構わない」

「……………ぐ、あ」

真っ直ぐに、じっと見つめられて。

至近距離で、逃げようのないのだ真ん中を挟られた。

反射的に、胸を押さえてうずくまりたくなる。言い訳が地獄の軍団の如くせり上がってきて、それをかるうじて口にしないことで精一杯の状態になる。けれど、ぞわりと、背筋をはった何かが消えない。

なんだこれかと思っている間に、アルテミスは一度だけ瞬きをした。

再び目を開いたときには、いつもよりも硬くこわばった顔を浮かべて、次の言葉を紡ぎ出した。

「私はお前の味方。信じられないなら、その疑念は無意味だ」

冷たい、刃のように硬質な言葉に、ざくざくと、何か切り裂かれていく気がする。

トキアキは、いつの間にかそらせなくなっていた双眸でアルテミスの顔を見る。

その瞳が、強く、輝き始めているように見えた。

「私はトキアキとディックの味方だ。私はそう在ると決めている。だから信じていい。私はお前の味方だ。どんなときでも。何かあっ

ても。お前が間違えても、お前の周りが敵だらけだとしても、お前が何をどうしても、他がどうなるうとも。それは変わらない。何があるうとも、お前を肯定する」

長く、長く。硬すぎる声にじんわりと熱を孕ませながら、助走を終える。瞳の輝きは衰えるどころがむしろ強くなり、これからが本番だと告げていた。付き合わされたこちらは、すでにもう体の内側に灼熱が生まれたみたいだというのに、それでも彼女はまだ走るつもりなのだ。

それを聞きたくない気がする。

けれど、それを聞きたい気もする。

闇の中。ずっと感じていた違和感の正体がそこにあるような気がして。

「だから、トキアキ」

そしてアルテミスは、

「トキアキは、何をしてもいいと思う」

パチンと、欠けたピースがはまった。

ざあつと、闇の晴れていく感覚。視界が一気に開けるような爽快感。足の先から、頭のとっぺんまで何かが駆け抜けて行く衝撃。

「は……はは」

そっか、と納得が胸の奥に形を作る。確信に、右手に力がこもり、硬い拳に変貌する。ゆっくりと釣り上がっていく唇が自然と笑顔を作り出し、徐々に開かれていく双眸が強く強く輝き出す。

「お前は俺の味方か」

「うん」

「俺が何をしてもいい、か」

「うん」

「お前が味方する、か」

「うん」

「……わかった。ありがとう」

すつとトキアキは立ち上がった。それが、想像以上に力がいらなくてトキアキは驚いた。一体何でこんなにからが軽いのだろう。アルテミスにさっき仕込まれたナノマシンが何かやらかしたのだろうか。

まあそれでもいつかと、今のトキアキは笑う事が出来た。

すごく、機嫌がいい。

「ああああああ、すつきりした！」

疑問は、今や心の中に影も形も残らない。

ずつと引つかかっていたつかえが取れた。その正体は、自分が何をしたいか、という疑問にたどり着くことをずつと邪魔していたものだ。だからトキアキは、その疑問と向き合うことすら出来ないままに、向き合うとした途端挫折した。

けれどわかった。今その邪魔者はどけられた。

「機嫌が良さそうに見える」アルテミスはふと笑って、立ち上がった。「どうした？」

「お前のおかげだよ」

「そうか」

「ああ。俺がずつと欲しかった一言を言ってくれたんでな」

よっ、と言いながらトキアキは丘を上がっていく。頂上はほとんどすぐそこで、十歩行かずにたどり着く。

そこから、都市を睥睨する。どこまでも続く灰色の丘が、波を打っているその景色を。

人と人との争い。破壊の跡。遺された物。それに引きずられるモノ。

問題とヒントと解決策の、その全てがここにある。

なら、解決するならこのタイミングだ。

自分はまだ何も知らないが、何、そんな事はやりながらどうにかしていけばいい。

「トキアキは何にひっかかっていたんだ？」隣に並んだアルテミス

が聞いた。

「ん？ ああ。俺が何をやりたいか……という疑問の、ずっと手前の所だ」

「どうしてひっかかっていた？」

「簡単な事だよ」

くつくつと、トキアキは笑う。まあ本当に、分かってしまえば単純なことなのだ。

闇色の海の中で迷っていた事は、本当は、何を見つけないかという事ではない。

「俺は、本当にやりたいことを考えてもいいのか、悩んでたんだ」
感じたこと、見つけたこと、それを口にしていいのかに迷っていたのだ。

だから海の中でいくらケケットと泳いでも、なかなか腕が上達しなかった。技術の問題以前の話だ。自分は、学ぼうとしていなかった。どうすればいいか、誰にも聞かなかったのだ。

ここに来てもそう。

何がしたいかがわからない。何をどうしたいか聞かれても答えられない。

けれど本当は、それ以前の問題で。

何かをしてもいいのかと、ここにあるモノを見て戸惑った。

だって、ここにはトキアキの知らないモノばかりがある。トキアキが築いたモノとは違う過去がある。瓦礫をどけているモノもいれば、子供を作ったモノもいて、居心地良さそうに微睡むモノも、ただ楽しそうに遊ぶモノもいる。

けれど彼らは言う。自分たちは遣された、と。

自分と違うモノに触れた事で、CB達はすでにたくさん傷ついている。けれどトキアキは、そんな彼らを傷つけないように触れる方法がわからない。騙し騙し逃げるために言い訳を固めてきただけで、本当は、傷つける事すら怖がっていた。

だから触れられず、手を伸ばそうとせず、

海の闇を、見通せないのではなく、目を逸らしていたように。何かを求めようとすることを、考えてもいいのかどうか悩んでいた。

今にして思えば、タマも、キルケも、アーベンロートも背中を押してくれていたのだ。好きなことをやればいい。やりたいことくらい自分で考える。時に優しく、時に厳しく。トキアキが在る事を許していた。

それでも、一歩進み出せなかった理由は一つ。それが正しいか、わからなかったから。

結論まで情けない。結局自分は、自分一人では何も選べない。味方をする、誰かに自分を認めてもらえないと、決断一つ出来やしない。

きつと自分は弱いだろう。トキアキはそう考える。

それは記憶がないからか。それは怖がりだからか。きつと、それもある。けれどそれだけではない。ディックは記憶がないけれどもまくやっている。タマは人間との争いを目の当たりにしてきたのに今でもトキアキ達と共にいる。

だからきつと。

自分は、弱い。

けれど、アルテミスに言ってもらえた。私はお前の味方だから、お前は好きにしているのだと。

だからどうにかしなくては。自分一人なら弱いことを言い訳に出来る。けれどこうして支えられたのなら、言い訳なんかできやしない。

いや、したくないと、トキアキは心の中でそうこぼす。

そして、はじめて自分の望みと直視してみれば、見える景色は全く違った。

今なら、何がしたいかがわかる。どうしたらいいかもわかる。プランも一瞬で思い浮かべることが出来て、セルニアの事も、まあ、どうにかなるだろう、多分……と思えるぐらいには、いろいろ考え

る事ができる。

「……………さて、やるか」

と、気合を一つ入れて。いい加減、自分の惨めさとは決別し、現実の問題と取り組もう。

何しろ、実は状況は変わっていない。地震はいつ来るかわからないし、次のそれでこの海底都市が壊れないとも限らない。セルニアを説得できるかは本当のところ自信が無い。

けれどまあ、どうにかしたいと、望んでもいいと教えられたから。今はただ、その望みに真っ直ぐであろう。

「トキアキ。何をするんだ？」

アルテミスが問いかける。トキアキは彼女を見ない。その目はただ、この縦横無尽に散らばった過去の断片を捉えている。

それでは、期待にお応えして。やりたいことを宣言しよう。

「このどうしようもなく散らかった海底都市を、綺麗さっぱり掃除してやるのだ」

いざやると決めたら手は早かった。まずは先ほど来た道に戻って、アーベンロートを捕まえる。彼は相変わらず壁に背中を預けていたが、その横にはもうエルンストはいなくなっていた。まあ、別にそっちには用はないので放っておいて、トキアキは彼の名前を呼んだ。トキアキを見たアーベンロートの第一声は、

「何がご入り用ですか？」

だった。

もう悩みがないことすら見破られているらしい。見事に心情を悟られて、恥ずかしいやら恥ずかしいやらとにかく恥ずかしかったのだが、まあそれはさておいて、トキアキは簡潔に用件を告げた。

「海底都市を掃除したいんで、掃除機を一つ」

「うん。いいアイデアですね。とびきりのモノを明日までに用意しましょう。お代は高く付きますが、よろしいですね？」

「勿論」

「すぐに取りかかりましょう」

アーベンロートは頷くと、壁に預けていた背中を離すと、ゆつくりと歩き出した。彼が協力してくれるのはすでに確信の中にあつたので、実にスムーズなやりとりですんだ。商売をしたいという彼の目的はかくして達成されたわけである。そしてこちらは、それをきっかけとしてほぼ確実に掃除をするだけの準備を整えられるわけである。あとは、実際に携わる人員だ。

さて、次は、と考える。

すると、隣に立ってじつとこちらを見ているアルテミスと目があつた。

「掃除をするだけなら、私が拡散すればどうにかできると思つ」アルテミスは淡々と言った。

「だな」トキアキは頷きながら、アルテミスの頭をぼんぼんと撫で

る。「ありがとよ。でも、今回はいい。こついうのはな、派手なのが大事なんだ。……あ、それより、アルテミス。もしかしてお前、ここにいるCBと仲良かったりするか？」

「難しい質問だ。けど、全員と知り合いなのは認める」

「好都合だ。ちょっと手伝いを呼びかけて欲しいんだが、頼めるか」

「掃除の？」首を傾げるアルテミス

「掃除の」頷くとキアキ。

「いまいち意味が飲みかめないけど、わかった」

「まあ瓦礫除去とか、そういう感じの事をするって伝えてくれ」

「わかった。協力を勝ち取ればいい？」

「あ、ああ。あんまり乱暴なことはしないでくれよ」

「わかった。相手が折れるまで話す」

「……………」あー。まあいいか。「頼んだ」

「任された」

こくん。アルテミスは機械的に頷くと、トキアキに背を向けて歩き出した。どのくらい頼りにしているか、いまいち不安なところがあるが、まあ、ああ言っていた事だし。いざとなればこつちでまたフォローすればいいか。

結果の保証を彼方に投げ捨て、後始末の約束だけを確約する。樂觀的に責任を取るといふ駄目の見本市みたいな行動を取りながら、「次は」と言つて歩き出した。

アルテミスは行動力はともかく、コミュニケーション能力についてはかなり怪しい所がある。となれば、そつち方面で強そうなやつか、そういつた機微を超越して他者に納得を植え付けさせる、そういう手合いを味方に引きずり込もう。

思い当たるのは三人ほど。うち一人は、アルテミスに声をかけたというあたり、今も同じ場所にいるかは怪しい。となれば、先ほど話したのとは逆の順番でアタックするのが手軽だろうと結論する。どうでもいいが、あれだけ取り乱していた後で頼み事をすると言つのもなんだかなあという気がする。

まあいいか。本筋と関係無い事は適当に許容しておくのが吉だ。無視すると足下を掬われるのでそこは注意しなくてはならない。それ、で。

すたすたすたと歩いて行くと、キルケは相変わらず揺り椅子に座っていた。揺り椅子に座られているという奇抜な状況を想像しなくてもなかったが、などというところらの頭に冷たい眼差しが向けられそうなので自重する。

しかし、いると思ったもう一匹の尋ね先の所在が見事に不明になっていた。あの白猫は勘がいいのか、面倒事に巻き込まれる前にネズミと共に山から逃げ出したらしい。実際の所大山を鳴動させるどころか微動すらしないで終わる可能性も高いのだが。過大に評価されたものだと、テンション高すぎる頭を無意味に空転させる。

「あれ、タマがいない」

「あれならアーベンロートと一緒にエクに戻っていったぞ」キルケは言った。「我といるのは飽きたらしい。アーベンロートなら、明日また来ると言っていた」

「そっか」

アルテミスとの短い会話の間に追い越されてしまったらしい。しかしタマにも手伝ってもらわなくてはならないので、これはエクまで追いかける必要はないようだ。

じゃあ代わりにと、トキアキはテーブルを挟んで向かいに立つ。

キルケは面を上げて、おもしろがるように口をねじ曲げる。気難しい事をわざと演出しているような表情に、トキアキは吹き出しそうになるところだった。

ふむ。いざ正気に返ってみると、それほど怖い相手でも、意味不明な相手でもないなと印象を新たにす。それに、この手合いは気難しくが一本気なので、なので、えーとどうすればいいか。

「頼みがあるんですが……手伝って欲しい」

「聞きはしよう。なんだ」

「大掃除をしようと思うんですが」

「まあまで。意味がわからん」

「えーと」

まあ、それはそうだよなあ。しかし理解してもらえないのは納得できるのが、こちらとしてはそのあたりを当たり前に思ってしまったのでなんと説明が難しいのだ。ドールのように任意に記憶をほじくり返せばもう少し違うのかもしいが、自分はドールではない。益体もない逃避はここまでにして、現実に関心を合わせよう。

なんと説明すればいいだろうか。とりあえず、思いついた事から口にする。

「セルニアをどうにかしたくて」

「うむ。大失敗したと聞いた」

「あー。まあそれも含めて、何ですが。サラミスの大掃除をしようかと思ひまして」

「飛躍しているな。何故大掃除になる？」

「……セルニアが引つかかっているのは昔の事だと言うのは何となく想像が付く」トキアキはゆっくりと、散らばった考えをまとめてパズルを埋めていくように口にする。「で、別に過去と決別できないのはいいんだけど、なんというか、今見ている状態が気に入らないというか」

過去を、言い訳にしているように見えるんだよなあ、と、トキアキは口にする。

「………………。ふむ。それで、大掃除か」

キルケはわずかに考えた後、小さく頷いた。

「掘り所を奪うだけでは何も解決はしないぞ」

言外に、瓦礫をのけるといふ言い訳だけを潰しても意味は無いと警告してくる。

「勿論。けど、掘り所を奪わないとどうせ上手く逃げ込まれる。今は一つを除いて逃げ場は全部潰したい」

「一つを除いて？」

「あんだ達だ」トキアキは言った。「キルケにしる誰にしる、ここで暮らしてる奴らは別に、セルニアを嫌ってるわけじゃない。今だつて、二人はここに残るって言っている。あいつは孤立しない」

「こつちに丸投げか」

「セーフティネットのつもりだ。しないで済むように、こつちで説得するつもりではある。けど、うまくいくなんで無責任な保証は出来ない。うまくいかないかもしれないから、うまくいかなかった時の事を考えてる」

いちいち突っかかるように、トキアキは切り返す。しかし言っている事は半分以上、自分ではどうにもできないかもしれない、というモノだ。これで本当に説得になっているのか。不安になる。

トキアキは、自分が突然奮起したくらいでなんでもできる万能人間になれるとは思っていない。

もう一度セルニアに話しかけても、うまくいくかは、自信が無い。どうにもならないとは思わないが。失敗する可能性も、高いと思う。

けれど、勝算もあるのだ。少しくらいは。

「あんだ達は、意識を共有させたんだろう？ だからセルニアに深くは関われなかった」トキアキは別の視点から切り込むことにした。「あんだ達のうち誰か一人でもセルニアを傷つけたら、みんながそうだと考えかねない。そうなったら、あいつを支えられるモノが無くなる。けど、俺がやればそうはならない」

「それで失敗すれば、今度こそ避けられるか、嫌われるかするだろうな」

「それがなんだ。あんだ達がいればセルニアは大丈夫だし、別にエグじゃなくても、あんだ達の抛り所はあるだろう。料金は気にしないでいいと思う。俺から依頼するから」

「アーベンロートの所か」

「そうだ」

「……確かに、失敗したときの対処はあらかじめ揃っているようだ」

ふむ、とキルケは頷く。「お前が失敗した場合はこちらが尻ぬぐいしなくてはならないのが面倒だが」

「元を正せば、あんた達の怠慢が原因で俺が尻ぬぐいしてるんだ。文句言われる筋合いじゃない」

「その通りだ！」

パン、と彼女が膝を叩く。いつもの口の端をつり上げる笑いではなく、ぱっと一瞬で晴れるような笑顔が浮かぶ。

「いいだろう。最大限の支援をしよう。我は、セルニア以外のモノを説得し、フォローの準備をする。それで良いな」

「ああ。ありがとう」

「それはそれとして、一つ聞いておかねばならないことがあるのだが」

「何だ？」む、まだ思考の穴があったか？「教えて欲しい。何か勘違いしていることがあるのか？」

「いや。お前は失敗したときのことばかり考えていて、成功した場合の事を考えていないように見える。セルニアの説得がうまくいったら、どうするつもりなのだ？」

「……………」あ。言われてみれば。

その可能性がずっと頭の中から抜け落ちていた。

うーむ。そもそも話を聞いてもらえないとか、話していて地雷を踏むとか、失敗の可能性なら無限に思いつくのだけれど。成功後のイメージはすっぽり頭から抜けていた。

が、まで、とトキアキは頭を振る。

「どうするも何も、うまくいったら、俺が何をするまでもないと思う」

立ち直った人間は、自分で立つことができる。また倒れそうな時、倒れたときには手を延ばすが、自分の意志で走っている人間を無理矢理引っ張る必要も無いだろう。アルテミスとトキアキの関係だっ
てそうである。

支えてもらっても、引っ張ってもらっているわけではない。

問題の解決は依存関係を生まない。依存関係を生むのは、問題の先送りが原因なのだ。

「だからまあ、うまくいったら、うまくいった時にどうしたいか考える」

「ふ。そうか」

キルケは小さく頷くと、揺り椅子からゆっくりと立ち上がった。立ってみると、背が高い。ディックと同じくらいあるだろうか。

「では、行こう。アーベンルートにあわせて、我も明日までには片をつけてこよう。さらばだ」

もったいをつけて、歩き出す。口調の割にその歩みは早く、あっという間にここから出て行き、別の建物へと消えていく。

……まあ、ともあれ。

「味方三人目、と」

さてと、次。残る難関はエクの手助けを得ること。実の所ここが一番難しい気がする。何しろ、エクにしろタマにしろ、本質的にはサラミスの出来事とは無関係なポジションにいるのだ。強引に巻き込むわけにはいかないし、責任感を煽るわけにもいかない。

まあそういう、手練手管を用いた方法はどうも向いていないみたいなので。ここはやはり一つ、素直に頼み込むことにしよう。まずはタマだ。それから知り合いに一人一人声をかけていく。アーベンルートへの支援が届くのは明日だから、それまでに一体何人を口説き落とせるか。……あー。口説き落とすとか、未だに他人を操ろうと考えているあたり、自分ほろくでなしだ。

頼むのは誰になるか。ケケット、ディック、タマ、カスレプス、キルシュトルテ、他にも名前を思いつくだけ挙げて……。ふむ。まあ、どうにかなるか？

どうにかしよう。

「よし、次だ」

ぐるぐるしているのは先ほどの自分と変わらないなと客観的っぽい事を考えつつ、トキアキはキルケの揺り椅子から離れていく。そして瓦礫の丘の方に出て行って、まずは一番高いめがけて「でりゃー」駆け上がる。

丘の上につま先立ちになり、ぐるんと横に一回転。焦って、そのまま滑り落ちそうになったがぎりぎりのところで踏みとどまって、吹き出す冷や汗と騒がしい心臓の抗議をしばしの間受け止める。

「んー」あー。これはまずい。

今までになかった、新鮮な方向にテンションが振り切れている。前だけしか見ないで走っているようなイメージだ。横合いから奇襲されたらおそらく確実に一刀両断される気がする。

しかしそんな心の神様からの警告を受け流して、先ほどぐるりと周辺をスキヤンした結果を思い出す。ケケットは森の方で猫みたいに丸まっていたはずだ。

ならばと、あたりをつけて瓦礫の丘を一直線に走り始める。蛇行した谷の道なんて関係ないとばかりに、丘の上り坂と下り坂を駆け上がり、駆け下り、時々転んだり時々勢いが付きすぎて止まれなくなったりを繰り返す。

「は、ははははああああはは」

こんな感覚はどれくらいぶりだろうか。前へ前へと、今はとにかく突き進みたい。前へ進む以外の事が考えられない。いや、考える事はできる。けれど考慮できない。それにけつまずいて立ち止まる事が難しい。

つい数十分前までは、どこに進むかすらおぼつかなかったていたらくなのに。

人は、簡単な後押しだけで、どこまでも前向きになれてしまう。何故だろうか。馬鹿だからだな。一秒かからず即答が脳裏を飛来する。けれど、前に進めなくなっていたのも自分で自分の足に楔を打つ馬鹿げた事をしていたからで。前に進むも進まないも、馬鹿だからって少し矛盾した答えになる。

でも、それはそうか。頭のいい奴は迷う必要がない。目的を常に
見つめていて、そこに向かって最短距離を歩み続けるのが頭のいい
奴なのだ。

どうでもいいことに囚われて、目的すら見つけられない馬鹿だか
ら、トキアキはこんなに苦労する。

よし。今度ディックに会ったら、頭がいいとほめてみよう。どん
な顔をするだろうか。想像するだけで頬に痙攣が走り出す。……う
む。嫌がらせ脳も絶好調。

しかし、そろそろこのテンションも落ち着いてきそうだなと、息
苦しさと現実に立ち戻る。額に浮かんだ汗とか、運動不足で爆発し
そうな心臓とか、激しく上下する肩とか。体は意気地無しであつと
いう間に限界を訴える。今は、心がちよつと暴走気味で苦しさをち
よつと無視している。そろそろ止めておかないと肝心の明日では
そうだ。

「
というわけで、おもいつきり息を切らした馬鹿がケケットの前に
やってきた。ケケットは両足を畳んで瓦礫の上に寝そべっていたが、
トキアキが瓦礫の丘から滑り落ちて（横になってごろんごろんと
痛かった）来たのを知って、ぐいつと顎を持ち上げた。

「何やってるのさ、トキアキ」

「こ……ろん、転んだ」息切れが激しすぎてうまくしゃべれない。

「それより、ケケット。エクまで運んでくれないか？」

「えー。いいけど。突然だね」

「用事が終わったら戻ってくる」

「用事？」ちかちか。瞳を何度か点滅させるケケット。「通信回線
開こうか？」

「あー」んー。「いや、会いに行く」

「非効率的だね。わかった。中にいるディックもいって」

「ディックもいるのか」

「うん。待ってたってさ」

「……………」あいつは一体何を考えているのだろうか。「まあ、いや。都合がいいし」

ケケットが翼を傾ける。そこを駆け上がって行って、背面のハッチから中に。前側のシートにはすでにディックが腰掛けていたので、後部シートに乗り込む。

「お客さん、今日は高く付くよ」

「まける」馬鹿かと同じ発音で言ってしまった。きつと口の中で混ざったのだろう。

「お前、行動始めると途端に乱暴になるよな。いいけど」ディックは呆れた声。「じゃ、エクに全速」

ぐつと、シートに体が押しつけられる。コクピットに投影された景色が恐ろしい早さで流れ始めた。コクピット内の重力制御システムが一瞬追いつかなくなるほどの加速感。ケケットは大きく右旋回し、正面に滝を捉えて、飛び込んだ。

鯉ではないが滝を登って、深海の中に飛び込んで行く。そして、滝を抜けて海に飛び出せば、コクピットの中は真っ暗闇へと変貌した。ディックは何も聞かずに、ケケットを右斜め上へと進ませる。

「思ってたより早かったな」ディックは言った。「妙に元気だけど、何がきっかけだった？」

「単に、自分が何かしてもいいって思えるようになっただけだ」

「ふうん」微妙な返事。「俺もタマも前から言ってただろ？」

「お前らが言ってたのは、何をしたいんだ、だろ」

何をしたいんだと尋ねると、何をしてもいいんだと許すのは、大きく意味が異なっている。

「ふうん。……許しなんか、いるのかね」

ディックはよくわからない、といった風だ。

けれど、それがわからないからこそ、こいつは今まで真っ直ぐ進んでこれたのだろう。自分が存在することに許しなんか必要としていない人間には、一生実感がわかないだろう。

本来、そちらの方が普通なのだ。

けれどトキアキのように、心の弱いモノもいる。自分の判断を信じられず、誰かに許されなければ、前に進むことすら躊躇うモノも。ディックと違い、トキアキは弱いし馬鹿なのだ。

だから、記憶を失ったくらい的事で自分がわからなくなり、自分がわからないから内側に閉じこもる。

頭のいい奴はそんな判断はしない。何故なら、彼らは自分とは自ら作り出していく物だと知っており、そのためには前に進むしかないとわかっている。そしてそれがあまりに当然の事だから、考える事で躓くなんて間抜けな有様が理解できない。

当然のことを口にして、当然のことしか口にしない。そしてそれ故に、当然のことを言い、実行できるといふ事を、特別だと実感できない。

ふと、気になった。ディックとて、記憶がないとか、知り合いがないとか、トキアキが目覚めてからの経験は全て共有しているはずなのに。トキアキとはこんなにも重ならないのは何故だろう。

不思議の種が、ここに一つ。トキアキはまだ自分では答えられないと結論して、少しだけ、思考を先延ばしにして、答えだけを尋ねてみる。

「なあ、ディック」

「ん？」

「なんで俺とお前は違うんだ？」

「意味もわからんが、同じになる理由こそ分からん。俺たちはそんなに同じか？ どんなどころか？」

「……うーん」

相変わらずの当然の答え。それだけでは何もわからない。

が、答えだけは確かに手にした感触がする。

他人と自分は不等号でしかつながらない。

けれど理由はあるのだ。いつだって、どこかに。

エクに戻ってきた。港でさっさとケケットから下りつつ、ケケットには一言声をかけておく。

「明日になったらまた向こうに行く」

「はいはい。じゃあアパートで待ってようか？」

「そうだな」

「りょーかい」

ケケットは翼を広げて水面でバランスを取り、ゆるゆると旋回して距離を取る。飛び立つ姿に背中を向けると、ディックがこちらを見ていた。

「俺も家に戻るよ」

ディックはそう言っ、アパートの方へと歩き出す。が、少し待て。まだお前には用事がある。

「ディック」

「んあ？」振り返った。「何だよ」

「手伝って欲しい」

「何を」ディックは顔をしかめる。

「え？ ああ、すまん。用件を言い忘れてた。えーと。大掃除をする」

「お前それは嫌味か」がるる、と歯をむき出しにして威嚇してくるディック。「ちゃんと部屋は片付ける」

「そっちじゃなくて、海底都市のだ。明日アーベンロートが手伝いを連れてくる」

「ん？ あー。……ほー」

何かに気づいた顔から、目が少し大きくなって納得した顔、そしてにたりとおもしろがる表情へと緩やかに変化していくディックの顔。そしてひとしきりにやにやが広がり終わると、わかったと頷いた。

「大掃除、ね」

「ああ。それでセルニアの手助けをしたい」

「大変な掃除になりそうだなあ」ディックはにやりと笑う。「お前

もか？」

「ああ。まあ一人相手にするだけで手一杯になりそうだが」

「そのために都市一つ掃除するっていうんだから、お前もなかなか派手好きだな」

「別に。最大効果を狙ったらそうなたただけだ」

「ケケケ」

ディックはひらひらと手を振って歩き出す。すでに了承は得ていたので、それで充分なりアクションであった。

「お前は懲りないねえ」

とはタマの言である。懲りるほど何かに挑戦した覚えは無いのでその発言は不適當だと言いかけたが、自分をそこまで貶めてどうすると無意味に回る舌に自重を命じた。

海の家、と言われる広場の前のテーブルにタマはその名前の形になっっていた。それを揺さぶって起こして起きようとしないので尻尾を掴んで「ふいーっしゅ」と言ったら「ふしゃー」と噛みつかれてしまった。

すぐに反応したので、寝ているように見えたのは演技だったに違いない。トキアキは痛みに顔をしかめつつ考える。

今、右手はキルシュトルテから「馬鹿？　ねえ馬鹿なの？」という視線を向けられながらスプレー状の傷薬で治療してもらっている。タマは少しばつが悪そう。人間の体は脆いというのをすっかり忘れていたのだろう。

そろそろ、シリアスに戻ろう。口を開く。

「やりたいことがある。けど、俺一人じゃ出来ない。だから……助けて欲しい……いや、手伝って欲しい」

「嫌だよ」

むう。用件も切り出す前から断られてしまった。けれどタマの反応でこれは普通だ。キルシュトルテも「何言ってるんですか」とい

う目でこつちを見てきているし。……あれ、こつち？

「そんなに変な事を言ったか……？」

キルシュトルテの方を見て尋ねる。彼女は肩をすくめて、タマとトキアキと自らで三角形を作る位置の椅子に座る。

「無自覚なんですね」今度は口調までしつかり呆れさせてきた。「タマがそんな真っ直ぐにモノを頼まれて頷くわけ無いじゃないですか」

「いや、そんなことはないだろ。なんだかんだでちゃんと話も聞いてくれるし。いつも」

「だそうですよ、タマ」

「……………」タマは尻尾を揺らして、ふいとそっぽを向く。

「タマー」キルシュトルテはにやにや笑いながら背中をつんつんする。「拗ねてないで何とか言ったらどうですかあ」

「私から言う事なんて何も無いよ」

「えーと、事情を話すと……………」

トキアキはまだ事情を説明していなかったことを思い出して、話し始めた。

よく考えてみたら、今までの相手はどいつもこいつも大掃除と言っただけでよくもまあ皆理解してくれたモノだと感心する。実体としてやる事は海底都市の大掃除に他ならないのだが、どういう理由でそれをしようと思いついたかについては今まで誰にも説明したことがなかった。

いい機会だと思ったので、事情を知らないキルシュトルテにもわかるよう、一から説明してみた。

海底都市が滅びるに至った経緯。セルニアというドール。地震と海底都市の寿命。

一連の話をするのかかった時間は、十分弱だった。足りないところはキルシュトルテがちよくちよくと尋ねてきてくれたので、トキアキとしては説明がずいぶん楽だった。キルシュトルテは優秀な聞き役だと心の中で感心しつつ、話し終えたところで、なるほど、と

彼女は頷いた。

「いいんじゃないですか？ フォローもありますし」

お前は失敗するかもしれないなと遠回しに指摘された。

「私は反対する理由は無いですけど……。タマはどうしたの？」

「そんなにうまくいくものかね」

「うまくいかないかもしれないって話してたじゃないですか」

「うまくいかないかもしれないのにやるのかい」

……………。

なんだろう、とトキアキは首を傾げる。タマの言葉は皮肉めいてるのに、その声音はあまりに無機質だ。まるで、心にもない言い訳をしているように感じる。

けれど、その理由に思い至る前にまずはタマの問いかけの答えにたどり着いてしまったので、それをまずは口にする。

「もうすでにうまくいってないんだから、何をしたらいいだろう」
後ろ向きに直進する心意気。心から前向きな理由は、これ以上後がないという絶望から生まれているのだという自覚が芽生える。

何しろ、トキアキはすでに一度失敗している。セルニアに話しかけて、うまくいわずに、逃げられた。このスタート地点は既にマイナスで、今はゼロに向かって走っているに等しい状況だ。

「それに……」

けれどそれは、あくまで後ろ向きで見ようとするから。

同じ物を見たところで人の反応は千差万別。トキアキとディックが、同じく過去を喪失しているのに、ここまで違っているように。

「うまくいかないかもしれないけど、やってみたらうまくいかもしれないし」

うまくいかない可能性を一つ一つ列挙するのと同じ口調で、うまくいく細い道のような可能性を祈るように口にする。

「だから、やってみたいと思う。一応、思いつくだけのフォローも準備して、うまくいかなかったときの対策もとってる」

「キルケに任せるってだけの話だろう。まったく。フォローからし

て人に丸投げじゃないか」

「まあ」トキアキは苦笑した。「そうだな。俺がやってるのは誰かに何かを頼むことばかりだ」

そしてセルニアとの対話でも。きっとトキアキは頼むことしかないのだろう。

お願いします、こつちを向いてください、話を聞いて下さいと。

タマの一言は綺麗にトキアキの中核を貫いている。誰かに願いを口にして、動いてくださいと頭を下げたり、商売したり、おもしろがらせたり。けれど、今は四の五の言っていられない。

何しろ、トキアキには何も無い。過去はとつくの昔に散逸して、それに気づいてからも何も積み上げてこなかった。自分の中には自分をかたどるなにも無いから、だから、確固たる他人に頼っている。情けない、とは思うけど。

その情けなさですら認めないと、今は目的すら果たせない。

「俺は俺が無能だって知ってるし、怖がりだって事も、逃げ癖があるって言う事も知ってる。俺一人じゃ瓦礫をどけられないことも。だから誰か一人に関わるだけでもこんな大仰な準備が必要になるって。けど、それでもいい。いまはそれでもどうにかしたい」

トキアキは息を吸った。もう一度、頭を下げる。

これで聞いてもらえなければ……… やっぱり、何度でも頭を下げようと考えて。

「お願いだから、助けて欲しい」

しばらく、空気が止まったような沈黙が続く。しかしそれも長くなく、やがてタマは諦めたように口を開いた。

「やかましいよ。ぐだぐだぐだぐだと」

タマは面倒くさそうに尻尾を振った。ゆっくりと、ブリキのおもちやみたいに面を上げて、その双眸を細める。

「あんたを見てると苛々する」タマは言った。「昔の私の主みたいだ。後ろ向きで、言い訳ばかりして、隙あらば自分のやるうとする事を無能を理由に封印して。しかもそのくせ、本当にどうしよう

もなくなつたらいきなりやる気を出すんだ。それで、今までの全部を理由にして私たちを脅迫するんだよ」

自分には何も無い。自分は何もしてこなかった。頼りになるのはお前達だけだ。どうか、助けてください。

タマは、歌うように、懐かしむように　どこか、楽しそうに、その言葉を口ずさむ。

「あいつは帳尻あわせは得意だった。普段手を抜いて、どうしようもないときだけががんばるからね。ああ……けど、あいつにも、こういうところがあつたっけね」

そう言つてタマは目を瞑る。

瞼の内側に、どのような過去を去来させたか。

ややあつて、彼女が言つたのはこんな事だった。

「あんたはあいつと似てる。あいつなら上手くやった。あんたも上手いくさ」

「……………」
「私たちが頼りなんだろう。助けてやるよ。私たちにできるところでね」

……………
いけない。頬を見えない糸で天に引つ張られていく感覚。ひきつって、笑つてしまいそうになる。

ああ。なんて不器用な応援の言葉だろう。

アルテミス、闇を晴らす言葉とはまた違う。じんわりと皮膚を暖めるようなその言葉が、ゆっくりと内側に浸透してくる。不思議な感覚。ぺたぺたと、背中を触られているようなイメージがある。

「ありがとう」

「ふしやー」

でも何故かお礼を言ったら威嚇された。……何か間違えたのだろうか。困つてキルシュトルテの方を見れば、彼女は呆れたようにこちらを睥睨して、

「どっちもひねくれすぎです」

実に正しい一言と共に、やれやれと肩をすくめたのだった。

「まあ、認めなくはない、かなあ」

曖昧さに答えを隠す。肯定しても否定しても恥ずかしい事にしかならないという確信が、トキアキの舌をオブライートで包んでしまう。

ともあれ。

これで、エクからも味方が集まるだろう。

後は明日の準備として、セルニアとどう話そうかを考えることにしよう。

そして、翌日がやってきた。……………んでもって、寝坊した。

エクの船内が暗くなつてからも、どういつ風にもセルニアに話しかけようか、その後どう話そうかを、は延々延々考え込んでいたのである。

トキアキはため息をつきたかつた。

いざやると決めたのはいいが、それで突然自分の弁舌が上手になるわけではない。というか、すでに失敗しているという事実が、遅まきながらトラウマとなつてぐさぐさと脳髓に突き刺さってくる。その過去はすでに、這い寄る睡魔を根こそぎ惨殺していく素晴らしき剣へと消化されてしまつたようだ。

おかけで目が覚めた時にはいつの間にかエクの中に誰もいないという珍事態になつていた。

……………シヨックでかい、とトキアキは心の中でつぶやく。

ただ、ケケットだけはディックを送つた後戻つてきてくれていた。今はトキアキが乗り込み、サラミスへと向かつている。

これは明日思い切り馬鹿にされるなど負の方向にどきどきする。今現在にしても、ケケットが何も言わないことにじんわりと恐怖を感じていた。

「ケケット？」不安を紛らわせるようにトキアキは口を開いた。

「何？」

返す声は、いつも通り。何の違和感も存在しない。

「いやその、寝坊したのは悪かつた」

「えー。僕に言われても」

「そりゃまあ、そうなんだが」

いやはや、とため息をつく。今日はシートベルトもつけていないし、コントローラに腕を突っ込んででもない。完全にケケットの自動操縦である。今間違つて制御権を握つたら、無謀な全力疾走で海

底都市に新しい穴を作ってしまう公算が高い。

膝が貧乏揺すりを開始する。慌てて、苛々しているのは明らかだった。勿論自業自得である。

「ケケット」

「何？」

「いやまあ、付き合わせて悪い」

「いいよ」ケケットはくすくすと笑った。「なんだかき、弱気だね、トキアキ。昨日は凄く強気だったのに」

「目が覚めた。俺はダメだ」

「えー」

「けど、やる」

「……そこはトキアキだよねえ」ケケットは機嫌良さそうに返した。

「どうしてなの？」

「何が？」

「けどやるって。自分は駄目なのに、というか、うまくいかないかもしれないって、思ってるんでしょう？ もう掃除は進んでるよ。」

アーベンロートもたくさんさんのCBを連れてきてるし、エクのみんながサラミスの掃除をしている。瓦礫はどんどん除けられてるし、無事な建物は修復されてる。サラミスに住んでいるCBも協力的だよ」

「セルニアはどうしてる？」

「それは秘密」

「だよなあ」頭を抱えるトキアキ。「どうしたもんか」

「どうするの？」

「とりあえず話を聞きに行く」

「うん。それから？」

「まあ……わからん」

「えー」

何しろ、すでに盛大にポカしているのだ。今更感がおもいきり漂っている。

けれど、ケケットが黙っているという事は、まだ自分にも役目は

あるのだろう。

……勘違いかもしれない。でも、それならそれでもいい。勘違いじゃなかったら、自分には責任を取らなくてはいけない。

ぎゅつと胃が引き締まる。酸っぱいモノがこみ上げてきて、トキアキはそれを飲み込んだ。

「じゃあさ、トキアキ。一つ相談にのってくれない？」ケケットは言った。

「いいぞ」

もつとも、相談の相手を盛大に間違えている気がするが。普通、セルニアに対して思い切りポカやったと言った輩に相談を仕掛けるか？

「ディックの次の竜の話は知ってる？」

「小耳に挟んだことは」

「うん。でも僕は、ディックが離れていくのが嫌みたい」

「だろうな」頷く。

「どうしたらいいと思う？」

「どうしたいか次第」トキアキは言った。前に自分も言われたな、と思いつつ。「ディックとどうしても離れたくないなら、何か特殊な方法を考えないといけない。忘れてるかも知れないが、ディックも俺も人間だから、いずれ死ぬ。仮にディックが他の竜に乗らなくてもいつかは離れ離れになる」

「……そっか」

「離れたくない、と思う気持ちは正しいと思う。寂しいと思うのも、あいつだって、別段ケケットと離れたいって思ってるわけじゃないはずだ」

それでも、あいつの場合は、前に進むしか生き方を知らない。当然の事を当然のように選ぶことしかできないから、立ち止まることも後ろ向きに突っ走ることもないのだ。

普通は立ち止まるし、後ろを振り返るし、間違えた方向に走ってしまうこともあるというのに。その気持ちは、ディックは絶対

に実感できないことだろう。

「ケケツト」トキアキはややあつて、口を開いた。「この問題の肝心な所は、離れたい、離れたくないという気持ちじゃないと思う。お前は離れたくないと思ってる。なら、それはそれでいいんだ」

「いいのかな」

「いいんだ。それともお前は、ディックを離れさせないために他の竜を全部破壊するとか考えてるのか？」

「そんなことしないよ！」怒られた。

「だろ。何よりお前は、それだけディックの事を思ってるんだ。それが悪いことのはずがあるか。……でも、それなら、その手前も考えて見た方がいいと思う」

「手前？」

「なんで離れたくないんだ？」

「それは……ディックといると、楽しいから」

「じゃあ次だ。ディックとこのまま一緒に居ると、離れるの、どっちが楽しくなると思う？」

「それは……うー」

「意地悪な問いかけだっというのは分かってるから、責めていい」トキアキはそう言っつて、沈黙する。

本当に、嫌な質問だ。無理矢理ディックを縛り付けても、ケケツトの望む楽しいにはならないだろう。けれどディックと離れて、楽しいと思える明日を過ごせるかは保証がない。

けれどそれは、やはり、物の見方の話なのだ。

保証がないから、駄目になる理由を一つ一つ挙げていってそれを言い訳にしてみるか。

それとも、明日に自ら楽しい未来を思い描くか。

ケケツトの背中を支えるには、どんな言葉が必要だろう。トキアキは少し考えて、口を開いた。

「ケケツト。ディックについて楽しい理由を考えて見るといい。それがお前の望みだと、思う」

「……僕の、望み？」

「ああ。ディックといて楽しいのは本当だし、ディックと離れるのが嫌だと思つのも本当だ。そしてそのどっちも、否定する必要は無い。だから、考えてみてくれ。なんでそう思うんだ？」

「僕は……」

そして艦内は、沈黙の闇に包まれる。ケケットはまだその闇の向こうに触れていないから。

けれど、本当はそれは、もう身近にあるはずなのだ。

ここから先は、トキアキでは支える事しかできない。答えはケケットとディックの関係にあるモノだ。ディックと話さなくては、見つからないだろう。そしてディックと話すために、ケケットが、ケケット自身を見つめ直さなくてはならない。

また迷っているようだったら話しかけよう。そう思って、トキアキは少しだけ息を吐く。

問いは、自らに返る。

何故トキアキは、セルニアに関わろうとしたのだろう。

何故、セルニアが気になったのだろう。

……また、セルニアから逃げられない理由が出来てしまった。

トキアキは、自分自身の求めるモノを知るためにも、彼女と向き合わなくてはならないのだ。どうしても。どうしても。

「よく、わからないよ」「ケケットは言った。

「わかるまで考える」「トキアキは言った。「俺もそうする」

「トキアキも？」

「ああ」

「トキアキは何に悩んでるの？」

「なんで、セルニアに関わったんだらうなって。関わらなくてもいいはずなのに。どうしても、関わりたいって思ったんだらうなって」

「……そっか。わかるといいね」

「わかるまで考える」

「うん。僕も……そうする」

「がんばれ」

「がんばる」

言って、ケケットは笑い声をこぼす。ふふっと、どこか、楽しそうに。

「トキアキの方が優しいのに厳しいね」

……さて、それはほめられているのかどうか。判断に悩む評価になりそうだ。

そんな話を経て、トキアキは海底都市に到着した。

瓦礫の丘を踏みしめる。まだ、森の辺りは片付いていなかった。それは彼女が、その丘の頂上に立ったまま、微動だにしなかったからだろう。

ケケットは森の付近に着陸して、トキアキはそこから、彼女に向かって真っ直ぐ歩いて行った。

一步、一步と進む度に、ざりつという足音が鼓膜を揺らす。

緊張が高まって心臓が凍り付いたようだ。もう、鼓動がするのかわかからない。手の平には冷たい汗が溢れている。ぎゅっと握ると、微かな痛み。爪が手の平に突き刺さっていた。

「ふう」

息を吐く。それと同時に感じる、吐き気。昨夜から何度も繰り返した不安が胃の腑からせり上がってきて、喉元で停滞する。口を開けば吐いてしまいそうな、体の内をねじるような痛みに襲われた。

けれど、歩みは機械的に、一定の速度で進んで行く。

もう失敗しているのではないか。話すら聞いてもらえないのではないか。何も聞いてもらえないのではないか。何も話してくれないのではないか。完全に、今度こそ、心の内側に閉じこもってしまったのではないか。

また、傷つけてしまうのではという叫びが、頭の奥でがんがんと響

く。

逃げたい。逃げたい。逃げたい。駄目な理由を片っ端から口にして言い訳で壁を作って終わりにしたい。闇の中で恐怖がどろどろと濁った妄想を乱舞させる。

けれど、今目の前にあるのは現実。

セルニアは振り返りもしない。足音に気づいているのだろくに、微動だにせず、じっと、丘の向こうの景色を見つめている。

動かない。から、逃げない。今なら少なくとも、近づく事だけ是可以する。

このまま話しかけもせず逃げ出すのは、無しだ。

斜面を登る。瓦礫が、がらがらと音を立てて崩れていく。

躊躇いを時間で粉碎する。恐怖を一步ごとに踏みつける。どんどん強くなっていく不安に対して、逃げ場を一つ一つ無くしていく。

皆の手を借りて、セルニアから逃げ場を奪ったように。

口が痺れる。手から感覚が消える。足はまるで、木の棒に変わったかのようにぎこちない。

けれど、自分で逃げ場は壊していったから。もう進むしか道は無くて。

そして、丘の上にたどり着いた。

「セルニア？」

意を決しようとしたけれど、それよりも早く、口はその名を紡いでいた。

始めてしまえば、なんてことは無い。トキアキは緊張と不安を全て背中に置き去りにして、セルニアだけを見つめていた。

彼女は、ぎちと、軋むようなぎこちなさで顔をこちらに向けた。

その顔に、予測が、確信に変わる。

すっかりこわばった口元。化石にでもなったような頬。細められた瞳に、少しだけ、困ったように寄せられた眉根。泣く事と怒る事

と、どちらを選ぼうか迷った末に諦めを選んでしまったような、ひどく困惑した表情。

逃げ場以外に拠り所の無かったモノが、それすら奪われて、目を逸らしていたモノに無理矢理向き合わされた顔。昨日、トキアキが瓦礫の丘で吐き気を訴えたときと同じ空気がそこにはあった。

「なんで、こんな事をするんですか？」

セルニアはいつも通りの、優しそうに聞こえる口調で聞いた。けれどそれですら、彼女にとっては例外な事だっただろう。

セルニアは人との間に壁を作る。それ故に、質問という形で自分をぶつける事も少ない。

これはプラスなのか、マイナスなのか。トキアキはほんの少しだけ考えて、どう答えるかを考える方が重要だと結論する。

「逃げ道を潰した事か？」

言いながら、丘の向こうの景色を見る。

思ったよりも、壮大な掃除の様子がそこにはあった。

竜が巨大なカーゴを惹いて移動していく。巨人が瓦礫の山をそこにがしゃつと乗せていく。瓦礫ののけられた場所ではドール達が修復可能な建物に取りかかり、とんでんかんと壁や屋根を補修している。

一体いつから始まったモノか。すでに見える景色の半分近くが掃除されていた。

「瓦礫をどけたがってたのはセルニアだったと思う」

「別に誰かに手伝って欲しいとは言った事が無い、かなあ……」

現在を呼び込んだ原因を投げ返そうとして、緩やかな口調に拒絶される。口調はともかく、意志はずいぶん頑なだ。……それもそうか。逃げ込む場所を無くしたのだから、自らを頑なにしなければ立つこともままならないのだろう。

「手伝って欲しいと言われた事は無いなあ、確かに」

そしてのんびりと、相手の拒絶を肯定しつつ、どうしようかと考える。

相手の拒絶を無視して言葉を続けることも、その拒絶を肯定することもトキアキには可能である。けれど、どちらの行いも理解するという立場からはほど遠いモノである。

不満があるならばつけてもらわないといけないのに、自分の内にもらせてしまうのが問題なのだから。トキアキはどちらの言葉も選ばずに、別の目的を中心に据える。

「俺はセルニアがこの瓦礫にどういう過去を重ねてたかはわからなし、どうしても瓦礫をどけているのかも知らないけど、みんなにやって欲しいって頼んだのは俺だ。止めて欲しいと頼むのもできる」

「……………」
「やめてほしいなら、やめる」

返事がこない。やはり失敗しているよなあとトキアキは考える。行動よりも先に対話に出るべきだったのに、昨日は焦りが先走っていた。まあ、仕方がない。過去には戻れない以上、やってしまった後で考えるしか今の自分には許されない。

沈黙は未だに続いている。相手から言葉が与えられない以上は、相手から無理に聞き出すのはやめにしよう。

すでに行動を見せつけていて、その上、押しつけがましい事この上ないけれど。

いまさらながら、言い訳を開始する。

「最初は気になっただけだった。このだっ広い都市を素手で瓦礫を除けるとか、どう考えても無理だろうと思った」トキアキは淡々と話し始めた。「次に、他の誰かが瓦礫を除けているところを見なくて、不思議に思った。誰も手伝わないのは何故なんだろう。それで、アーベンロートが前にも来たことがあると聞いて、変に思った。なんで重機の類を買わなかったのか。それで結論した。セルニアは別に、ここを片付ける気は無いんじゃないか」

セルニアが行っていたのは、ここを掃除することではなくて、その掃除に没頭して何かから目を背けることなのではないか。

トキアキなら、何も考えないという殻に逃げ込む所だが。何かをしているからと言って、それが外に向いているとは限らない。

終わらない、不毛な作業に従事するのは現実逃避と変わらない。

「別に、逃避が悪いとも思わないけどな」トキアキは続ける。「俺はセルニアに何があったかは知らないし、何を考えているかは、聞かせてもらってない以上わかりようがない。なんとなく想像が付く事も、なるべく自分の事を知られないようにしようとしてるっていう事だけだ」

自分の事を話さないようにして、周りの事だけを話題に取り上げて。笑顔と優しい口調で壁を作って距離を置く。

周りにストレスを与えない分その壁はよく出来ていたけれど。

同族から見れば、頭皮を掻き毟りたくなるような不快感が伴ったのも事実である。

「別に、それが悪いとは思わない。繰り返しになるけど、俺は逃げる事が悪いとは思わない。俺も逃げていたし、逃げていれば、嫌なモノと向き合わずにすむ。向き合って無事で済む保証も無いのに、それと向き合えなんて言いたくもない」

嫌なモノと向き合うのは乗り越えて前に進むため。けれど、向き合うことでどうしても壊れてしまうのであれば、そもそも本末転倒だ。目的を達成できない事が保証されている疾走はただの自殺行為である。

「でもそれなら、この場所を掃除して抛り所を奪う必要も無かったよな」

そして、トキアキは自分を否定する。

話し始めたときから含む矛盾を露呈して、セルニアは何をどう思っているのだろうか。彼女はこちらを見て、どこか、ひび割れた笑みを維持している。

「トキアキさんは、なんでこんな事をしたんですか？」

もう一度、彼女は尋ねてきた。最初の質問よりは、いくらか本当を滲ませて。

「セルニアは、この景色が辛いと言った。だから片付けることにした」

「そうでしたっけ……」

「言った。『こうやって瓦礫だらけの場所を見ているのは辛くて』って言った」

「……………」

「瓦礫を片付けることに没頭して逃げているのも想像が付いていたけど、それならわざわざ逃げた先でまで辛いままでいる必要は無いだろ」

私のせいじゃないけど私のせい。そんな曖昧に、無いところからひねり出して自らに責任を負わせてまで、逃げ道なんて作るモノじゃない。

痛みから目を逸らし、それ以上傷つかないようにすることが逃避の本質だというのに。

「逃げてもいいし、考えなくてもいいし、間違えていてもいい。けど、傷つきたくないから逃げたのに、それで傷ついてどうする」

すつと息を吸う。昨晚から考えた結論。逃げているのに傷ついているとい矛盾の答えを準備して、

ほんの少しだけ、こんな勝手な結論を押しつけていいのかと、今更な躊躇いを覚えつつ。

「違うだろ。逃げて傷ついてるっていう事は、本当は 逃げたくなかったんじゃないか？」

そうやって、一つの考えを口にした。

セルニアの顔をじつと見る。微動だにしない口元、頬、瞳。すっかり風化してしまった遺跡のような風貌の裏側で、一体何をどう考えているのか。

けれどこちらとしても、もう引き返すことは出来ないのだ。言ってる事は間違っているかもしれない。心配の仕方がずれているかも

しれない。いきなり行動に出たのはまずかったかもしれない。そもそも、セルニアとはほとんど何の関係もなかったのに、こんなに踏み込んでしまうのは間違っているかもしれない。

ずけずけと他人の心情に踏み込んで、勝手にこうだと決めつけてそれが正しい事だとはトキアキは思わない。それが相手のためになると思えたとしても、そんな事は関係ない。

自分は間違っているかもしれない。不安に、膝が砕けそうになりながら、トキアキは彼女の言葉を待つことにした。

そうして、トキアキは沈黙した。

黒い、海の底を削りだしたような闇色の双眸がこちらを見ていた。その目は、揺れている。不安の波が浜辺に打ち寄せるように、周期的にゆっくりと。

セルニアは少しだけ疑問に思う。何故この人はこんなに関わってくるのだろうか。こんなに不安そうにしているのに、どうして近づいてくるのだろうか。そんなに大層な理由が、私なんかにあるのだろうか。

無いと思う。距離は適切に取ってきたはずだから。

けれど、気がつけば逃げ場が無くなっていて、どんどん追い詰められている。ずっと何年も繰り返していた瓦礫掃除も、気がつけばセルニアの手元から離れ始めている。あと、数時間とかからずにはラミスは綺麗に片付けられてしまうだろう。

それをしでかしたのは、この人。

こんなに大勢を巻き込んで、セルニアだけを置き去りにして、勝手をした人。

今日、いきなり瓦礫の除去が始まったとき。セルニアは啞然とした。何が始まったのかわからなかったから。

そして、すぐに腹が立った。

こちらの気持ちも考えずにとか、勝手な事をとか。身勝手な押し

つけがましきは、頭の中でがんがんと鐘を鳴らすようで、不快感という残響がふつふつと苛立ちを募らせた。

誰がやったのかとキルケに問い詰めたら、すぐに彼女は答えた。

「トキアキの仕業だな。ふむ。奴の姿はまだ見えぬな」

トキアキと聞いて、少しだけ納得した。会った時からちくちくとこちらの素性を尋ねてきた。距離を置いても気づいていないのか、それとも気づいてわざとなのか、近づこうとしてくる。

だから昨日、はっきりと距離を取った……つもりだった。

「もしかして、その仕返し？」

その可能性に気づいたのは、この瓦礫の丘にたどり着いた時だった。ともかく、片付けの場所にいたくなくて、逃げてきたのだ。

丘の上から掃除の様子を眺めている。次々に現れる見ず知らずのCB達が、瓦礫除去に加わっている。アーベンロートが派遣したのだろう。大量のカーゴや、竜、巨人型のCBのエルが現れては、瓦礫をのけていく姿が目の前にはあった。

ゆっくりと、瓦礫がどけられていく。

ゆっくりと、建物が修復されていく。

その有様に、悲鳴を上げなくなる。

けれど言葉が出てこない。悲鳴を上げたいのは確かなのに、それが明確な意志にならない。いくつもの言葉が一緒に出てきそうになって、咽を塞いでしまう、言語化を拒まれる、そんな感覚。

もしもこれが昨日の仕返しなら……。セルニアは拳に力を込めた。トキアキをひどい目にあわせたい。後悔させたい。

善意だと思っているなら、それは間違いだと徹底的に突きつけて。悪意で行っているのなら、彼の駄目な所を一つ一つ指摘してぼろぼろにしてやりたい。

どうやればトキアキに会いに行けるだろう。いや、どうやっても会いに行けるはず。ここから離れるつもりなら、エクに行けば、いや……それこそが、トキアキの狙い？ それだったら、ここを離れる事だって畏だ。

「罨？ 罨って？」

自分は何を考えているんだろうと、ふと、小首を傾げた。昨日の仕返し、余計なお節介、でも、そんなことをして、何になるんだろう。

ふとした気づきに、怒りの蛇が巢の奥へ引つ込んでしまう。そのままくると、頭の中で表裏が反対になる感触。

「そっか」

自分はトキアキの事をわかっていないと、そう気づく。

トキアキはCBではなく人間で。意識共有も、記憶の同期もした事が無い。近づいて、深く話した事も無い。話す前にこちらから距離を置いたから。

わからない。わかる余地がない。

前提がざらざらと、砂のように崩れていく。

キルケもエルンストもコレットも、誰もが一度は意識や記憶を重ねたことがある。セルニアと共有したことがなかったとしても、別の誰かとしたことがある。そしてそうすれば、間接的にセルニアの事もわかってしまう。

だから皆、同じように距離を取り、同じように触れずにいる。

共通の理解が暗黙の了解の土台を作って、必然的にセルニアは孤立に成功した。

けれどトキアキは人間だからわからない。

わからないから、争う事になる。

この、海底都市が滅びたように。

また、あれを繰り返すのかと。凍り付くような発想に至る。

思い出したくもない景色が脳裏をぴりぴりとかすめていく。赤く焼けた景色、炎、巻き起こされる風と飲み込まれる悲鳴。全てを飲み込む、天井を貫く轟音。世界を飲み尽くす白い瀑布。

その絵を、引き裂く。しわくちゃの紙に描かれた絵をびりびりとちぎるようにして、記憶を細かく断片にして、思い出せないくらいに捨てていく。

けれど、捨てても捨てても、目の前にはうずたかく積まれている。灰色の廃墟。手にとってもわからないくらい粉々に砕かれているのに、確かに過去はあったのだと、無数の瓦礫が告げている。

それを手にとって、

投げ捨てて、

手にとつて、

投げ捨てて。

それを繰り返して繰り返して、けれど繰り返す度に、きちり、きちりと体の奥が軋みを立てて。

いつかは自分も、この景色のどこかに埋もれるのかなと、そんなことを考えたときに。

瓦礫が手元から落ちていき、斜面を転がり、あの人間の頭にぶつかった。

そう。今足音を立ててやってきた、この男が。

トキアキの顔をじっと見る。もう一度、確認するように、ゆっくりと全体を確認する。

………けれど、わかる事は先ほどと変わらない。不安を湛えた瞳以外は、まるでCBのように凍っている。

彼の言った言葉を考える。

何故こんな事をしたのかと問えば、気になったからと言う。

もう一度尋ねたら、セルニア自身が言った言葉を理由に挙げた。

この景色を見るのが辛い。そんな事を言っただけと、指摘された方が、しばらく考えなくてはならないような言葉を。

けれどトキアキは誤魔化すことを許さなくて、更に言葉を続けてくる。逃げ場がもう他にないからと、好きな風に追い詰めてくる。

けれど本人は追い詰めていると、分かっているのか。

逃げてもいいし、考えなくてもいいし、間違えてもいい。

そこまで肯定してくれるのに、今逃げている自分を肯定してくれない。傷つきたくないから逃げたのに、それで傷ついてどうすると、慰めとしては間違った、正しい追い詰め方をしてくる。

気を遣ってくれているのはわかる。こちらのことを、考えてくれているのも。もう、最初に片付けの風景を見たときのような苛立ちはセルニアの中から溶けて無くなっていた。

けれど、だからこそ、その言葉がずきずきとセルニアの中に突き刺さる。

善意だから、そして怖がっているから、自分が間違っているかも知れないと不安になりながら言っているとわかっているから。

それを分かっている、それでも、

『違うだろ。逃げて傷ついてるっていう事は、本当は　逃げたくなかったんじゃないか？』

そんな事を口にした。

逃げて。立ち止まって。間違えて。それでもいいけれど、それはしたい事じゃないんだらうと、目を逸らしていた事実を突きつけてくる。

きっと、とセルニアは考える。

そんなこと無いですよとか、気を遣ってくれてありがとうございませ、と言えば、それなりにトキアキは立ち止まる気がする。……

いや、それは昨日までのトキアキか。今日は皆をけしかけて、ここまで追い詰めてきて、その上で踏み込んできているのだ。逃がす気があるのかどうか、ちょっと怪しい。

それでも、逃げようと思えば逃げられる。黙っているとか、そうですねと言って沈黙するとか。

けれど、と正面の景色に目を向ける。

何頭もの竜が大きなカーゴを引っ張っていく。巨人が瓦礫をどけていき、ドール達も瓦礫運びにいそしんであちこちをちょこちょこ歩いている。

こんなに動くモノのある景色は、久しぶりで。

それが、少しだけ、過去を連想させた。

「私、そう思われてたんですね」

ゆっくりとセルニアは口を開いた。

けれど、そこから先の言葉が上手く続かない。何を言おうとしているのか、自分でもなかなかわからない。

だからゆっくりと、記憶を整理していく。

思いつく事、考えている事、渦巻いているモノ、目を逸らしていたモノ。

自分の周りではらばらに散らばっている過去の破片を、一つ一つ手に取っていく。

その一つ一つが、手にする度にずきりと痛む。

痛みから目を逸らすように、セルニアは口を開いた。

「……トキアキさんが、私の事をいろいろ考えてくれてるのはわかりました。……うん。少し腹も立ったけど」

「ごめんなさい」

「え」

いきなり謝られてしまった。

こちらが驚くくらい、トキアキはすぐに頭を下げていた。

「なんで謝るんですか」セルニアは困惑を隠すようにくすくすと笑った。「でも、最後の方は分かったんですよ。トキアキさんは、私を手伝ってくれたんですよね」

「いや。そういうつもりだったけど、うまくいった自信が無い」

それは言い訳？ 謙遜？ それとも……。一瞬で頭の中が疑問の欠片でうまってしまい、それを隠すように微笑を続ける。

「大丈夫ですよ。本当は、頬をびんたしてそのあと蹴っ飛ばしてから立ち去ってやろうと思ってたんですけど、今はその気がないですから」

「そういうのもあるかなあとと思ってた」トキアキは言った。「押しつけがましいとも思ったし、勝手な事をしてるとも思ってるし、それで不快にさせたりするとも思ってた。単に腹を立てられて終わりになるかも知れないとも思ってた」

「あはは……」ほとんどあたりだった。「でも、ありがとう……ございます」

「んー」

トキアキはわずかに浮かぬ顔。こちらが誤魔化しているという事に、何故か気づいているみたいだ。

「私の事は気にしないで下さい」

「そう言つて気にしないはずがないだろ」

「んー。でも私の事を気にしても……」

「もうしてるから仕方がない」トキアキはふんと鼻を鳴らした。「気になった。どうにかしたいと思った。思ったから思いつく手は全部打った。それが全部裏目に出るかもしれないと思つてここまで突っ込んだ以上、後戻りも出来ない」

「………なんでそこまで捨て身なんですか」

「いや、捨て身つていうつもりは無かつたけど」

「三度目になりますけど………なんで、こんな事をしたんですか？」

セルニアは少しだけ考えて、もう一度だけそれを聞いてみる事にした。

皆に声をかけて瓦礫をどけたのは、自分がこの景色を辛いと言つたから。

どうして自分を放っておかないかは、トキアキがこちらを気にしているから。

でも、そうじゃなくて………。

「どうしたいか………正直に言つたら」

トキアキは口を開き、そして小さく息を吸い、

「セルニアにもエクに来て欲しいと思つた」

その言葉を、染みこませてきた。

「どうして、ですか？」

「こういう形で別れるより一緒に居てくれた方が嬉しいし、ここで別れるのは寂しいからだ………、と思つ」

「………あ」

体の動きが止まる。言葉がだせなくなる。頭の中に積もった欠片がぱちりぱちりと音を立ててはまっていくな。

目を逸らしていた正体。粉々に砕いてわからないようにしていた最初の思い出を、取り戻す。

「……ああ」セルニアは微かに、顎を持ち上げた。「そっか。………わかった」

「え？」

「ずっと、この景色を見ていて、もやもやしてたんです。そのあたりが。でも………わかったかもしれない」

「もやもやの理由？」

「うん」

こくりとセルニアは頷いて、そっと目を瞑る。

すごく簡単な結論。

「だけど、だからこそ、理解したくなかった、もう終わってしまった思い出。」

「私の主はこの街の市長だった人なんですけど。……やっぱり、別れることが」

別れることが。そこから先が、言葉になることを拒んでいる。

けれど、言わないと。

この人は逃げてもいいと言った。考えなくてもいいと言った。間違えてもいいと言った。

けれど、辛いままでいる事だけは、きつと許してくれないし、何より、ここまで付き合ってくれたのだから、言っつて、納得してもらいたい。

……このまま、別れるのが寂しいと言っつてくれたこの人に。

きつく瞑つた目を開く。トキアキを正面に見据えようと意識する。そして、

「別れることが、嫌だっつたんです」

その答えを、口に出した。

がらがらと、どこかで瓦礫の崩れる音がする。その音に合わせるようにして、せき止められていた言葉が一気に口を突いて出た。

「嫌だっつたんです。別れなくなかった。離れたくなかった。残され

たつて認めるのが嫌だった」

だから最初は、目を逸らすことすら考えずに、滅びた街の中を歩き回った。

そして、生きているCBと人間を捜して、助け出して。

そうしたら……この街の長だったあの人が、声をかけてくれると祈りながら。

誰かを助けたいんじゃないくて、

自分が救われたくて。

けれど。助けられる者を助けて終えたら、再び途方に暮れてしまった。

そして再び向き合わされる。

もうあの人には会えないという、現実と。

「それでも……別れたくなかったと、そう思うだけならまだ大丈夫だと思う。でも、別れるのが『嫌だ』って、その事に気付いたら、多分どうしたらいいかわからなくなると思う。……だって嫌だなんて言っても、もう別れてしまってるから、どうしようもない」
だから、どうしようもない事から目を逸らしたくて。

思い出をばらばらに砕いて、もうそれだけではわからないようにして。

片付けようと、仕舞おうと、腐心して 何一つ片付けることが出来なかった。

「瓦礫除けるのと同じか」トキアキは言った。

「うん。本当のところを考えないようにする言い訳」セルニアは苦笑する。「だからみんな気を遣ってくれてるとか、優しいとか、そういうのは分かってるけど。……やっぱり、うまく受け入れられなくて」

その気持ちは、やっぱり変わらない。

何から目を逸らしていたかは気づいても、それを受け入れる事はやっぱり難しい。

だから、ゆっくりと首を振ってトキアキを見て、こう言った。

「こんな私は間違ってるし、トキアキさんが思うほどの価値はないと思うから……。そんなに気にしなくていいんじゃないかな」

「そこに持っていくか」トキアキは顔をしかめた。「価値とかはよくわからないけど、別に間違ってるでもいいと思う。それにそもそも、間違ってるようにも見えない。自分の気持ちを抑えることは悪いことか？ 八つ当たりしないで笑っていることは間違っていることか？ セルニアは十分に立派だし、俺だったらそう言うときに不満をまき散らすか黙りこくるだけだから、それに比べたら充分だと思える」

「……………」

「もしもそれが汚いっていうんなら、それでもいいと思う。それが許されなかつたら俺も生きていけない」

「そんなことはないんじゃないかな。トキアキさんは自分の事を悪く言いすぎだと思う」

「人の事言えるのか？」

「……あはは」

苦笑する。言われてみれば、そうかもしれない。

「できれば考えてみて欲しい」トキアキは言った。「俺としては、セルニアが自分の気持ちに整理がついてくれればいいと思う。その上でもし、エクに来てくれれば嬉しい」

「ありがとう」

セルニアは笑って、一步だけ距離を取る。

トキアキはそのぶん、不安に顔を陰らせる。

「でも、ちよつと考えさせて下さい。……やっぱり、すぐには答えが出せないから」

何から目を逸らしているかはわかった。

かつての主と別れたくなかったという気持ちを認めたく無かったという事は認める。

けれど、それにどう折り合いをつけるかは……もう少しだけ、時間が欲しい。

一つ一つ、思い出を手にして。
一つ一つ、過去を考えて。

そして……全てに整理をつけて、結論を出すために。

「丁度いいですし。私も……みんなを手伝ってきます。いいですか？」

「わかった。俺も手伝ってもいいか？」

「あはは。トキアキさんが始めたんじゃないですか」

そう言っつて、セルニアは歩き出す。

歩みはゆっくり。瓦礫の斜面は足音一つ一つにぎしぎしと軋む。

少し驚く。こんなに不安定な土台に立ってきたのかと。

けれど、こんなに不安定になっても、ずっと自分を支えてきてくれたのだ。

だからこれから。

その意味を、一つずつ考えていく事にしよう。

セルニアの姿が見えなくなるまで見送って、トキアキは思い切り思い切りため息をついた。

「はぁー。疲れた」

うまくいったのか、いつてないのか。

まあ、前向きにはなっつてもらえたかなと、最低限の目標の達成を確認する。

これから先の選択は彼女次第だ。できれば、エクに来てくれれば嬉しいけれど。これ以上打てる手はもう持っていない。あとは、セルニアがこれまで培ってきたモノと、そしてこれから培いたいモノに、どう折り合いをつけるか次第だ。

そこまでは、トキアキにはどうしようもない。何しろこちらは、未だに彼女の過去を詳しくは知らないのだ。

半端な距離からの慰め。解決の曖昧な励まし。

無理に追い詰めたただだったかもしれない。そんな不安が胸をよ

ぎる。

「さて。それじゃあ俺も掃除を手伝いますか」

これ以上ここで愚痴をこぼしていても仕方がない。すでに半日近く遅刻しているのだから、そのぶん働かなくてはならない。そしてぐつと膝に力を込めると、腰の辺りで痛みを感じた。違和感に支えられてポケットに手を突っ込めば、そこには、黒ずんだ瓦礫の欠片があった。

戦争の跡。破壊の印。現実として、心として、思い出の名残が積み重なった山。

部屋が汚いままでは新しいモノを積み込めないけれど、もう自分一人では片付けられないくらいにうずたかく積まれてしまったなら、どうすればいいのか。

そういう時は、掃除は大勢で、一気に全部を片付けてしまっに限るのだ。

これからも付き合うモノは、埃を取って置き直し、これまで支えてくれたモノは、感謝と共に捨てていく。

そうして、遺されたまま、整理のつかなかった過去とか思い出とかを一つ一つ手にとって整えて。

広くなったその部屋に、新しい何かを招き入れるために。

……セルニアは、新しい何かを招き入れるくらい、心を整理できるだろうか。

できたらいいなと思いつながら、トキアキは視線を挙げた。ケケツトがゆつくりとカーゴを運んでいる。

「……でりゃっ」

そこに、勢いよく瓦礫の破片を投げつけた。

緩やかな弧を描いて、カーゴの上に瓦礫が落ちる。ケケツトがちらりとこちらを向いた気がしたけれど、気づかないふりをした。

ざくざくと瓦礫を踏みつけながら、トキアキはゆつくり歩いて行く。

そして翌日。

サラミスの掃除は一日で終えて、そして移り住むモノはさっさと移り住んで。今日は移動開始の日。

トキアキはあのあと寝坊を散々叱られた。タマやディックはもちろんのことキルシュトルテにまで「あれはどうかと思った」と非難された。おかげで肩身の狭い一夜を過ごし、今日は目の下に隈を湛えていた。

…… 極端から極端に走るなあとは、タマの弁。

しかし、今、海の家の前にて、椅子に座り、ばたんとテーブルに突っ伏しているのは、何も眠いからという理由だけではない。

「余計な事したかも」

「今更へこむか」

「……………」

ぺしぺしぺし。尻尾で頭を叩かれる。白猫の遠慮無く容赦ない金眼が、うわーめんどくせーと告げていた。そんな視線を頬にぐさぐさ突き刺されつつも、トキアキはテーブルにぺたんと頬をつけて倒れていることを止められない。

ちよつと後悔していた。思えば、あれでセルニアの説得に失敗していたらどうなっていたのか。自分勝手な事をして相手の気持ちにずけずけふみいって、成功する自信もないくせに気に入らないからと投げ所を無理矢理奪って。うまくいくなんて保証も無いのに、勝手な事をして。責任をとれるかどうかすら考えずに、関わって。

その結末として、彼女はどう思ったのだろうか。

それを考えると、心臓の重さが三倍になったみたいに体の中が出鱈目になる。無理矢理送り出される血液がぶちぶちと肌から吹き出そうとするみたいに、所構わず全身が痛くなる。

なんだって自分はこんな考えなしなんだと、心の中で舌打ちした。けれどそれだけではこらえきれずに、口からため息をついてしまった。

あれ以来、セルニアの姿は見ていない。エクにやってきたのかどうかも、怖くて聞けていない。我ながらチキンである。

「まあ珍しくがんばってたし、ばてたんだろ」

そういうディックは、しかしでもこれはドーよという視線を遠慮無くぶつけてきている。彼のポジションはいまいち意味不明だ。

「それで、うまくいったのか？」

で、一番聞きにくいことを聞いてくるのはアルテミスである。トキアキは微妙な顔で、首を傾げる。

「最低限の目標は達成したと思う。あとは……」

昨日の大掃除が終わったなら、アーベンロートは身内と共に手際よく引き返していった。もしもそのときあちらに行ったのでなければ、セルニアが行く先はエクしかない、と卑怯な考えをこねくり回す。もつとも、セルニアがいきたいと望んでくれれば、だが。

その点は……どうなんだろう。

励ましはした。支えようとはした。けれどもうまくいったという保証はないし、彼女の中でも、心の整理はあるときはまだついていないようだった。

心を塞いでいるモノが何かはわかった。けれどそれとどういう風に折り合いをつけるのかは彼女自身の問題だ。大掃除を経て、一体どのようなになったのかは、本人のみ知る所である。

我ながら、無責任だよなあと少しへこむ。一応、最悪の場合キルケがフォローしてくれるはずなのだ。

「やることをやったのに何故へこむ」アルテミスが聞いた。

「自己満足は得られたけど、結果がついてくるとは限らないだろ」トキアキが答える。

結局の所、結果はいつも未定なのだ。望んだ答えが得られるかは、予想が出来て、確信があつても、断言することだけはできないのだ。だからこそ、結果の到来は期待だけでなく不安を生む。

けれど、その不安を想像してなお、彼女の何かを手伝う事が出来たらと思った。

それは果たして出来たのか。意味はあったのか。不安に、体の内側が微かに震える。

「ああ。きたよ」

タマの声に面を上げた。

「、あ」

……セルニアが、緊張した面持ちで道の向こうから歩いてくる。どこか不器用な、一步一步が不安定な進み方で、何かを怖がっているような歩き方だ。

けれど、彼女がここにいる、という事は……。

……そうして彼女は、トキアキ達の前で立ち止まった。

緊張に、音が消える。

「あの……」

言葉に詰まる。

全員の眼差しが、彼女に向けられていて、それが恥ずかしいとも言うように、セルニアはゆっくりと微笑んだ。

口を開く。

そつと、押し出すようにして、

それでも柔らかく、言葉を紡いだ。

「これから、宜しく願います」

ぺこりというお辞儀と共に、始まりの宣言が耳を打つ。

緊張に、かじかんでいた心臓がほつととして鼓動を取り戻す。椅子に座っていたことを、トキアキは今こそ感謝した。立っていたら、安堵に膝が震えていただろうから。

よかった。自分は今度は、間違えずに済んだのだ。

もしかしたら誰かのフォローがあったのかもしれない。本当は失敗していたのかも知れない。けれどまあ、そうであったとしても、この結果だけが今ある現実だ。

反省のしどころはあとに持っていこう。

今はまず、未だ緊張の気配も濃い彼女に、準備していた返事を
する方が先だ。

それでは、始まりを出迎えるに相応しく、やわらかな声になるよ
う気をつけて。

せーの、

「いちらーんぞ、よろしく」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2360q/>

遺海の箱庭

2011年8月22日16時56分発行